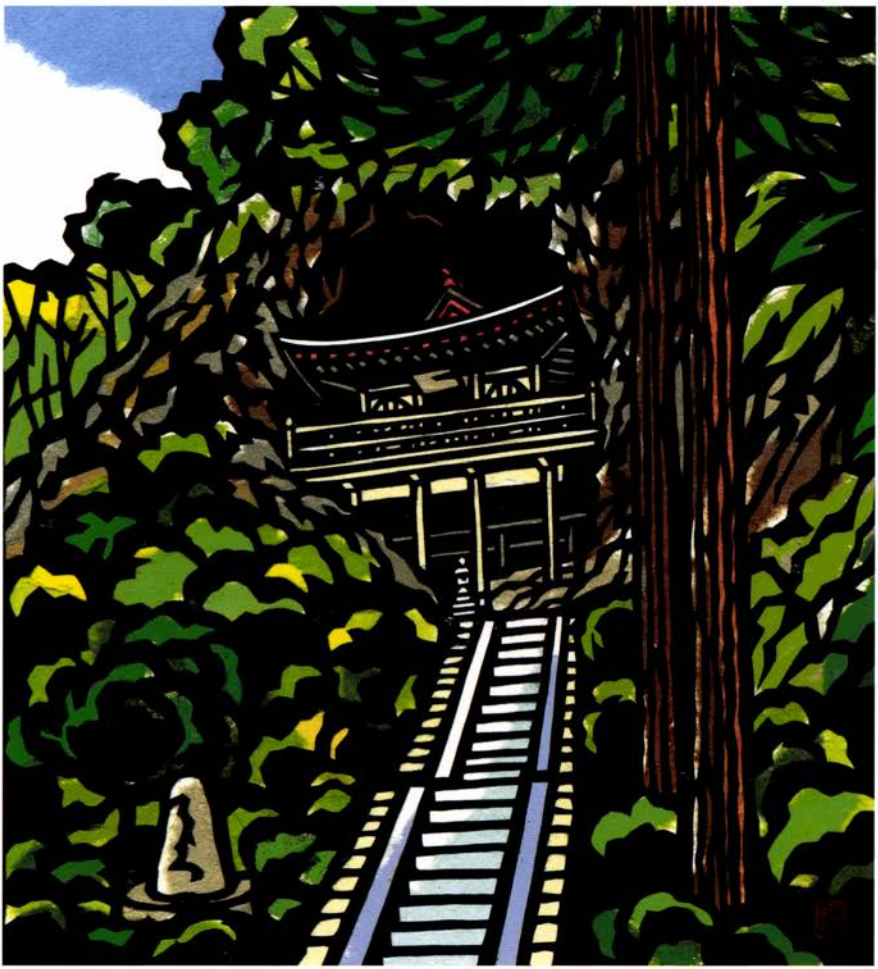
川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十六年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻一〇四五号



日川協加盟

No.1045

六月号

第二十回 川柳塔まつり

とき　十月四日（土）

ところ　ホテル・アウィーナ大阪

◎詳細は四月号表紙裏をご覧下さい。恒例によって同人総会・各賞表彰・記念句会・懇親会を開催します。同人総会以外はどなたでも参加できますので、ふるってご参加ください。

残暑見舞広告

本誌八月号に掲載する残暑見舞広告を募集いたします。広告のスペースと掲載料は左記の通りです。巻末の綴じ込み**残暑見舞広告原稿台紙**に原稿を貼付（又は記入）してお申込下さい。よろしくお願い致します。

★個　人　一口　二〇〇〇円

★団　体

①1/3頁　六〇〇〇円　③2/3頁　一二〇〇〇円

②1/2頁　九〇〇〇円　④一頁　一八〇〇〇円

▼原稿締切　六月二十日

川柳塔社

自費出版　川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美研アート

〒530-0022　大阪市北区浪花町９番４号
TEL（06）6372－1178
FAX（06）6372－1196
E-mail：bikenart@wonder.ocn.ne.jp
bikenart@ea.mbn.or.jp

川上三太郎先生

小島蘭幸

薄紫色の藤の花が咲くと、私は慈愛に満ちた笑顔の川上三太郎先生を思い出します。

昭和43年5月12日、広島県西条町で第7回西条川柳大会が開催されました。三太郎先生は講師として講演と課題「七色」の選をされました。大会を主催した賀茂川柳会会長は、酒都西条で造り酒屋をされていた菅生沼畔氏で、川柳を愛する情熱で先生を東京からお招きされたのです。

ご先祖はよくぞ遺したうまい酒　沼畔

竹原川柳会一行は、竹原をマイクロバスで出発、途中藤の名所、三永水源池の美しい藤棚を見学して、いざ大会場へ…。会場では、三太郎先生に付き添い、何くれとなく世話をされている方がいました。着流し姿の寺尾俊平さんでした。三太郎先生は終始ご機嫌でしたが、各選者の披講が始まると、ビシッと厳しい表情になったのです。その先生が一瞬ニヤリとされた作品がありました。

やめるともやるとも言わぬ会費切れ　静水

課題は会費でした。当時二十歳になったばかりの私は、大会が終わるまでずっと三太郎先生の表情を観察していたのです。

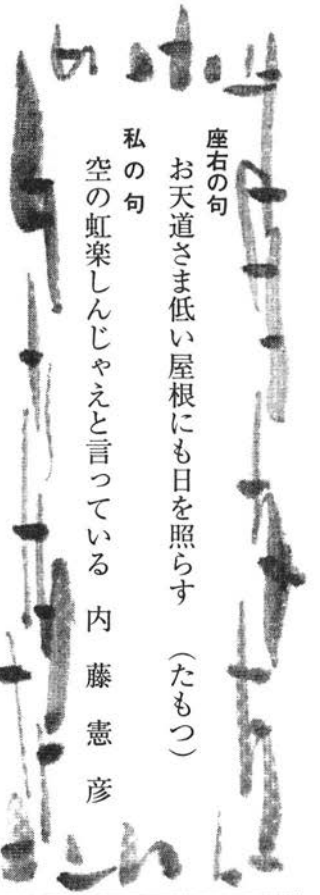
おやこれは砂漠の虹だ乾いてる　俊平
孔雀満ちて七色に身じろがず　三太郎

課題「七色」の特選句と先生の軸吟です。大会終了後、三太郎先生を真ん中に竹原川柳会の皆様と一緒に記念写真を撮りました。慈愛に満ちた笑顔はこの時のものだったのです。

大会翌日、沼畔氏は、三太郎先生と三永水源池の見事な藤棚の下で酒宴を開かれ、その後、呉市の音戸大橋の絶景と吉川英治の石碑を案内されたそうです。

川上三太郎先生は、昭和43年12月26日にご逝去されていますので、長距離の川柳の旅は広島が最後ではなかったかと思われます。

薄紫色の藤の花が今日も美しく風に揺れています。



座右の句

お天道さま低い屋根にも日を照らす　（たもつ）

私の句

空の虹楽しんじゃえと言っている　内藤憲彦

川柳塔　六月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「若桜町・不動院岩屋堂」

■巻頭言　川上三太郎先生……小島蘭幸…（1）
句木の修復……森山盛桜…（2）
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…（4）
川柳塔の川柳讃歌⑭……木津川　計…（43）
自選集……（44）
温故知新……（47）
水煙抄……川上大輪選…（48）
新川柳鑑賞㉘……麻生路郎…（69）
■エッセー　後ろめたさの一分の理……木津川　計…（70）
誹風柳多留一二篇研究 12……（72）
英語 de Senryu㉚……吉村侑久代…（74）
西尾　栞句抄……（75）
江戸を楽しむ⑱……小栗清吾…（76）

句木の修復

森山盛桜

鹿野町に川柳街道というのがある。現在ここには百本以上の句木が並んでいる。句碑も数基ある。

幾つか紹介させて頂くと、句碑では

三日月があんなに光るのも勇気　薫風

校門を出ると一年生走る　紫香

萩の道さくらのみちもともだちだ　恵美子

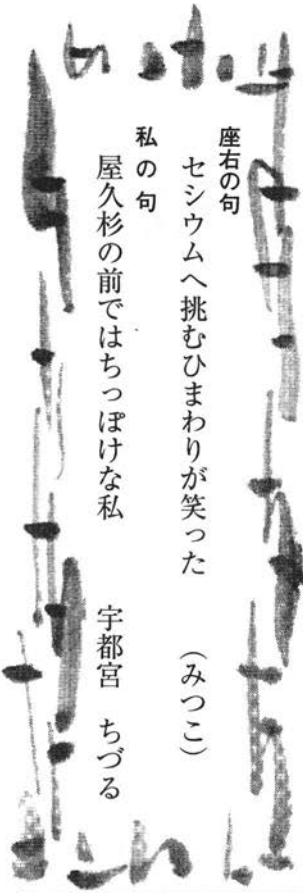
雪達磨春をむかえに行ったきり　螢

花になり実になり踊り抜く系譜　諷人

句木としては

ひとりぼっちになってしまったけど走る　蘭幸

愛染帖……新家完司選……(77)
檸檬抄「美人」……竹治ちかし・大内朝子共選……(81)
一路集「三角」「プレイ」「怪しい」……指宿千枝子選……(84)
……丹後屋　肇選……(85)
……森松まつお選……(86)
民族の詩歌(24)……三好専平……(87)
初歩教室「あっさり」……山口光久……(88)
川柳塔鑑賞……牧野芳光……(90)
水煙抄鑑賞……古久保和子……(92)
せんりゅう飛行船㊷……新家完司……(93)
『麻生路郎読本』余滴(21)……桒原道夫……(94)
五月本社句会……(98)
句会燦燦……井上一筒……(102)
各地柳壇(佳句地十選／中居善信・政岡未延子)……(103)
六月各地句会案内……(116)
柳界展望……(120)
■編集後記……朱夏・いさお……(122)



座右の句

セシウムへ挑むひまわりが笑った　（みつこ）

私の句

屋久杉の前ではちっぽけな私　宇都宮　ちづる

人も実も爆ぜる大きな空の下　汲香

あの丘は俺を見つめている先祖　喜与志

などがある。

句木は建立から十年も経つので、字が翳んでしまっているが、予算的な事もあり修復が進んでいない。時々クレームを聞くので、一念発起、自分でやろうという気になった。この件は、昨年の大会で中川支所長が公言されたので、以後は気持ちを前向きに持っている。

しかし、これが誠に厄介。木が瘠せて文字が浮き出ているので、これをなぞって行く。螢さんの流麗な書体なので、気を遣いながらのワンタッチずつ仕上げて行く。一本の所要時間は約一時間。当初花見までにはと考えたが、秋までが関の山だろうか。

みか月大会までには修復ができあがるよう一所懸命努めている。

川柳塔

小島蘭幸選

哀しみを踏み台にする川の幅
深々と今朝は会いたくない帽子
白い皿みんな愛してくれました
噂には左の耳が伸びていく
むらすずめ浮いた話が好きらしい
金魚鉢遠い男が翻る

松江市　川本　畔

サキソフォンが故人のように佇んで
音楽葬風と手拍子鳴り止まず
ハミングでぎゅっと堪えている涙
たましいはあいにく留守にしています
身代わりにぽろんと義歯が転げ落ち
ショッピングカートに勢いのない四月

西宮市　吉井　菜々子

うす闇の世相笑いの種探す
やがて影絵の向こうに消えてゆく私
世界中を食べて和食にたどり着く

吹田市　山本　希久子

料理には一家言持つ塩胡椒
有田焼きの皿に料理が負けている
煮崩れてしまった鍋底の記憶

弘前市　髙瀬　霜石

刺し子着をまとえば北の血が騒ぐ
脳味噌の虫干しをする本を読む
10回は書いたな手術承諾書
それぞれが女子会に行く三世代
バリウムは拷問 胃カメラも拷問
ＡＥＤあれはわたしのためにある

宇部市　平田　実男

小骨まで取られ魚の味がせず
飾うたら半分落ちる永田町
本当は横一線でない入社
クラス会タイムカプセルかも知れぬ
家庭内別居外ではペアルック
境界の杭へ愛嬌などいらぬ

大阪市　古今堂　蕉子

飛ぶ友の下で卵をあたためる
賢い人を立てる為に生きている
やわらかくなったメロンの愚痴を聞く
評論は出来て実践には向かず
さくらさくら一年先は知りません
シクラメン死ぬまで女と思ってた

和歌山市　木本朱夏

万華鏡くるりと春は満開に
文脈の乱れは春のメランコリー
文殻のひとつは春の溜め息か
花冷えの赤い錠剤てのひらに
しみじみと落花盛んの中に佇つ
雑音の中でさくらは散りました

橿原市　居谷真理子

また闇に戻っていったお雛さま
三月にお手玉されている心
春の鍵どこに　風のふところに
酷暑厳冬年輪が美しい
床柱風の愛撫を忘れたか
今はまだ甘噛みだけにしてあげる

尼崎市　山田耕治

絵葉書の下半分で行き届き
好きなことするため時間無駄にせず
雛段を出せば襖が明けられず
ご縁ですなと行き帰りお会いする
こんなときに一句浮かんだ歯科の椅子
五年生の頭男の子の匂

堺市　桒原道夫

汗が目に入る充実感に満ち
水掻きなら僕にも少し生えてきた
蜂の巣が太りつつある一学期
駅前のサ店で捗っている仕事
同じ物ばかり食べてる旅半ば
アメリカ的正義何度も陽は昇る

出雲市　竹治ちかし

どこに足向けても恩を受けた人
北国はまだまだ雪という花見
アンテナを南に向ける花便り
剪定をしてから期待する　その後
一二三耐えて四月の花に逢う
同窓会血圧談義糖談義

鳥取市　福西茶子

口出さぬ手出さぬ金はちょっと出す
真夜中の静寂好きで夜型に
ふるさとに錦も税も飾れない
えこひいきした先生は忘れない
週五日再就職は孫の守り
ゆで卵出来て一端主夫の貌

前祝ばかりで上がらない梲
古本の山にわたくしの居場所
真心を破って捨てたことがある
嬉し涙で磨いた球は美しい
ロボットのポーカーフェイスには勝てぬ
桐一葉はらり別れの手紙くる

和歌山市　武本碧

春爛漫杖を頼りに花巡り
価値観の違いは金の使い方
保護色は紺とグレーに決めてある
ほどほどという物差しに無い目盛
原点に戻れる人にある余裕
春風に生命線を遊ばせる

大阪市　小谷集一

増税にやはり緊張感はある
一粒が芽吹けばいいのこぼれ種子
この人と心に決めた日の記憶
ほどほどに愛も発酵するらしい
生きるため自分を好きになっておく
誰とでも手はつなげます花の下

池田市　栗田久子

疑問符が積もり積もって石になる
丹精の旬を並べた道の駅
プライドを脱いで長靴履いてます

枚方市　伊達郁夫

豪快な返事と思う大欠伸
よそ見して自分の影に蹴躓く
思い切り笑う涙を溜めて置く

河内長野市　山岡冨美子

糸車紡いでいます愛その他
ときめきを春の花屋へ買いにゆく
ハルカスで明日のかたちが見えますか
汚染水ひたひたひたと漁火に
戻り寒繭からでたり入ったり
廃校の隅に元気な土筆の子

松原市　森松まつお

三寒四温だらだら続く春の風邪
体調がもどり口数増えている
町内に一軒もない喫茶店
駅までの間に五軒ある歯医者
川掃除したのにゴミが捨ててある
ばあちゃんの割烹着には罪はない

奈良市　大久保眞澄

家族葬でエエやろと子のマジな顔
かじられた脛に年金のかさぶた
桜の国の九月入学なんて野暮
ありがたく以下同文に潜り込む
街頭のティッシュ8パー分もらう
気位の高さで猫に負けている

鳥取市　両川無限

養蜂の旅を急がす花便り
紙屑の中に埋もれていた本音
ミステリーツアー麻酔が効いてくる
遠い日の私を探す途中下車
鍬を振る亡父の挽歌を聞きながら
砂漠化が進むヒト科の愛の飢餓

松山市　古手川光

安心して病気も出来ん世に向う
九条が消えると日本が消える
振り向くとだーれも居ない車間距離
同郷の集いで故郷を歌う
削れるものもう家計簿が無いと言う
紙の辞書おまえも眠りこけている

鳥取市　岸本宏章

即処刑裁判長は三代目
人口が減っても道も橋も要る
公平な家事分担を強いられる
整頓が過ぎたか増えた探し物
蝉の羽根余命十日のためにある
税収の倍の予算が怖くなる

岸和田市　岩佐ダン吉

向かい風受けて私がしゃんとする
てっぺんに登ると見えぬものがある
人間にとことん凝って生きてやる
くどくても九条だけは守りたい
多数派の科白に眠くなってくる
傷だらけ選んだ道と言い聞かす

高槻市　初代正彦

その暇が老人力を研ぐチャンス
交差点の青はすぐ黄に変わる色
野暮用で惚けてる暇もない平和
非力でも手抜きすることない輪ゴム
曖昧を許さぬ孫に教えられ
申告書手間暇かけて払う税

豊中市　水野黒兎

囀りは天からぼくは地を歩く
かりかりと瓦せんべい路地の春
脱脂粉乳で育った世代骨がある
圏外に話の弾む妻と娘と
放射能いまだに歪む日本地図
散るも華さくら吹雪の好きな歳

札幌市　三浦強一

慰めが欲しくて転ぶことがある
失敗の経験談で慰める
締切りへ助けられてる消印可
エンピツで綴る自分史五七五
自分史にああマンネリの語彙並ぶ
捨て印を押して自分史書いている

鳥取県　竹信照彦

マイカーに乗らず池田へ兄見舞う
元気だった兄一年で影が無い
僕だってやがてこうなるぞと妻へ
久し振りにお上りさんになった
ハーブ園神戸見晴らすいいところ
迷うからあべのハルカスまで行かず

三田市　久保田千代

あったよね春の巣立ちの希望の日
誘惑に負けたその日の長いこと
乗り越した駅にもさくらちらほらと
十三年実らぬと言う柚子を買う
無軌道に生きて異郷の土となる
自然体に生きたが借りはきっとある

和歌山市　柏原夕胡

割れた茶碗の思い出が捨てられぬ
鏡拭く明日が晴れになるように
真っ黒を真っ白に染めあげましょう
泣き顔は見せぬレモンの丸齧り
仏壇の奥が騒がしい彼岸
お薬で腹いっぱいになっている

和歌山市　土屋起世子

ひと晩の雨で花見の旬逃がす
一年生脱皮はじめている校舎
喋らずに丸くなってる家族の輪
朝ドラを二度も見ている外は雨
五月晴れ堪忍袋よく乾く
地図読めぬ鳥が国境越えて来た

可児市　板山まみ子

間食をしない決意はすぐゆらぎ
不死身ではない証拠です花粉症
スギ ヒノキ時期をずらして泣かされる
白米を食べられる世に麦御飯
トップとは上手に嘘の言える人
五億円しないはずです大熊手

府中市　藤岡ヒデコ

花嵐試されている昨日今日
まず元気これも一つの子孝行
どうしてかたまの行事が重なった
一歩出す元気をくれる春の風
気にかかる事が淀んだまま春に
イエスノーはっきり言える落ち椿

出雲市　小白金房子

おもいやり呼んでよばれる農のお茶
碁敵も老いて杖つく春の庭
庭石に遠い先祖の名が残る
ハイハイの笑顔座敷をせまくする
四世代温み戴く白いめし
田舎道屋号で交す温かさ

東かがわ市　川崎　ひかり

不器用で愚直な父の足の跡
順序なら私夫の看取り人
生かされた事へ感謝の桜花の下
もう二度と戦車通してならぬ道
ふと余生十年保証の冷蔵庫

松山市　宮尾　みのり

風物の棚田へ金がかかり過ぎ
韓ドラで見栄も虚栄も教えられ
守秘義務を守って淘汰されていく
若い日の写真支えに背を伸ばす
万物の春だわたしも衣更え

大洲市　中居　善信

嗅ぎつける鼻は私の生まれつき
私のお守りをしてるポチとミー
順番の先を譲って生き延びる
結び目は何時でも切れるすれ違い
ブレーキが利かなくなったのか総理

西予市　黒田　茂代

歩けぬってつらい股関節病んで
股関節病むと体じゅう痛む
歩行不可私の冬がまだ去らぬ
人形浄瑠璃の遣い手阿波の主婦
満月の渦潮常と別の顔

高知市　小川　てるみ

知恵の輪が解けないままの花吹雪
投げ返す言葉の棘は抜いてある
木偶たちの私語が聞こえる夜の静寂
桜満開あの約束が胸に住む
早場米競う田んぼのトラクター

高知県　小澤　幸泉

帰る家残しておこう息子の巣立ち
歩くことただひたすらに血糖値
熟年のいのちを燃やす旅日記
鎮魂の流れを止める日を想う
腰痛がまた暴れ出す朝の寝床

唐津市　坂本　蜂朗

鏡台に今日の笑顔を審査させ
娘のお古着けてお洒落の仲間入り
体験談着ぶくれさせている月日
新聞に今日の日付をそっと聞く
年寄りと知ってよく来るいい話

唐津市　山口　高明

写経百巻つんでもむすめ還らない
喧嘩以後おとこ肝胆相照らす
鋏と思った子等も当て成らず
携帯を妻の柩に入れてやる
一食を抜いて年金慎ましい

熊本市　永田俊子

さくらさくら日本に生まれてよかったよ
さくらと対話今年も逢えてありがとう
夜桜に恋を深める道祖神
仰げば尊し昔と同じ涙出る
花見酒に花びらが落ちてくる平和

熊本県　岩切康子

会話から進んだ病感知する
命日に厳格だった父偲ぶ
改装は夫の意のまま依頼する
上出来の野菜盛りを分けて遣る
寒戻り散策の風強すぎる

札幌市　小沢淳

生き過ぎたなどとたわ言吐いている
道楽のつもりが趣味だ文学だ
二次会はコーヒー飲んで輪をたもつ
暗証番号忘れて全てパーとなる
迷い子札つけた私の乳母車

弘前市　浅田隆樹

昇任へ陳謝のし方練習し
一本のビールじゃ二時に目が覚める
雪解けは　遠い昔の水車小屋
勲章は無いが遺影に笑い顔
情で散る風では散らぬさくら花

弘前市　稲見則彦

今更といった手つきで酌される
古希迎えどんちゃん騒ぐクラス会
取り込んでまず確かめる訃報欄
老いらくの恋を包んだオブラート
傷ついた心に生きる思いやり

弘前市　岡本花匠

妻悩む記念原稿午の会
夕陽拝み励ましを得た至福貌
千の風に聴かされている永代経
春色の自負を曲げない猫柳
山桜咲いて見守る山の神

弘前市　今愁女

プラス税と値札ことごと替えられる
雪が消えサクラにバトン渡される
目覚めたらニュースが見れるリモコンで
せまい日本名物だけは事欠かぬ
はるかなるハルカス旅の日程に

弘前市　髙橋洋子

せっかちに信号ちょっとフライング
背伸びして足元揺らぐ他人(ひと)の前
傘寿越え頭に転がる先のこと
ふる里の桜を愛でる古稀の会
年会費納め今年も人の輪に

一斉に芽吹く津軽のウメ さくら
ポツポツとははの笑顔になるサクラ
恋の芽が色つきだした三分咲き
日本縦断ドミノ倒しになる桜
ライトアップされた桜に酔う二人

弘前市　福士慕情

再会へ開かずの窓が吐息して
もうだあれも遊んでくれぬ冬の砂
少しずつずれるラ音の夕間暮れ
非常口の灯りはいつも笑わない
転がった位置で拾った広い森

青森県　松山芳生

消費税の話で耳が疲れる
ブログでは有名人専業主婦
正しくは無くても面白い本音
いくつになったと聞かれる従姉妹会
時にはカラスの目線と蟻の目線

さいたま市　星野育子

戦死者の声か大海原の風
昨日からアンヨが出来た初曽孫
嘘泣きに続きがあった後日談
チクタクと言わぬ時計の正確さ
うるさくは言わぬ姑さんお見通し

東京都　岸野あやめ

雛人形ほのぐらき部屋なつかしむ
からっぽのひきだしさびし雛箪笥
雛納め達者なころの祖母のそば
春風に遠くのポストまで歩く
春の潮ベースアップの渦生まれ

東京都　まえでとよこ

買い溜めに衝動買いも含まれる
義理で行く葬儀で旧交暖める
満開に美し過ぎる四月バカ（大岡川花巡り　2句）
満開のサクラ従え屋形船
貴女にはつかず離れずいて欲しい

横浜市　小野句多留

人前で涙は見せぬ負け試合
閻魔でも見抜けなかった二枚舌
ユニークに生きて言われる変り者
特別に三途の川へ美女待たせ
燗つける妻もちょっぴり頬を染め

横浜市　菊地政勝

ホタルイカ捕れ浅葱もぐんと伸び
ありがとう言わぬ夫にある威厳
地獄見た人が仏になり還る
エンディングノート私にまだ無縁
まだ泳ぐつもり水着を二枚買う

富山市　島ひかる

犬山市　金子美千代

吉報が届く近くに子の赴任
期待せぬ事もたまにはある浮世
出勤の夫とダブル子の背中
女子会の花見オンナをせずに済み
花むしろ時代感じている桜

犬山市　関本かつ子

思うこと全部言ってはならぬ口
今以って子を案じてる古希の顔
終章の話になると前屈み
足し算も引き算もなく住める幸
大切な出合いを胸にしまい込む

愛知県　早川遡行

捜しても無いはずゴミに出しました
休日も当てにならない父の靴
生きているだけで汚している地球
簡単に酒を止めろと言うけれど
人前で化粧をしてはいけません

京都市　高島啓子

蜂に虻来て庭は花ざかり
水につけると生き返ろうとする昆布
家族葬多くて出番ない喪服
骨になるまでいいかげんだった
古本の中へ帰って行きました

京都市　藤井文代

深呼吸すると敗北したみたい
目で解る聞いてるようで聞いてない
フィルターにかけ直してる褒め言葉
身から出た錆も経験取り柄にと
言い過ぎと反省道を譲っとく

京都市　桝本宏子

赤いバラに負けぬオーラのかすみ草
骨粗しょう効く事しても骨粗しょう
汗と涙奇跡はあったゴルフ場
嫌われ者ところが家で好々爺
子にすれば母のいる家竜宮城

亀岡市　井上森生

老体を悟り切るなど無理なこと
老化ではなくてまだまだ熟す余地
喜寿の次いくつ寿越えるやら
いつまでも笑う元気のある老化
手応えを掴んで齢一つずつ

長岡京市　山田葉子

化けて化けてどれがホントの私なの
思いがけない出会いすべてが魅力的
春だ春だと雑草も伸びざかり
誰に似たのかやはりわたしに似たのかな
骨身削りしたのは当たり前のこと

廃校を知っていたのか桜舞う
学芸会どの児もみんな主役です
カードローンついに組めない歳になり
ポイントカードばかりで財布賑やかだ
一食はチャチャッと手抜きフライパン

八幡市　今井　万紗子

肩たたき目的がある孫の知恵
賑やかに浮世忘れて花見会
母さんの微妙な味を追いかける
夜の星見とれて悩み忘れてる
親の愛一人立ちして身にしみる

大阪市　阿野　壽美子

入学式ドームを借りる御代となり
首長く待った甲斐ありサクラサク
大阪城入学式の子で溢れ
桜満開人も満開天満橋
入学式母子満開のお堀端

大阪市　池上　清治

ほろ酔い気分ここは地獄の一丁目
初耳の振りして愚痴を聞いている
まだひとり味方がいると思ってた
柔らかな笑顔の裏の深い闇
スペードのエース持ってる振りをする

大阪市　井丸　昌紀

自分色新しく染め闊歩する
軽口のひとつ通じぬ仲たがい
身の丈の暮し目指すがすぐぶれる
生きる世に錯覚あって面白い
老樹からひこばえが出て春うらら

大阪市　岩崎　公誠

平だけに引き際などは考えぬ
札束を見るとうっとりしてしまう
血統に理系一人もおりませぬ
洗濯は二日に一回老い二人
口コミではやるお店はほんまもん

大阪市　江島谷　勝弘

七輪で焼いたサンマに恋をする
宴会は景気忘れて盛り上げる
五輪まで寿命しっかり伸ばしましょ
歩くのが苦痛となったタクシー代
負けん気が自分のミスをすぐ許す

大阪市　榎本　日の出

増税で人間ドックすべり込み
誘われてこれが最後と出かけてる
近頃は言った言わぬと会話増え
真央ちゃんの頑張り老いも張り切れる
春風に明日の倖せ運ばせる

大阪市　榎本　舞夢

大阪市　奥村五月

湯タンポをはずす日迷う八十路坂
紙オムツで頑固を通すおじいちゃん
自販機で妻に内緒のコップ酒
親離れ冷たい風が身に染みる
医者よりも薬詳しい友がいる

大阪市　大川桃花

レシートのチェックしている花の下
花の下眉間の皺が伸びてくる
青い目の孫に夢中のおばあちゃん
大きめの服あいらしい一年生
ふわっとした民意気ままな風任せ

大阪市　笠嶋惠美

勝ち組の人がどんどん先に逝く
これからを模索新米楽隠居
振り返る奇跡と思うことばかり
消去法死んだと思い悩まない
ひとつずつ封印切って自己主張

大阪市　神夏磯典子

五十年一緒に入った丸い穴
あけすけに喋って心開かせる
酒好きの仏にのます花見酒
次に会う約束へ痛いほど握手
百度石深い祈りに触れた艶

大阪市　川端一歩

母の日はお墓参りと決めている
老い二人野口英世で二日分
加齢ですか言われる前に言うてやる
足腰脳パーツが欲しい歳になり
暗黒の昭和のころと似て怖い

大阪市　熊代菜月

鰯雲思い出一つまた一つ
我儘は毎度のことと笑う夫(ひと)
今もなお師の面影を追って居る
強がりを言って自分をけしかける
冗談にされてしまった妻の愚痴

大阪市　坂裕之

らしさまで無くすと人が消えていく
会釈したあの人の名が出ない朝
誰にでも挨拶出来た日本晴れ
指示される前に動いて心地よい
日曜は休んでいます小売業

大阪市　佐藤忠昭

飲み会の不参加理由入院中
内視鏡輸血もあってサイン責め
一週間点滴なのにやせません
四六時中美人ナースと妻看視
助かった僕の主治医は酒が好き

理系女が今は非難をあびている
三姉妹話題つぎつぎ切れ目なし
増税前客のふえてる小売店
地下を出る陰の向きみて方角を
人出増すあべの界隈ノッポビル

大阪市　澤田定子

ゴッホの黄僕の心に灯をともす
里の街をきりっと締める鬼瓦
終活期と思えば余命忙しい
次の旅へ勇気をくれる歎異抄
無常とは日日新ただと前向きに

大阪市　田浦實

分かりやすく言えば大したことはない
大人気ないこともするのが大人です
ビタミンのくすりは安い方を買う
箇条書にして終りにしてしまう
お醤油をかけると間違いだと分かる

大阪市　谷口義

風の囁き生きるべし生きるべし
仏滅は暦の中のサスペンス
ひとりだといつも心に言い聞かす
命明朗今日けんめいに生きている
再会の握手万感こめながら

大阪市　津村志華子

あれも欲しこれも食べたいダイエット
車窓から平城京を見るロマン
満開へ大仏さんと花見する
東大寺鹿に行く手をはばまれる
寒暖の差に外出も命がけ

大阪市　津守なぎさ

8パーセント引き締められる春財布
青春の記憶の底に沈む恋
二円切手まとめて買っている四月
味のある演技してます夫婦仲
定年後妻から棘のある言葉

大阪市　寺井弘子

今日八分明日へ二分置くわたし流
矢印の通りに生きて悔い少し
逆風に素顔のわたし見えてくる
不安まで診てはくれないお医者さん
減り方が加速若さも通帳も

大阪市　原田すみ子

嵐去り雪止みやっと桜咲く
マー君と呼ばれる日本男子在り
警官も教師も詐欺をする世相
辞書を読む事覚え句が太る
五輪歓迎のビル大空へ手を延ばす

大阪市　板東倫子

大阪市　平嶋美智子

おみくじは運を掴むとあったのに
小川にも大河を担う自負がある
せせらぎに川ハゼ追った遠い日よ
シクラメンの鉢でスミレが自己主張
他人の花にきれいきれいと話しかけ

大阪市　伏見雅明

成人式だけで振袖お蔵入り
年金で沈まぬ程度いのち継ぐ
勝ち組が自慢しに行くクラス会
音信の途絶えた山が懐かしい
盆栽にときに大きな天狗いる

大阪市　升成好

花便り春の音符に乗って来る
物臭な猫に己を見てしまう
丸い背な歳相応の自然体
負けるなと自分のために旗を振る
悩む日のこの食欲が恥ずかしい

大阪市　松尾柳右子

おさそいに病院予約と断わった
二人して桜見物うまいめし
どの人もカメラ持ってる通り抜け
孫娘来て食事賑わう楽しい日
エンピツを削っているのに電話来る

大阪市　山崎君子

桜咲くうぐいすも鳴く春の朝
美しく堤の桜ずらり咲く
今日までに残った選手たくましく
娘はやさし桜見物日曜日
近頃は呆ける暇なし忙しく

大阪市　山本加お里

面白いうわさは風にのってくる
草花と会話している時が好き
手を合わせ気持もはれる墓参り
朝夕に夫とハグし笑い合う
惚けぬようご先祖様に頼んでる

大阪市　吉内タカ子

満開の桜に怠け恥じている
孤独には救う電話の友の声
春日和歩け歩けの医者通い
細胞も急ぎすぎます延命に
キンカンの鈴なり鳥に残し置く

堺市　奥時雄

街の声賛否バランスとりすぎる
初めての街の灯りは蠱惑的
にっこりの見合写真を返される
すぐ来いと言われただけの社長室
出張費浮かして麻雀で負ける

堺市　柿花和夫

居士大姉僕は俗名似合いそう
桜満開煩悩活気取り戻す
窓際で出番待ってる生き字引
徒然草にまた訊ねてる処世術
赤信号を睨みつけてる朝の顔

堺市　加島由一

日本を花はウェーブして通る
健康で長寿さみしい誕生日
リハビリの見舞小さなクラス会
おしゃべりをしながら舞っている桜
ラジオ体操さあ冒険の始まりだ

堺市　源田八千代

成長した孫が眩しく見えて来る
読書三昧柿の若葉に目を癒す
家中がバリアフリーになってくる
長生きの秘訣ヒントに料理する
出張のおかげで命拾いする

堺市　澤井敏治

恋のバトルか小雀三羽鬼ごっこ
春うらら妻は元気に留守ばかり
花びらを貰う二人の通り抜け
黄昏に待ち人の立つ通過駅
席譲ろうか腰浮かせつつ値踏みする

堺市　遠山唯教

一心に育てた人が誇らしい
まだ夢を捨てずに抱いて温める
花吹雪が見たくて一駅をあるく
会者定離ちかい別れを覚悟する
ふっきれず老いのシナリオ描けない

堺市　内藤憲彦

夏まではきびきび動く新社員
身の程を知り暇を上手に生かしてる
ネジ一本緩いくらいが生き易い
出世地蔵を前にして小銭なし
ごぶさたを父の日だけでチャラにされ

堺市　村上玄也

傘寿でも持ち合せてる恋心
片言の英語覚えて世界旅
礼節の最たるものに辞儀正座
祖父と同居していて礼儀正しい子
ジョーカーを隠し持ってる優位感

堺市　矢倉五月

良い人と隣り合わせた小さい旅
前菜ですでに当りと解かる店
真白な皿しか出さぬシェフの自負
序列などどこ吹く風よ古稀過ぎて
しつこいと思うが嬉し娘の助言

堺市　山本半錢

草の芽に雀が群れて季が移る
増税にあれこれ手立て聴かされる
偶に入る初風呂落ち付かず
新調の眼鏡が老いに馴染んでる
老いるとは許してもらう事ばかり

和泉市　横山捷也

友の数減るから禁酒ヤメにした
金婚と喜寿の祝いが重なった
亡き母の癖を笑いにしてしまう
若い日の記憶きれいな色である
桜咲いた事は言わない見舞客

泉佐野市　山本蛙城

子を死なし師の影踏んだ古稀の春
家宝ぞと師の短冊を子に示す
兵役を終えて咲かせた遅い花
来る来ない花びら千切り待つ心
一頁一句言霊水府さん

茨木市　島田誠一

本心を言わぬ間は仲が良い
増税がたるんだ財布叱咤する
白票は精一杯の民の声
財源は老いの財布という福祉
仮設から見えぬ明日を追い求め

茨木市　藤井正雄

反抗もここまで寡黙腹が減る
目印のポストが凜と立つ安堵
父の忌に遠い記憶の竹トンボ
仇討ちを取りにゲーム機姉がくる
時の流れその折り折りの歌が生き

大阪狭山市　矢野梓

のんびりとお花見出来る有り難さ
しばらくはみんな忘れて花に酔い
消費税結婚式も駆込みで
病院は不況知らずの消費税
脳からの指図に五体ゆるゆると

交野市　森本弘風

遠い耳夫婦の会話減らしおり
聞く耳を持たぬ母さんモンスター
怖いのは津波原発消費税
財布なら中身確かめてから拾う
散髪屋景気見ている消費税

河内長野市　植村喜代

何を言っても病気だと思っとく
少しづつ孫の溜め買いして楽し
孫はこれから苦も楽も大人へ一歩
としには勝てない勝手に体狂うから
いつになったら地球も人間も落ちつける

河内長野市　梶原弘光

手間かけた苦労知ってる飼葉桶
日本人横綱はもう無理ですか
老い盛ん磨きかかったとんちんかん
暖流と寒流春の打ち合わせ
天候が不順桜も早とちり

河内長野市　木見谷孝代

他人には無駄に見えても意味がある
平和賞候補九条揺らいでる
険悪な空気道化て切り抜ける
留守しても待つ席があるありがたさ
久しぶり子の注ぐ酒の旨いこと

河内長野市　黒岩靖博

命がけ汗もかきます一目惚れ
空元気行く手を阻む老いの坂
火の車借り入れ金の利子に泣く
二ッ折れの財布は諭吉いやらしい
妻とした口約束が火種呼ぶ

河内長野市　坂上淳司

就活の孫にワイフは甘味断ち
増税に抗議煙草は止めてやる
年並みにガタツク五体だが達者
ハルカスでどやと胸張るなにわっ子
古酒もよし骨董もよし老いもよし

河内長野市　谷久美子

春炬燵囲むやよいの寒戻り
飲み会が迫ると元気出る夫
泣き笑い暮しの中にいるピエロ
チャップリン道化の中にある怒り
貧しくても心豊かになれる人

河内長野市　松岡篤

杖持った人は誰でも亡母に見え
ありふれた自慢の中に孫が居る
帽子見てトラファン同士にっこりと
奉仕品値段と鮮度にらめっこ
さあデート電車で紅を引き直す

河内長野市　村上直樹

咲けば散る出合いと別れああ弥生
春の鬱沈むこころに酒の鞭
とんちんかんワハハ齢やと庇いあい
卒寿なお孫と一献酌む余生
しがらみを断てばこんなに青い空

河内長野市　山室光弘

黄昏を芳潤という吾が一期
ストレスをカラオケルーム捨ててくる
ピカピカに磨く食器に亡母想う
散る桜いつも届かぬ恋心
風邪ひきの声は女性に振り向かれ

岸和田市　雪本珠子

青リンゴ恋の迷路に迷い込む
人生の縮図見ているエアポート
禅寺で雑念払うキリギリス
叱るより褒めて押してる孫の背
時時は人のおだてに乗って見る

四條畷市　吉岡修

すごまれて大和魂寝たまんま
老人が増えても僕のせいじゃない
ハンドルの遊びほどならいいだろう
サクラサクあとはバイトに明けくれる
マニフェスト言うのも死語になったよう

吹田市　太田昭

脛の傷のいわれを男語らない
お喋りは妻と姑のためにある
旅先で伸ばした羽を折り畳む
落ちこぼればかり集まるいい仲間
謝った方が賢く見えてくる

吹田市　大谷篤子

白少したして熱い心を静めてる
ドア開けて笑いの中へもぐりこむ
八十歳を前に今日も笑って生きている
生きていくヒント子猫に教えられ
嫁ぐ朝眩しく光る孫娘

吹田市　木下敏子

合格はじいちゃんの出た京の街
しっかりと今を生きろと椿咲く
一病に笑顔忘れず散歩する
新しい芽がシャキシャキと弾む朝
人情がうすれモダンな家ばかり

吹田市　須磨活恵

いい夢は言わぬが花の喉仏
躓けば急くなと諭す石の声
しがらみが絡み過去が捌けない
古い棹時代の流れに遅れがち
せめて風味方にしたい四面楚歌

吹田市　瀬戸まさよ

七十代若い若いと九十歳
遠い遠い話にはずむ友がいる
筍を食べて私の春がきた
元気の素美味しい料理食べに行く
デパ地下は昔の市場はずみます

吹田市　野下之男

私なら貸してくれない八億円
意地こそがほら逆転の金メダル
州庁の父の弁当重かった（台湾）
僕と似てうたた寝好きなオウムさん
マンボウよ何を見ている夢の国

高石市　浅野房子

如才ない人ではないな無愛想
お一人様今日は団体様と居る
それ以来弾まぬ毬を抱いている
見たくない男の毛脛半ズボン
突然にハグされ困るじゃないの

高槻市　井上照子

米寿だと他人ごとのよう聞いている
手を合わせ勝手気ままの事をいう
ドキドキとカルテの話聞かされる
長電話ひとりぼっちの従姉妹泣く
借金に八億なんてお金もち

高槻市　指宿千枝子

流れ流れ終の住処に辿り着き
一日の浄化夕日を浴びている
あと五つ六つ傘寿に重ねたし
膝枕いつでもお貸しいたします
芭蕉布に浮かぶは祖母と糸車

高槻市　片山かずお

喋るたびポツリポツリと出るお里
好きな子と二人で逃げる鬼ごっこ
ちょっといい話に涙する加齢
我が家では主役になれぬ父の役
横を向く刹那の顔に見た本音

高槻市　島田千鶴子

笙の音に名残の桜舞い落ちる
言いかけた言葉飲み込む空の青
客室に古事記が置いてある出雲
同居して波調を合わす三世代
知らなかった母の話を聞く法事

高槻市　左右田泰雄

勝気だが弱気も少しまざってる
ゆれながらひと休みする蝶の羽
どっかりと腰を下して ああしんど
平仮名のように優しく包む愛
優しさに触れて素直な顔となる

高槻市　富田美義

ひと時の絆が欲しく栓を抜く
贈り物少しは若い目で選ぶ
ちぐはぐな意見まとめて串刺しに
我がいのち生還祝し栓を抜く
不揃いの苺も届く勝手口

高槻市　富田保子

いつ逝くかコース分らぬから愉快
定年の夫のコート色あせて
紫陽花のこころ変りに悩ませる
ほめられて気前よく買う雨合羽
ボケ予防と強がり唄う昭和っ子

謝ることばかり多くて冷奴
人生の節目いくたびとろろ汁
言い訳は短めにしてところてん
トーストの焼き上りよし好天気
いくらかの借りを返しにきたビール

高槻市　原　洋志

掛け替えた眼鏡で見えた娘の気持ち
名を呼べばあーいと右手孫ひとつ
うっかりとしてて還暦すぐそこに
一本の桜家族の春を知る
浮かれ出すさくらさくらの国に住む

豊中市　池田純子

握手したまま続いている立話
古里の土手の土筆を児に教え
嫁いだ娘のひな段飾り孫を呼ぶ
家族葬と言われ喪服は仕舞われる
黒ネクタイ外して涙あふれ出す

豊中市　江見見清

天敵と言われちょっぴり誇らしげ
逃げを打つとんちんかんなご答弁
おんぶ紐恥ずかしくても子は育つ
青春の匂いにむせぶ吾亦紅
時時は自慢し合ってみる夫婦

豊中市　藤井則彦

余生とは何と楽しい花ごよみ
梅酒飲んで浮かれています春の宵
スマートなバラに憧れてる牡丹
真面目な顔でボケを演じている孤独
時どきは意固地になって団子虫

豊中市　松尾美智代

スタートは一緒差がつくコネの有無
口よりも心で彼にあやつられ
KOシーン他人事だからたのしめる
父さんの留任決まり酌み交す
若やいでとんで見ましょう私流

豊中市　松村里江

大迫力千秋楽の砂かぶり
そばで観る力士の肌の美しき
長時間背もたれ欲しい砂かぶり
錆びついた錨真相知っている
試着室またストレスの増すサイズ

富田林市　片岡智恵子

今年竹天へ抜き出て誇らしげ
うつむかず野で咲き揃うあやめ色
戻れないこわごわ潜る日の茅の輪
山と海貫く旅の切符買う
ヒトゲノムやがてやがてにしゃがみ込む

富田林市　関よしみ

富田林市　中井アキ

ポケットの秘密ひとつを持て余す
有り難い土だサラダ菜が育つ
マンネリの胸に揺さぶりかけている
欲ばると過去がぬうっと顔を出す
丸洗いしたい私の脳細胞

富田林市　肥山一文

自分史は光と陰が交差する
友の訃報燗酒二合冷えたまま
酌み交わし本音を語り深くなる
不器用に生きて亡父のあとを継ぐ
赤い糸もつれずついに最後まで

富田林市　山野寿之

相応の歩幅刻んでいく未来
指先を撲る春が香る風
爛漫の春よ私にあと何度
山笑う風が笑っている故郷
人間をかけて戦う神と神

寝屋川市　冨山ルイ子

母の日に贈るあれこれ箱に詰め
朝取りのグリンアスパラさっと茹で
満開の桜知らぬ間に花筏
草引きを日に三時間日が暮れる
通り抜けテレビで桜春を見る

寝屋川市　平松かすみ

ピアスして孫がおしゃれになって来た
レプリカの仏を拝む今世紀
夫の怪我神のシナリオだったのか
厭きもせず五十七年妻と書く
湯加減が違い私が先に風呂

寝屋川市　森茜

澄む水のように遠くになった人
バス停に春の日差しを置いてくる
無駄骨のなかにぎっしりカルシューム
質問もなく集会所沈んでる
早とちりした一日の早い暮れ

羽曳野市　安芸田泰子

桜散る花見の誘いないままに
訥訥と話す言葉は信じたい
温情に抱かれて自我を見失う
八十歳生命線を確める
お供えは私の好きなものにする

羽曳野市　宇都宮ちづる

桜餅葉っぱきっちり取る夫
入学式大人六人従える
ハルカスで同じ高さのヘリを見る
筍と糠とレシピを娘に送る
メガネとマスクお隣さんを見間違え

羽曳野市　徳山　みつこ

てのひらに鶯餅がきてとまる
わたくしもセーター脱いで花衣
8パーへ財布イヤイヤして困る
いい天気ラジオと草を引いている
防護服酸素マスクがいるやがて

羽曳野市　永田　章司

割烹着売り場縮少元の位置
能舞台袖の謡が盛り上げる
人は持つ誤解を招く二面性
平成に渋さを売りのスター出ず
誤解から仲違いした友思う

羽曳野市　三好　専平

最善を尽くす怖さも知っている
円空にしがみついてる春の雪
味も音も形も色も偽だらけ
どっちかと言えばどっちもどっちなり
てんやもん食べたらあかんとおかん言い

羽曳野市　吉村　久仁雄

和服着る時間おんなが満ちてくる
断つよりも結ぶ絆の多い春
失敗を自慢話にして飲み屋
悔い半ば自慢半ばの銀メダル
ない袖も振って悩みを聞いてやる

東大阪市　北村　賢子

いい事もあったまあまあの人生
刻刻といのち紡いでいる振り子
うつろいへ風は桃色から緑
弱者には尚も厳しい春の風
福島へ復路切符はきっと持つ

東大阪市　佐々木　満作

もみじの手ぎゅっと返ってくる鼓動
真っ新な心で写経する朝
水一杯飲んで緊張感解す
仲違い溝が埋まらぬまま離別
栄光も挫折も消えてゆく余生

東大阪市　米田　水昇

町内の童謡教室老人会
権現寺登ってみたい石の段
残り福食べたり寝たり我がます
車椅子孫に押されてハルカスへ
高層は大阪平野一望に

枚方市　安達　忠央

朝練の若さへ赤い陽が昇る
酒は毒言いつつ毎夜縄のれん
なめらかな舌に矛盾が気が付かず
再建を放射線値が阻んでる
ネオン街一寸はずせば凄い闇

枚方市　海老池　洋

温暖化桜は咲かぬ百年後
健康維持仕事になった定年後
健康のためにも笑うことにする
背伸びして肩を並べてみたくなる
消費税アップビール買いだめしたせめて

枚方市　小林わこ

糸目飛ぶきっと心の乱れかも
糸通しまだ不必要着物縫う
絆というからみつくのよ重い糸
糸切った凧のゆくえを知らないか
柩には赤糸つけた鈴入れる

枚方市　丹後屋　肇

人間のガードにカラス攻めあぐむ
潔白を防犯カメラ保証する
新鮮な空気あの世にきっとある
リハビリに点滴袋随いてくる
独り住まい余計な世話を焼く家主

枚方市　寺川弘一

渚で裸足海と対話がしたいから
貧乏な時はリッチな夢を見る
階段を必ず登る歩道橋
遊ばない年寄りも居る遊園地
並んだらドミノ倒しの中だった

枚方市　二宮山久

ぎこちなく歩いた人生振りかえる
もう恋はしないときめた美人いる
大ピンチ妻がガードの杖になり
春風がのぞき込んでる書斎部屋
梅一輪心和ます祝膳

枚方市　二宮紫鳳

花冷えに心を癒すティータイム
入学の子らにエールの花吹雪
コンサート聴いて明日へ弾みつけ
おもてなし庭の桜とハーブティー
散歩道優しく包む花あかり

藤井寺市　伊藤アヤ子

苦労した事言わないが深いしわ
我が子から言われたくない意地がある
みなさんの出発点は四月から
災害のガイドラインを知っておく
春一番桜の花も散り急ぐ

藤井寺市　太田扶美代

美しい仕草を真似ている鏡
半音のズレ庇い合い笑い合う
悲しみの真上を過ぎてゆく季節
菜の花畑かすんで消えた恋がある
れんぎょうが咲いたよ亡母に話しかけ

藤井寺市　鴨谷　瑠美子

枕許のリュックが前夜からさわぐ
残り福だとわたくしの手を握る
そうだった根っこは妻と別だった
消しゴムがなければ迷うことはない
木の芽和え生きる証と思いつつ

藤井寺市　鈴木　いさお

六月の雨六月の花に降る
湯豆腐を奴に替えて夏は来ぬ
あの時の引き技今も悔いている
輝いていたあの頃のネクタイだ
目を閉じて耳を澄ませば花の私語

藤井寺市　津田　シルク

うんちくをひけらかしている孤独
遺品整理私知らないラブレター
おしり浮かして漕ぐ子に坂で追い越され
晩ご飯今日は家族が揃います
花活けて昔の私とり戻す

藤井寺市　増井　ヨシ枝

チューリップの歌が流れるマイガーデン
ヒヤシンスの香りにつられ深呼吸
婚約者連れて初孫挨拶に
満開をすぎてわたしの花衣
お亡夫さん庭のしだれも咲きました
尽きることない真っ赤な薔薇の自尊心
お人好しがお節介になる瞬間
アンテナに情報通の雀二羽
春ですね坐る度に出る欠伸
男運良かった事にしておこう

藤井寺市　吉田　喜代子

四月馬鹿夢でしたよと消費税
ヘソクリが飛んで行きますのし袋
桜咲く早く来ないと散りますよ
スーパーの寿司でも旨い花の下
白魚の口に溶けてく春弥生

藤井寺市　若松　雅枝

紋白蝶が今年も無事に舞い上がる
車窓に映る日本の春は美しい
鏡からまた肥えたねと睨まれる
風呂でゆっくり膝温めて寝ることに
八パーセントになってスーパー空いている

箕面市　酒井　紀華

朝のパン今日のはじまり語りだす
フランスパンちょっと気取って食べている
三代目が頑張っているパン屋さん
誘惑にまけてカードが笑いだす
天国地獄どの道えらぶＶＩＳＡカード

藤井寺市　俣野　登志子

腰も膝も痛くて動かぬから太る
大事にされすぎてますます歩けない
結婚して欲しいが側に居る温み
豪華船不安と期待夫婦旅
ときめきを探して老いを謳歌する

箕面市　出口セツ子

夫婦旅桜とパチリ新年度
増税にタイムスリップ九九暗記
増税分土をおまけと道の駅
もやもやも春の証と旅に出る
予定表子や孫友とにぎやかに

箕面市　広島巴子

温暖化温度差激し身にこたえ
国盗りのロシアは牙をむき出した
民意にて領土拡張いつもの手
横綱はやはりモンゴル四人目に
写真いり有名大の合格者

守口市　井上桂作

冬と春コートが出番せめぎ合い
彼岸会に隣の墓の香の残り
旅先で雛のまつりの仲間入り
月光に竿のしずくの首飾り
行く春に雛と兜を座席替え

八尾市　山根妙子

お帰りが聞きたく一年生駈ける
ランドセルは軽いその内重くなる
春眠に英気養う老人も
タクシーで走れば何処も花ばかり
悪女ぶる人は破目などはずさない

八尾市　宮崎シマ子

冬眠覚めて春眠に移行する
近所からアツアツ若竹煮届く
それからの話が明暗を分ける
テレビ中継を楽しんでる花見
友達とおんなじおかず買いました

八尾市　村上ミツ子

地球儀の彼方此方戦火愚かなる
毅然かな万朶の桜潔し
平穏な日々腰痛は続いてる
自然快癒自力しかない車椅子
二円切手なんで兎か推理する

八尾市　高杉千歩

うっかりとゴメンと言えぬ国と国
友の訃へ回り続ける走馬灯
初咲きの庭の花です仏さま
風みどり予報はＰＭ２・５
仏滅を避けたときから負けている

八尾市　内海幸生

大阪府　桑田　ゆきの

悔やんでもどうにもならぬ消費税
押し入れで犇めき合って買溜品
法話寺地獄極楽此の世とや
生きざまを称え合掌柩窓
花筏杭一本に逆らって

大阪府　籾山　隆盛

エイプリルフールやさしい落ちにする
初恋の想い出風に美化される
どんでん返し風を信じて逢いにゆく
たそがれの坂から転ぶ夢の文字
老いの坂まだまだ息を切らさない

大阪府　米澤　俶子

どう生きようと一生一度一人分
無駄口を叩き本心伝わらず
憶測を詰めた袋に風通す
こぼれ種にも土やわらかく包みこむ
青信号背中押すのは春の風

神戸市　伊勢田　毅

妻が逝き金木犀の香もうつに
富士厳然世界遺産の誇り持つ
昭和一桁スイッチこまめに消してゆく
二重ロック人間不信悲しいね
子にゆずる辞書に赤線引いておく

神戸市　白川　淑子

桜ひらひら愛された日のピンク色
親近感ゆるキャラのアンバランスも
流れにはもう乗れませんお齢です
だましだまし生きる独りの晩ごはん
ラストダンスドレスも靴も待ち呆け

神戸市　山口　美穂

突然の指名おろおろ咳払い
胸の内吐き出せなくて咽せている
乾杯のあとそれぞれの無礼講
忘れたらあかん二円を先に貼る
予定表見なかった悔い朝寝して

神戸市　山﨑　武彦

人間の都合で太る池の鯉
深海魚何だなんだと浮上する
妻の出すブロックサインまだ読めぬ
切り札はどじょう掬いと決めている
札束を見せて信用してもらう

神戸市　山田　婦美子

妥協して生きねば歩く道がない
涙腺が緩んでからの一勝負
なるようになるさ天はいつでも空いている
気分爽快財布が軽くなってくる
長寿更新眩しい上寿の姑と居る

明石市　糀谷和郎

おばちゃんの会話を止めた蚊の飛来
安売り切符あの世の分も予約する
まだあった僕には見せぬ妻の貌
椿ポトリ思わず首をなぜてみる
補欠でも熱く燃えてた自負がある

芦屋市　黒田能子

触れないでたった一葉の揺れる枝
相棒という信頼の出来る人
手作りの小さな気持ラッピング
盛り上がる時に限って咳が出る
急いでも手足まごまごするばかり

芦屋市　竹山千賀子

雑学を拾って帰る縄のれん
遺されて三畳一間もて余す
揺れながら支え合ってる老い二人
ポケットに入れてる母という鏡
本心をジョークに包み差し上げる

尼崎市　市坪武臣

持ち時間たっぷりあった筈なのに
肝機能気に掛けながら今日も飲む
大学入試ママが居ないと落ち着かぬ
色分けして予定ばっちりカレンダー
そこそこの距離を保持する君と僕

尼崎市　加川靖鬼

少し痩せてますけどプランターのネギ
鉢植えの菜の花蝶は見逃さぬ
モーニングコール実家はよいところ
寝てる間に地球くるりと一回り
天国に行くには荷物多すぎる

尼崎市　長浜美籠

桜の下のどかに古紙の回収車
以下同文の列で気楽に日を送る
運命線そんなに変わる筈がない
是が非でもと言わぬ誘いと午後のお茶
ピリ辛がほどよい刺激四月馬鹿

尼崎市　春城年代

足りない物は足りないままの暮らし向き
あてにしないで生命線と語り合う
あの窓でいつも並んだ喫茶店
漬物の美味しさ母のあたたかさ
寒椿冬が心底好きなんだ

尼崎市　藤井宏造

雑草の緑もいいな気が休む
春の宵行き先やはり縄のれん
明日もあるここいらへんで酒二合
大欠伸してる間も減る寿命
世話になるならないで子どもと揉める

開かれた大学の門出られない
小包を開くと故郷の香り立つ
弱点をさらけ出したら友が出来
隣の庭を借景にした小さな家
マスクに帽子会釈されたが誰だろう

尼崎市　藤岡りこ

遅霜に見るも無残な植木鉢
寝込んだら春の苦味を食べそこね
夜の街溜まった疲れ癒しゆく
春祭り終われば過疎に戻る町
背くらべ越された背骨軋む音

加西市　金川宣子

なにげない言葉が付けた傷がある
他人では軽く越せない溝がある
痛いとき痛いと言えば楽になる
焼酎が錆びてる脳の潤滑油
弱点を微妙に突いてくる女

川西市　西内朋月

雪つもる園児の声高し高し
三日分溜まった日記書いている
たのもしい力伝わる握手です
一族が金婚式に集う幸
お隣に憎まれる国吠え続け

川西市　山口不動

高校野球終り寂しい我がテレビ
もったいない家事近代化楽すぎる
我ながらアホやと思うこと多し
サヨナラ勝ち今夜は眠るぐっすりと
顔見せぬ曾孫達早や高学年

川西市　米原雪子

水茎のあと美しき果し状
第三の男ニヒルでセクシーで
縄文の樹から生まれた思惟佛
僕の手をするりと君は跳ねうさぎ
抱きしめているのは愛かまぼろしか

篠山市　酒井真由

三回忌終えて笑顔で食事会
騙されていても気付かぬ振りしてる
日当りで孫自慢する老いの春
ふんわりと葉の巻いているキャベツ買う
税金を直ぐに収めるひとり者

三田市　石原歳子

重なった予定どちらも義理がある
つくし煮る胸熱くなる昭和の香
まっさらな制服孫に良く似合う
菜の花が咲いたが蝶が見当らぬ
お喋りな家電の声にうろたえる

三田市　上垣キヨミ

たおやかな桜に習う人の道
信じ合い支え合っての命抱く
一服の茶こころほんのり桜餅
おめでとう笑顔待ってるお赤飯
来年へ寿命延ばして買うパンツ

三田市　尾崎一子

皆許す親の胸中自動ドア
割り勘のルールで続く飲み仲間
お互いに戦力外と苦笑い
プロ棋士もコンピューターには勝てぬらし
妻の掌の上でタクトを振る社長

三田市　北野哲男

春の花よりも花粉が先に来る
内緒ごと増えて口数減ってくる
春ウララペアールックを買いに行く
覗き見をしても読めない医者の文字
川柳と野菜作って日が暮れる

三田市　福田好文

何回も子等へ知らせる金婚日
金粉入り酒でも飲むか金婚日
アナタとは呼ばれないまま半世紀
半世紀つき合ってきたこの寝顔
子が二人孫三人でよしとする

三田市　堀　正和

一日の終り自分にありがとう
コーヒーのおかわりをする締め切り日
かしわ手をうたれポストも困るだろう
ライバルのくれたチャンスは悲しいね
時々は過去と遊んで日向ぼこ

宝塚市　田中章子

年金が孫の笑顔で消えていく
文才がなくてハートが空回り
経理部長が急に辞めたら立つうわさ
金ないが溢れる愛がボクの武器
暗黒がボクには合うと深海魚

西宮市　足立　茂

水無月の誘いは津軽梅雨知らず
ふんぎりは未だかと笑う廻るすし
心には年齢(とし)取らせぬとまた旅へ
ばあちゃんのこれが最後が始まるよ
何も彼も赦して余生穏やかに

西宮市　秋元てる

物忘れはしませんよと春の土
人に酔ってしまった皇居のさくら
弥生卯月嬉し涙を流したい
二本立つ歯ブラシ倒れないように
百円のメガネ馴染んでありがたい

西宮市　緒方美津子

西宮市　片山　忠

究極の恥を笑いにする度胸
洋式のトイレに慣れてきたお尻
買うまでに時間をかける不況なり
自分から涙もろいという男
おやじギャグ孫が評価をしてくれる

西宮市　亀岡哲子

母乳吸う愛より深いものがある
ああ野原老人ホーム建つ噂
出掛けには蕾だったよねサクラ
ピンクのシャツ似合う夫へ次は赤
百選のさくら名所に住み多忙

西宮市　西口いわゑ

出て見れば花は咲いてる気は晴れる
忘却が生きる味方をしてくれる
あさきゆめみし女は仮面いくつもつ
欲の壺いくつも持っていて元気
空の青もう急ぐまい楽しもう

西宮市　牧渕富喜子

ラジオから聞くふるさとの千枚田
控えめは目眩ましだよかすみ草
上から目線有名人が好きらしい
運転再開この夜も命消えてゆく
ざわざわと虫もわたしも春に向く

西宮市　山本義子

蕾だって花と咲くため力要る
雛たちは生きぬく力身につける
それなりの青春もあり昭和の怪
お招きは最高の笑みもってゆく
いまと言う日大事に生きることにする

西脇市　七反田順子

じゃれついて犬が添い寝をしてくれる
物忘れ桜の木にも頼んどく
桜見て唐子椿の古刹行く
桜餅ご先祖様も所望され
庭の草大地の汚れ知りません

姫路市　古川奮水

卒業式線引きしたか淡い恋
栄転の春だ花粉もお見送り
花冷えに誰言うとなく赤提灯
声いらぬ犬は毅然と人をみる
バーゲンに足し算もして割り算も

奈良市　阿部紀子

日本人世界で競う体格に
八％なのにグランカルビー人だかり
有田町人皆優しおっとりと
日に二回席を譲られ我が身知る
妄想を都合良いよう変えている

奈良市　岩本浩二

同期会鬼籍の友が話の主役
生き甲斐は陽気な妻と趣味に酒
趣味ひとつ生き甲斐にして八十路坂
あんたの目節穴でっかときつい妻
バッカスと固い握手の嬉しい日

奈良市　加門萌子

石段があるから登ることになる
何百段善男善女に成るために
此処かしこ日本一と仏様
一日明けるところりと落ちる偶像も
季節より早く出た蝿まだ弱い

奈良市　辻内げんえい

生き甲斐を探しカルチャーまわってる
携帯もカードも持たず生きている
マスクして目薬持ってウォーキング
憧れた女優の名さえ出ぬ齢
家なかでもメールで会話倦怠期

奈良市　天正千梢

たかが川柳ひねりごたえおまっせぇ
せっかちな性分集団に慣れず
友曰く川柳なんと難しい
流さんでいい潤ってさえおれば
夢のまじない父ちゃんから教わった

奈良市　米田恭昌

記憶力尋問室で試される
頑なに元気演じている孤老
「くん」「ちゃん」と呼んで傘寿の同期会
今風のお遍路スマホ放さない
サクラチリ子の部屋明かり消えたきり

生駒市　飛永ふりこ

これしきと木蓮背筋天に向け
誉め言葉笑わない目が焼き付いて
ウインクの余韻きなこアイスとろけ
ふんわりとアンバランスの桃色が
よくもまあそ知らぬ顔で微笑する

香芝市　大内朝子

ぽしゃったら虹の麓をまた探す
今はもう笑い話のヨイトマケ
泣き笑いオンリーワンの人生よ
作り甲斐ある幸せな台所
にんげんが好き百態の笑い皺

橿原市　安土理恵

記憶から消えたのですかラブサイン
逆らえばよけい哀しくなる会話
助けてとすがりつきたい胸がない
残りの春掬いに昨日へ戻ろうか
乾かない傷が泣くので眠れない

大和郡山市　坊農柳弘

初孫に笑顔を添えて鯉のぼり
聞き流す術も覚えたイヤリング
紫陽花の心ね青のひと滴
アメリカに媚びる憲法改正論
足して二で割っても税は付いてくる

奈良県　渡辺富子

行く末のひとりを想う花吹雪
君の手の温もりほどの夢がある
顔のない群れになるなよ入社式
ドアノブの向こうの少女羽化をする
言い合って雨だれ聞いているふたり

和歌山市　岩本美智子

夜桜の人ひとに酔い酒に酔い
泣きたくてさくら吹雪の中に立つ
病葉は業の行方を知りません
ボロボロになって笑って生きている
深層心理思わぬ人に夢で逢う

和歌山市　上田紀子

昭和生まれ骨の髄まで演歌節
去るものは疎し復興なお遠し
軌道修正今なら出来る幸福度
子は伸びて私は縮み日脚延び
ひょうたんの括れに思うダイエット

和歌山市　喜田准一

躓いたここが男の正念場
逃げ場所をソッと開けてる知恵袋
まだ若いカネへの欲が離せない
一輪の花に時代の浮き沈み
天下る仕組み渋とく残される

和歌山市　楠見章子

青い空口紅の色変えてみる
言葉より手の温もりに気を許し
負けん気が悲しい背伸びしてしまい
おみくじの枝垂れ桜が呼んでます
匂いある女が風を切っていく

和歌山市　坂部紀久子

糠味噌と今日の会話を始めます
初物の竹の子活を入れて噛む
融通のききそうにない目鼻立ち
青空が好きチューリップ上を向く
何も彼も許されそうな花の下

和歌山市　玉置当代

山菜が伸びてわたしを呼んでいる
今日の日に感謝足腰伸ばす風呂
明日へとつなぐ子供の芽が伸びる
添うてきて空気となって支え合う
大げさに笑い哀しみ乗り越える

和歌山市　福井菜摘

片道の切符覚悟を決めている
世の流れじっくり読んでいる厨
自己主張秘めて流れに添う余生
振り向けばどの傷跡もいとおしい
一期一会いのちのことをふと思う

和歌山市　福本英子

ほどほどで良い卒寿まで生かされて
少しだけ物忘れする知恵袋
やんわりと諭しピリッと返される
拗ねてみて相手にされぬ惨めさに
それぞれの言い分続く会場費

和歌山市　古久保和子

指切りを誰としたのか花曇り
刺草を手折った指がまだ疼く
靴の踵踏んでこの世が生臭い
水がめの底でゆっくり砂を吐く
ボキャブラリー乏しく生きている渇き

和歌山市　堀冨美子

鶯の声を聞いてる夫の墓
私のニーズで前を見据えてる
枯れ鉢の芽吹きに生きる覇気もらう
御近所に何時もパニック救われる
真っ直ぐに怒り笑顔の人が好き

和歌山市　松尾和香

川柳と二人三脚する切符
ほろ酔いのそぞろ歩きに風さやか
近場での花見違った顔に会う
退職の息子にエールマスターズ
退職移動紙上に親子春の朝

岩出市　藤原ほのか

スッピンになると本音で向き合える
この命尽きる時までときめかす
母逝きて桜がじんわり目に沁みる
今だから言える誠のありがとう
これからは足元見つめ生きてゆく

海南市　小谷小雪

コンニャクの料理に家計救われる
みんなが好む切れ味の良いハサミ
葉桜が老樹の風格を醸す
ウイルスをちょっと笑ってやっつける
讃美歌に空気の流れ透き通る

海南市　堂上泰女

明日からは増税やれる事はやり
労った孫に労られています
油断するな油断するなと春の風邪
隔世遺伝と孫の短所を回される
イノベーション私の街も活気づく

紀の川市　宇野幹子

猫パンチ眠った脳をどつかれる
一日がゆっくり過ぎる妻の留守
脳細胞駆使して錆をくいとめる
西日射す影が突然いばり出す
団塊の世代が崩れ出すドミノ

紀の川市　北山絹子

夢のある話へ乗っている不況
風向きを読んでいるよな朝の靴
夜の街むらさき色の雨が降る
鍛えればついて行けそな歩数計
遊びたい盛りへ塾が邪魔をする

紀の川市　辻内次根

条件を厳しくつけてくる命
美味しいとかいてあるから買ってみる
抜き打ちにくる災いはかわせない
忘れたい酒三合の酔いの中
感傷へ手紙燃やすと風がくる

田辺市　岡本昇

二浪した大学帽は色褪せる
不思議です山菜採りの軽い足
山小屋で単身赴任炭を焼く
目鼻立ち整った子に増す期待
陶器市目うつりがして買いづらい

鳥取市　池澤大鯰

メロドラマ一夜あければ色あせる
散歩すら面倒臭いや今日の空
孫のテレビぼんやりと付き合っている
捲っても以下余白ばかりのノート
留守居して隙間を埋めるすべがない

鳥取市　奥谷彩子

心のひだに今の幸せ折りたたむ
生きたあかしたっぷり刻み笑い皺
ありがとう言えて笑顔の輪に融ける
人並みに夢追い後期旅つづく
人生夕暮断捨離急かす砂時計

鳥取市　加藤茶人

嘘が嘘もぐら叩きの蟻地獄
四コマの漫画我が家のサザエさん
長生きと生活保護の我憂う
目玉だけ売れてセールは幕を閉じ
一線は越えてはならぬ内輪揉め

鳥取市　倉益一瑤

本当は吠えているのに出る涙
夕焼けよ今日は人魚になれそうだ
闇の中手足引っぱるのは誰だ
泣く笑うここ一番のショーをする
大丈夫春になったら飛び立てる

鳥取市　岸本孝子

着脹れをすっかり脱がす春の風
裏庭の梅で家族の園遊会
聞き分けのいい子がいつも損をする
薄弱な意志ではできぬダイエット
この先は自分のために舞い終える

鳥取市　鈴木一弘

日が落ちて谷はさくらの花ぐもり
病棟で真心消える秘密主義
絶世の美人あしたは別の人
喧騒をさけてくつろぐ山の宿
鶯の初音めでたいホーホケキョ

鳥取市　永原昌鼓

国境で戦の火種きなくさい
めかしても歳はしっかり首に出る
どうせならＴＯＫＹＯ五輪見て逝こう
心地よいひびき無料の罠に落ち
風を読むことは苦手なお節介

鳥取市　中村金祥

ワンチャンス活かす度胸を試される
この歳になっても知らぬことばかり
張り切った後がこたえる初老の身
いい夫婦言われて妻が強くなる
どうせなら笑い飛ばして生き延びる

鳥取市　夏目一粋

ぬるま湯になれてそれから飛ばされた
落ちそうなボタンが楽にしてと言う
ソロバンで鍛えた指が首になる
やさしいと言われ啖呵を切ってみる
ああ哀し計算されている涙

鳥取市　西川和子

無病息災ついでに入選も願う
食事会ついでに高いショッピング
私も事のついでに生きている
老い二人杖をお供に花めぐり
手の届く場所に納めて老いの城

鳥取市　春木圭一郎

問い直す自分に何ができるのか
トンネルはささいなことで脱け出せる
避けることできない苦悩だってある
一切を神にゆだねて安らかに
自分とは異なるタイプ観察す

鳥取市　平尾菜美

狙い打つピンピンコロリまだ元気
旅に出るよろこび勇む心映え
むき出しのエゴ砂漠道とぼとぼと
カメラ視点ローカル線の旅が好き
思い遺る指仏間から手を合わせ

鳥取市　前田楓花

先を行く母の姿が道しるべ
手本にはならないけれど母は母
割引券ゴミの中から救い出す
清濁を混ぜて小川は海になる
少年の心平和を抱いている

鳥取市　森山盛桜

隠し事無いからアカペラで歌う
奥付に収まる器には非ず
足許を突くとあっさり転がった
胃液では溶けない物を飲み込んだ
免疫があって失言気にならぬ

鳥取市　吉田弘子

わたくしの遠足せめて五輪まで
思春期の孫の無口がちと淋し
自負してたつっかい棒の頼りなさ
スポットの予感ドラマの姫路城
老いるとや老木の苔重ねみる

倉吉市　猪川由美子

論文撤回の蔭に嫉妬が渦を巻く
蕾ふくらむ梅をヒントに句を捻る
トップに立てば維持や引き際むずかしい
彼岸過ぎたが寒暖油断できません
問題ドラマどさくさ紛れ終えていた

倉吉市　山中康子

欲と知恵どう生かそうか消費税
老婆心塩のききめをご存知か
一つ屋根主婦はひとりでいいですか
ひとり聞くラジオの声のやわらかさ
お返しはごちそうさんとありがとう

米子市　後藤宏之

増税が春の陽気に雨ふらす
内緒だよ言ってた話本人に
目が覚めて夢の続きをひねり出す
いじわるが趣味となりつつあるわたし
罪深い人生ずっと続きそう

米子市　後藤美恵子

ぼんぼりを灯して桜北上す
大人しいグループ稀な夜桜見
赤い靴が踏む老春のステップを
レッテルを人の噂が貼っていく
アウエーのどよめく中で勝負する

米子市　竹村紀の治

木の芽和え春が一杯やりに来た
みそ汁の実にして春を飲んでいる
励ましの握手はそっとやわらかく
消し壺に今日燃えた火を眠らせる
言い分け無用体重計に万歩計

米子市　中原章子

飲んで効くしみ取り薬欲しくなる
美人の湯その気になって肌弾く
高齢の現実背筋寒くなる
川柳によって辛さを助けられ
世の中がどう変わろうと桜咲く

米子市　成田雨奇

溝蓋が歩行者用の道なのだ
一人だと酒を飲むほかない時間
会話にはまずは無難な天気から
サイタサイタサクラガサイタ秘密ダヨ
寄付金は集めにくいがカンパなら

米子市　吉田陽子

物欲が減ってほこほこする心
青春は遠く無口になる詩集
空っぽになるまで日記書いて満つ
つまずきをコードのせいにもう出来ぬ
人気取りしないなずなが野を飾り

鳥取県　石谷美恵子

ものの芽を覚ますやさしい春の雨
眼鏡にルーペ重ね漢字に噬われる
崩れたら人も漢字も読めません
ホゾを噛む最後の詰めが甘かった
紅一点などと回りの甘い風

鳥取県　岩崎和子

ゆったりと夫に寄り添い始発する
一歩二歩進む夫に拍手する
この人を愛した頃をふと思う
チューリップ水仙みんな春の顔
退院を目指して友の歩行器よ

鳥取県　斉尾くにこ

ごめんねを先に言われてごめんなさい
お花見をしてるさくらのない場所で
勝って知る負けてる君の大きさを
また逢えるため大切な別れ際
終止符を打ってつづきを探してる

鳥取県　西谷悦子

ペン執れば若さが返る風になる
雑踏の広場わたしも磨かれる
サクラ咲く消費税率知っててか
ライバルを勝手に決めて頑張れる
減点法でゆけば私は消えるだろ

鳥取県　細田裕花

受けた恩リボン結びでとっておく
箱に入れ過去形にする褒め言葉
正直に棘を見せてるバラの花
四代目家訓をポンと裏返す
外来種頑張りすぎていませんか

鳥取県　松川行男

消費税年の暮れからまた騒ぐ
五千円それから追加要りました
いつ死ぬか本気で呆けて忘れます
木のめだち春は呆けると言い伝え
定年がないから若い句も読める

鳥取県　山下節子

甘い汁蟻もヒト科も寄りたがる
過疎の村立派な家に人住まず
書き順はどうあれ漢字出来上る
今時の子の名漢字にルビがいる
念入りのメークだんだん他人めく

鳥取県　山本正光

お若いと言われどきっと身構える
増税に一言いいたい台所
一日中草抜きしてか二日寝る
二分咲きのしだれ桜へ今日寒波
雨降りの何もしないで一句でき

松江市　石橋芳山

マクベスのとなりアトムも眠る棚
ヘチマぶらぶら忘れるように出来てます
結論にするには甘いもんじゃ焼き
甲高い女の首を絞めてみる
物たりぬものあり自然発火する

松江市　小川注湖

男と女いるとそこから物語り
伸びた芽を曲げて眺めて一人笑み
ランドセルピカピカ光る小さい背
食文化地方に伝う味自慢
旨い話誘われ電話もう三度

松江市　錦織禮子

桜花爛漫この世のものと思えない
兎年二円切手を賛美する
高一で円(つぶら)に咲いた囲碁ガール
えびすだいこくマラソン人気止まらない
ファッションは魔法冒険してみよう

松江市　藤井寿代

草餅を食べるあなたをおんぶして
窓明かり待つ人の居てしみじみと
天の川今年も逢ってくれますか
曖昧な返事が悩み深くする
こそこそとするから尻尾まで生えた

松江市　松本知恵子

若さっていいな二人の青い空
カラ元気でしたやっぱり風邪を引く
風邪抜けて出れば桜は散るばかり
痩せて良し一品減らす消費税
青い湖さくら松江は良い処

松江市　松本文子

スーパーでどれが旬だか分からない
一つや二つではなし川に捨てたもの
悪球も我が子の球は受けてやる
梅桜桃賑やかに巣立ちする
チャンス逃してその後用心深くなり

松江市　三島淞丘

立ち位置を代えれば風も変わりだす
時どきはコップの中も波が立つ
勧誘の電話忍耐強く聞き
壁いくつ飛び越えてきた現在地
運よりも汗を信じて鍬を振る

出雲市　多久和敬子

あの日から私の座る椅子が無い
そこそこの人が集まり弾む会
名人になれずに終る割烹着
スイッチを切ると心も寒くなる
日本の器の中で今日も舞う

出雲市　伊藤玲子

薬玉が割れて溢れるおめでとう
出不精を誘い辛夷の寺参り
ネバー・マインド　チャンスは一度だけじゃない
土俵際昨日の負けにヒントあり
十七音字心をこめて編んでいる

出雲市　岸桂子

道草で感性みがく糧とする
オムライス中に詰め込む亡母の味
消しゴムで消えない古い絵を胸に
塀の向こうのドラマは知らぬ方がいい
疑わぬままに記憶が遠くなる

出雲市　富田蘭水

無常の世白蓮一夜の風にあい
小手先の句作り嫌い世は深い
明日がある思う心に黒い影
ちやほやとされてる句など底が浅い
神仏と無縁詩歌にある力

出雲市　石倉芙佐子

泣いて笑って花散る里に住んでます
十字架を切って下さい私に
然り気なく愛と恋との詩を書いて
能登紬好きだと言ってくれた人
子供に大人だあれの声もしない夕

島根県　伊藤寿美

御神域陛下も徒歩の車止め（式年遷宮）
フジコヘミングのショパンを聴いている至福
成人式リケジョの孫のお振り袖
群の中おや　わたくしの顔が無い
助手席のナビゲーターも眠る春

幸せの頂上は今かも知れぬ
寝そびれて聞き入るラジオ深夜便
菜種梅雨我が菜園の新学期
日本語が儘ならぬのに英語塾
気紛れな春の天気は侮れぬ

広島市　岸本　清

黒い腸苦労に耐えた証です
母の逝き里の時計の針止まり
お元気ですか二円切手を貼り足して
主を恋う紫陽花庭の隅に咲き
言葉尻キリキリ痛む梅雨の冷え

竹原市　石原淑子

今一人玄関のカギ確かめる
青いリンゴも白いイチゴも有りですか
ため息といっしょに消費税払う
本を読みたい本屋の広いこと
術後五年薬も減ってきましたよ

竹原市　岩本笑子

編集部よりお願い

最近の投句に誤字脱字が多く散見します。
また薄い鉛筆書きや崩し字も誤植の原因となります。
投句は楷書で、文字は今一度、辞書でご確認くださいますよう、お願いいたします。

万葉抄

（つづき）

お茶漬けも世界遺産になるかしら
予定表一つ一つが重いカセ
間を取りてほのかな想い絶え間なく
雨が降る静かな時間雨が好き

防府市　坂本加代

横文字とカタカナの世に卒寿麻痺
弱点をさらせば皆寄って来る
三猿主義揉めだした座をそっと抜け
春風に熨斗袋とぶ曾孫達

宇部市　高山清子

虹のたもとに風の噂が屯する
バンザイの形で落ちた転び下手
夢工房四次元の夢紡ぎます
ブロッコリーころんと孤愁溜めている

山口市　中前幸子

焦ったら失敗しますあの世行き
ぶらんこの凄いこぎ方親ばなれ

大阪市　柴本ばっは

ベルギーの土産物屋はチョコばかり
いけめんがチョコ作ってる絵になって

倉敷市　安東モモ

川柳塔の川柳讃歌 ⑭

木津川　計

他家さまの子に金をとれ銀をとれ

福本英子

わが子なら「金をとれ銀をとれ」の叱咤も構わぬが「他家さまの子」にそんな強要が許されようか。「どうぞご随意に」の筈であろう。英子さんは七年後への過剰な期待を叱り、冷水を浴びせたのだ。

「金をとれ銀をとれ」に似た声援に応えた田中将大の報酬は七年間で一六一億円、年間二三億円、日給六三〇万円!! この法外な過剰にコンビニ弁当三八〇円のサラリーマンは叱りもせずに手を打って囃している。貧しい僕に聞こえる〝アホラシヤの鐘〟である。

落ち目だと知って右腕去って行き

村上玄也

落ち目で右腕が去るなら、絶望的事態では誰も居なくなろうに、惨めな敗走の明智光秀は数騎に守られ、土民に殺られたのである。この数騎に僕は感動する。

城山の西郷軍三百人を山県有朋は七万の政府軍で囲んだ。遂に銃弾を二発浴びた西郷は「晋どん、もうここでよか」。腹心・別府晋介は「御免なって賜も」と詫び、首を落とした。「金の切れ目」ではない「命の切れ目」にも縁を切らなかった男たちに僕は瞑目する。

答案紙この一枚が運不運

須郷井蛙

私学の四月、入学生の三分の一は劣等感にさいなまれている。高校で勉強していたら阪大へ入れた。中学で志したら京大へ行けたと。

この学生たちは大学生活に馴染まない。講義にも斜に構える。伸びないまま四年を送る。だから僕は四月の開講第一講で毎年語った。「紙切れ一枚で一生が決まってたまるか。人間の能力はチョボチョボ。東大や京大に入った学生は勉強の方法をちょっと心得ただけだ。大切なのはこれからのやる気だ」と。

肩書を病室までも持ってくる

福田好文

「ぜひ――の呼びかけ人になってほしい」と旧知の先輩が電話を掛けて来、「君の肩書きは『上方芸能』代表だね」「いいえ、発行人です」「発行人？　なんだ、発行人とは？」「発行する人間です」「それでは聞こえが悪いなあ」「そうですか、発行人は社主みたいなものですが……」「社主？　それがいいじゃないか、社主でいこう」と強引に決め、一度だけ僕は「社主」にさせられた。こんな人間が病室まで肩書を運ぶ。

まだ生きるドライフラワーにはならぬ

西谷悦子

獲られたサンマは零下三〇度の冷凍庫へ生きたままいきなり放り込まれたのだ。店頭のサンマが一様にアッという表情をしているのはそのせいである。

盛られた花も駭きだった。花の命は短いとはいえ、花盛りで乾燥させられるとは思いもしなかった。ドライフラワーもええーっ!?という表情でカラカラに耐えている。悦子さん、どうか麗しく、みずみずしく。

生き甲斐は温めの燗に焼きするめ

寺井弘子

定年後の無為には誰も耐えられないから、多少は人さんの役に立とう。そんな夜、するめで一杯やるご亭主を弘子さんは温かく眺めている。人間は酒やビールに加え、水分も要る。だから、まどみちおさんは「するめ」で「とうとうやじるしになって、うみはどちらですかときいている」と。乾燥したするめは海に帰って、イカに戻りたいのです。

それにしてもまどさんの発想「するめ」には、まいったまいった。（『上方芸能』誌発行人）

自選集

おとなしくしてるとホワイトデー去った
坂の街老いて福祉のバスが込む
傷は勲章一年生のランドセル
水枕ぼくはアナログ派であるよ
ダムよりも高いところに蛍棲む

小島蘭幸

早や起きをすると天気が味方する
歳相応分相応の五目めし
身の丈に合わす八十路のファッション
おとなしい鹿もやっぱり意志表示
スケジュールこなして次を模索する

津守柳伸

五割引きジャンパーを買う店じまい
何をそわそわ漬物石が笑ろている
少年に還る軍歌を口ずさむ
死ぬまでに生らない柿を植えておく
日本にさくら一日毎の春

遠山可住

聞くだけで春がきました花だより
折角の春に冷たい消費税
大根の冬乗りきった白い白
水を撒くにも料亭と植木屋と
転んでも言いわけ要らぬ歳になり

都倉求芽

父ははのうしろの山に春がきた
美しい心も映る影法師
生きていてよかった少し歩こうか
その時は仏になって旅に出る
何もかも飽きてチューインガムを噛む
牡丹の花がここのつ咲きました

土橋螢

七十五楫と櫂とはまだたしか
ご破算で願いましては七十五
まだともう使い分けして七十五
七十五取得も芸もないままに
七十五脱兎の如く過ぎる日々

西出楓楽

お前様の値段を決める世間様
法律はこう読むものと世間様
方便というには重い世間様
噂では時にニヒルな世間様
私にわたしのサイズ世間様

仁部四郎

哀しみの深さへそそぐ月明り
襟立てておとこは街を出て行った
おちぶれてからの月夜が美しい
生きてこの煩わしさを如何にせん
親不孝親不孝めと爪を剪る

羽多野　五楽庵

負けて勝つ面を白寿は知っている
ブロンズ像森の小鳥と仲が良い
天界のなさけに迷う花手桶
皇后さまもにこやか美人良い平和
気品ある白馬に凜と皇太子様

林　瑞枝

良い日なり今日大阪の満開日（七年会の花見会）
同期会大阪城の桃桜
天守閣桜眼下に旬の膳
ウエディングドレス人目を引いて花の下
創造主今年も花をありがとう

前　たもつ

ご先祖のお人柄など聞く法事
いずれ私も先祖のそばへ参ります
時々は花を枯らして詫びてます
弥生人でしょう私も米が好き
ご先祖の樹を孫たちに伝えます

政岡　未延子

会議大好き居眠りができるから
運転は嫌い居眠りできぬから
大安なのに良いことはなかった
大凶なのに釣り銭が多かった
白は白黒は黒なのですピアノ

三宅　保州

許し合う齢の出合いにする宴
それぞれに生き方があり背の丸味
パンプスよりウォーキングに馴れた春
それからの進路は曲げず自分流
てにをはを省いて春の夜の乱れ

宮西　弥生

夢の世なれど
さざ波はひたひた　彼岸あたりから
わたくしを闇から守る羽根布団
眠くても蚕きらめく糸を吐く
蝶だって卵置くにも舞いながら
意識して生きる夢の世だとしても

八木　千代

川柳界の俺は落ち武者かも知れぬ
軸足がズレる生き様までズレる
俺の番近い骨壺選りに行く
ヤジロベーの揺れが止まらぬ左派と右派
海老も肉も偽装か知らと箸を止め

両川　洋々

日が昇る犬が教えてくれた道
なんやかや言うても父と母が棲む
抽斗に小さな乳房入れてある
母は右父は真すぐ行けと言う
弘法に逆らう聖書梵論梵論に

板尾岳人

亡き人がしきりに浮かぶ彼岸前
新しい記憶どんどん過去を消す
誘われて誘って楽し仲間の輪
手応えの笑顔浮かべて受話器置く
夕陽まっ赤今日のかなしみ焼きつくす

奥田みつ子

これしきの事が読めぬか自己嫌悪
穏やかな坂で試した老いの足
誘い玉投げて出方をじっと見る
裏の裏読んで足元掬われる
反応の鈍さを年齢のせいにする

河井庸佑

何やったかなハイハイとした返事
ぜいぜいぜい税のすき間で息を継ぐ
長い旅だったここまで来てしもた
なるほどなさても南京玉すだれ
鏡の前では背伸びをしてしまう

川上大輪

モーツァルトと一緒にお茶でくつろいだ
注射上手な看護師さんでほっとする
鰐皮の靴を履くけど見てくれず
頬のたるみ気にし年齢には触れぬ
着ることも無いが軍服捨てられず

小西雄々

りんご好き表札までもりんごの樹
画用紙にお花を飾る参観日
望みまだ捨てぬ小さな絵具皿
不可能はない輝いている瞳
人情の濃さに触れ合う坂の街

斉藤劦

陰口が漂っている暗い溝
しゃぼん玉ふわりふわりと春休み
真っ白なシーツ無職の私にも
究極の愛の形のウォシュレット
思い出を肥やしに記念樹が伸びる

新家完司

ぼんやりと過ごす一日老い深む
手入れせぬ庭でも花実顔を出し
若かった頃が浮かんでくる畑
庭の蕾が可愛い顔を覗かせる
失敗は誰にもあると背中撫で

恒松町紅

第17回 鳥取県川柳文芸大会

日　時　**7月13日（日）** 午前10時開場
場　所　新日本海新聞社５階ホール
（JR 鳥取駅　南口から徒歩３分）
兼題と選者　「なかなか」　水野　黒兎　選
「　敵　」　中村　　和　選
「揺れる」　尾上　八重　選
「ストップ」　山本　鐘馗　選
「留　守」　山下　蟹郎　選
「切　る」　能見　慶一　選
「ラッキー」　山下　凱柳　選
席題なし　出句各題２句
当日締切　11時30分
会　費　当日　2000円（軽食・大会誌呈）
欠席投句　1000円（大会誌）
欠席投句締切　7月８日（当日消印有効）
用紙自由（事務所にて清記）
投句先　〒680-0074 鳥取市卯垣1丁目110
夏目　一粋
第17回鳥取県川柳文芸大会実行委員会事務局

第15回 生駒市民川柳大会

日　時　**7月20日（日）** 12時30分開場
会　場　生駒市コミュニティーセンター
（セイセイビル内）
近鉄生駒駅から南３分
〒630-0257　生駒市元町1-6-12
℡ 0743-73-0500
事前投句「挑　戦」　松本　柾子　選
ハガキで1句　**6月20日締切**、出席者に限る
宿　題
各題2句　**13時30分締切**（欠席投句拝辞）
「燃える」　板野　美子　選
「大きい」　植野美津江　選
「刺　激」　田中　新一　選
「無　理」　西出　楓楽　選
「避ける」　山田　順啓　選
会　費　1,500円　発表誌呈
投句先・問い合わせ　上田　有行 宛　℡0743-75-0239
〒630-0262 生駒市緑ヶ丘1422-19
主　催　生駒番傘川柳会

温故知新

『谷垣史好句集』より

生まれ来しものに業あり河馬の貌
羽根ぶとん絆も軽くなりました
孤独とは男の部屋の縫いぐるみ
切られても動く愛想のいい尻尾
雨降りに出したハガキが泣いて着き
良妻賢母だからお誘いしたいなり
おばはんを抱く豆腐屋の冷たい手
うるさ型がいるから五十音順に
恋病　春の日付の診断書
改装をしてもゴチャゴチャ荒物屋
やがてニコニコ宅急便で届く核
三人連れの一人無口になりがちで
死なば今　桃色吐息聞きながら
物憂きは春も終りの小間物屋
甲虫かごを逃げても歩道橋
こだわりやたかが小銭という勿れ
女医さんと二人眼科の暗い部屋
痩せ蛙よそ見の癖がなおらない

川上大輪選

まだ癒えぬ貴方へ綴る一周忌
ハチャメチャな孫の個性を楽しもう
温度差が一つの壁を越えさせぬ
悪者になっても守るものがある
ラストスパート弱音吐いてる暇はない
幸せは後でじんわり効いてくる

横浜市　川島良子

本当の味は力を抜いてから
パソコンの中で見たのは別世界
化粧した猫に男は甘くなる
反抗のひとつ口紅塗ってみる
悔しさは握り拳の中にある
母の背の丸さ守っている農地

大洲市　花岡順子

正面を見つめた沈黙の抗議
芽吹くかも知れぬ枯れ木に水をやる
下積みの石に教わる処世術

三原市　鴨田昭紀

哲学を貫く種のあるブドウ
柔軟に争い避ける草書体
奈落から見上げる人間の景色

堺市　羽田野洋介

顔色では敵か味方か分からない
走るなと言われ余計に走り出す
張り切るのもいいがいつまで続くかな
お人よしちょっとだけならご愛嬌
喜怒哀楽きちんと仕舞う胸の奥
行列に並びたくなる変なくせ

倉吉市　中村毅

似なくてもいいとこばかり似て息子
いい夢を期待しながら干す布団
カラオケに付いていけないハイテンポ
出来不出来虫に聞くのがいちばんだ
春の陽を浴びても伸びぬ顔の皺
一年生授業にならぬ参観日

母さんが愛した花を命日に
美人薄命八十四になりました
褒められて野菜に足が生えました
無駄な事してきた証し丸い石
遅すぎた涙に詫びる昨日今日
鶯の片言心癒やされる

田辺市　小川イセ

腕を組むチャンスをくれた通り雨
陽が落ちた海で反省しています
よく喋る母の鱗は柔らかい
北枕不信な音を察知する
老朽化進み音信不通です
春一番詫び状抱え吹き荒れる

弘前市　吉川ひとし

桜吹雪の真ん中にいる老いふたり
甲乙付かぬどこの桜もワンダフル
褒め言葉たっぷり掛けて羽化を待つ
たっぷりの宿題抱えまだ逝けぬ
仏壇に生きるヒントをもらう朝
何事も個人情報喋れない

米子市　野川宣子

何回も仕切り直した春支度
血流も銭の流れも悪くなる
家中の音を読んでる母の耳

岡山県　田中恵

心配を掛けてみるのも愛だろう
躓いたことは言うまい春の雨
アメンボの波紋はとても静かです

雲南市　菅田かつ子

女子会へ送る夫は髭を剃り
ときめきの少し残っていたポッケ
反省をした振り見せているお猿
待ち合わせ何時もわたしが待たされる
おーいこらわたしまだまだ聞こえます
老い磨く仲間と歩くスニーカー

羽曳野市　藤原大子

きれいな花きれいと思うこと嬉し
何事もなく過ぎた日に感謝する
むりやりに形整え傷つける
けん制が見え隠れする初対面
平常心ふと崩したのは勝気
川柳に私の灰汁を知らされる

岐阜市　平野あずま

日脚伸び豊かな時を貰い受け
双子生み嫁爽やかな歩を運ぶ
凝った背をゆるりと伸ばす里のお湯
少子化の証し廃校目立つ里
デジタルを避ける昭和の木の机
3％の帳尻合わす妻の指

松山市　神野　きっこ

買い溜めをして極貧に耐えている
増税に見ない買わない振り向かず
ぎゅうぎゅうと絞られている低所得
リケジョより味噌汁似合う割烹着
パソコンもときどき拗ねて困らせる

福岡県　本田　さくら

眠ろうと思えば冴える午前二時
わが街のここは私のけものみち
同窓会あのひとこまが甦る
同窓会案じた友も車椅子
笛吹けば同じ方向その怖さ

北九州市　小松　紀子

前向きに生きてくための笑顔です
学歴よりも大事ですよネ気品
アーじれったいアレよソレよが口に出る
森林浴うぐいす達のオモテナシ
甘味にはめっぽう弱くて肥満

佐賀県　真島　久美子

春うらら獣になれと言われても
週末の雨行いを責めて降る
守りたいものが私をすり抜ける
さくら草哀しみなんて認めない
迷路から出ない一つの選択肢

札幌市　富永　恵子

約束へ荒れる日もある待つ介護
戻り雪あわてんぼうのアカタテハ
いちにちを冬の汚れとたわむれる
屁理屈の息子の前に発泡酒
屑籠に泣いたりしないプランA

横浜市　長島　亜希子

ごめんなさい花見ついでの墓参り
若いっていいね新芽も人間も
女子会の話題病気や墓になる
お転婆の血を引く孫の二重跳び
増税でもやし料理がよく出され

川崎市　成田　せいじ

花見より散る心配が先に立ち
自分史のネタも豊富な歳になり
旧友の消息探る通夜の席
アルミ貨が生活権を取り戻す
満開のサクラ横目に塾通い

熱海市　三谷　圭角

花火の夜だけ賑々しホテルの灯
半呆けの記憶に消えぬ恩と怨
何時までも生きる心算の友もいる
二十歳前覚えた遊び今生きる
氷河期が早く来そうな予感する

雑踏の中で孤独に耐える葦
ポリシーと言えば聞こえのいい頑固
カンパだけお声がかかる管理職
慣れました日蔭ぐらしの裏表紙
白アリが平和憲法食い荒らす

豊橋市　藤田千休

光り物着けると余計目立つ皺
好き嫌いあって垣根がまた増える
選り好みしているうちに消えた夢
留守番がすっかり板に付いてきた
何となく右に傾く空気吸う

大阪府　神野千恵子

あらためて普通の日々のありがたさ
思い出は心の中の宝物
知識より知恵ある人になりたいな
幸せの扉を捜し日々暮す
玄関にバラ一輪のおもてなし

大阪市　魚住順子

人伝に伝わるように褒めておく
似合ってる出向先の作業服
休みだと目覚ましなしで目が覚める
ダイエット夏は近いぞさあ急げ
大吉が出るまで引くぞ恋みくじ

大阪市　高杉力

とっくりの首をつまんで次を待つ
杯をあげて独りの宴はじめ
怖い人いつもにこにこ笑ってる
俺だけをティッシュ配りが避けていく
首になる正しい人になったけど

大阪市　寺本実

雨垂れはショパン雷雨はリストなり
諦めた場所がスタート地点です
通り雨虹一本を架けて去り
本心を紡ぎ終われば明ける雨期
永遠に美しきもの片思い

大阪市　栃尾奏子

ええかげんながらスマホはやめようよ
他人には厳しく自分に甘い人
八億を借りる才覚真似できぬ
買い溜めで防衛をする消費税
増税で景気回復冷めぬよう

大阪市　松田聰

子が自立担いでた荷が解けていく
小さくて軽いつづらが魅力的
熱愛が冷めてあっさりした別れ
父さんっ子無口だったと父思う
筍を和風おだしが引き立てる

堺市　近藤治子

共白髪あれそれだけですむ喜劇
ほんのりと明日への希望抱く八十路
わが原点小川の魚追った日日
ストライクをピシャリ投げ合ういい仲間
損をした糸をたぐれば欲の皮

池田市　上山堅坊

花吹雪一期一会の風に乗る
散歩道しばし桜のおもてなし
菜種漬けほろっと苦い早春譜
今更に一円玉の重み知る
鈍になる仕草に影が嘲笑う

貝塚市　石田ひろ子

還暦を過ぎてそろそろ似合う色
バイキング元が取れなくなる六十路
絶対が揺れる念押しされてから
ここだけの話はとてもおもしろい
近頃は年相応という鏡

貝塚市　吉道あかね

生きるため否応無しの薬漬
消費税老いの暮らしを締めつける
さり気なく包む優しさ嬉しいね
ばくぜんと不満が溜まる老夫婦
老い二人顔色読んでぶつからず

豊中市　荒木郁子

箒立て貧乏神に見せつける
思い出し笑いで今日もウフフの日
試飲会ぐるり回って三杯目
ウォークマン補聴器ですかと誤解され
手をのばすいつもあなたにふれたくて

豊中市　貝塚正子

老樹とて花の季節は浮かれたい
春愁に豚饅ひとつあれば良い
ありがとうこころの海が凪いで来る
福相と今日は言われて上機嫌
何回もこころの棘を抜いている

豊中市　源田啓生

起き抜けに今日も元気と呪文かけ
賑わいに桜慌てて目を覚ます
飛ぶ日まで大事に種を抱いている
ちっぽけな虫が大地を揺るがせる
球根を愛の深さに植えている

富田林市　中村恵

祖母ちゃんの手首にいつもゴムバンド
手に届く2番の位置で走ってる
ワンテンポずれているけど憎めない
生きる術つくり笑顔で生き残る
水無月の生まれで私雨女

岸和田市　中岡香代

河内長野市　大島友子

鬼も蛇も貴方とならば越えていく
安い皿だけ投げる喧嘩のテクニック
子の自立今は私を生きている
こだわらず無理せず楽に生きている
梅干しが定番母の頭痛薬

河内長野市　辻村ヒロ

高い歯を入れて長生きせよと言う
罪悪感抗いながらケーキ買う
好き嫌い口には出さぬ大人です
古希になり違う自分を見つけたい
認知症チェック項目丸ばかり

河内長野市　藤塚克三

都合良くミスは忘れる記憶力
ガソリンの代わりならんか体脂肪
まあまあですたまたまですと自慢する
説明は素直に聞くがすぐ忘れ
週末も月末も無く自分流

河内長野市　穂口正子

羨ましい婆ちゃんいつも遊んでる
赤い羽買って私の免罪符
気を抜いて鏡を見ると恐ろしい
自画像と違う私がいるみたい
気が付けば隣近所も高齢者

寝屋川市　岡本勲

欲のないところに幸せソッと来る
厚化粧卒業できぬ顔の皺
年金で飲む焼酎が明日の糧
妻のスキついたつもりが倍返し
風通しよくしたばかりに風邪を引き

神戸市　冨永恭子

菜を漬ける土地が育む味がする
父のひげそりつつ残る日を思う
憎しみを老いたる母の皺が消す
恋に恋中也の詩集持つ人に
消しゴムで消せぬ失言軋む胸

神戸市　能勢利子

コーヒーにたっぷり砂糖妻は留守
化けてでも会いに来て欲し嬉しい日
金足りぬ一度も言わぬ妻の意地
子の小言聞こえない振りしています
震災後抜くのを迷う風呂のお湯

神戸市　山根弘子

カレンダー明日の予定は二重丸
残り火にあすを託して生きる智恵
友の愚痴みんな飲み干す縄のれん
梅一輪咲いて浮世の春を知る
心から許せる夫と居る至福

加西市　中川　修

マスクしたナースは皆美人顔
ナースコール聞こえぬ振りのキーボード
付き添いがイビキ寝言で良く眠る
妻音痴寝言に出来を聞いて来る
食べて寝るメタボへの道ひた走る

川西市　大坪一徳

就活も恋もスマホが必需品
本当かな億光年の大宇宙
ああ上野駅金の卵も古稀となり
ゴールデンウィーク孫も年頃寄りつかぬ
ビザ無しの鳥がウイルス連れて来る

篠山市　酒井健二

愛一つ知って世界が一つ増え
すぐ消せるメール飛び交う軽い恋
半世紀ぶりの出会いはお葬式
丁寧な言葉で分かるニセ夫婦
寝たきりの老母が仕切る三回忌

篠山市　佐々木　勇

何んとなく話したくなるお人柄
便利さに馴れてただ今メタボ中
眉型を見ればなる程似た親子
補聴器がやっております黙秘権
過疎の地に響き渡るは呱呱の声

三田市　足立つな子

物要りの祝い祭祀と気が重い
今日のディナーサービス料が気に掛かり
まず傘寿米の祝いと欲がでる
老いなのか味覚が鈍り甘くなる
逃げ腰にならず進んで大火傷

三田市　今西廣子

雑草も休耕田にはいい誤算
腹の虫家にロマンは落ちてない
カステラと諭吉は厚いほうが好き
転んでも転ばなくても傷だらけ
七〇歳月も私もデコボコよ

三田市　上田ひとみ

春風に小さな嘘をとがめられ
好奇心あふれていますその背中
友だちのつもりでいたのごめんなさい
待つこともこんなにほうらいい時間
二番目の夢もムクムク動き出す

三田市　雑賀一泉

アリバイに持って帰った箸袋
今でしょう分っているなら君がやれ
今ですよ言われてみてもこの歳じゃ
役員の首すげかえた偽装品
携帯をつないでほしいあの世まで

三田市　多田雅尚

春を待つ心は花も被災地も
若者の姿見かけぬ墓参り
ＣＭの様には効かぬ市販薬
病室の中は全てがテント村
ゲームなら天下取れると草食系

宝塚市　丸山孔一

慣れんことしなはんなやと睨まれる
薬箱使用期限は五年前
マスクして会釈されたが誰かしら
遠回りするか跳ぼうか水溜り
寝たような寝てないような寝たような

南あわじ市　萩原狸月

問診に症状告げるオノマトペ
涙腺の弱さ詐欺師につけこまれ
天才と同じ汗かきまだ二軍
プラシーボサプリメントが効きました
多数決俺の一票死にました

奈良県　安福和夫

やわらかな態度の奥が読みにくい
愛は愛恋になったらややこしい
携帯で遠隔操作する女房
意外性だけが頼りの楽天家
名を残す意味も意欲も薄れ行く

奈良市　尾畑なを江

誕生日ひとりほろ酔いコンサート
島国の周りはどこも隙だらけ
百均の暫しの散歩世の変わり
陽が沈むその前にすることがある
ほどほどがとっても難儀酒の量

奈良市　前田弘恵

乾燥の予報にたっぷり化粧水
横綱が三人共に異国人
達筆な草書読めずに誠意読む
カタログが届き目だけの旅巡り
ドラマでの電話のベルに惑わされ

和歌山県　森下よりこ

テレビだけが一人の茶の間賑やかす
しゃくなげのピンク心に火を灯す
高齢者に注意と書いてない道路
花が咲き揃うと春色の溜息
あちこちが故障ぼんやりしてるから

和歌山市　磯部義雄

もしと言う言葉巧みな電話口
短命は百も承知の花吹雪
主治医から元気貰った帰り道
棺桶の予約をしたら叱られた
背が伸びる前に竹の子食べられる

和歌山市　福呂秀子

桜下人幸せに染めていく
買い溜めに急かされ気分テレビから
気紛れに今日のコーヒー香り立つ
何時までも百点取れぬ卵焼
サラダから胃を優しくと春キャベツ

鳥取県　下田茂登子

まさかのまさか夫が死ぬとは夢の夢
酸素マスク邪魔で頬ずり出来なんだ
声出さぬ夫へ大声呼んでみる
財産は無いが足跡残ってる
川柳があって一人で生きられる

鳥取市　大前安子

気負うほど次第に足が浮いて来る
三角の涙落さぬ春だから
幹切られ蘖の意地目の当たり
愚痴小言重ねる仲で今日も無事
焼き上げた目刺しに藁の香も食べる

鳥取市　山下凱柳

涙ぐむリケ女の意地を垣間見る
右寄りの指揮棒ちょっと気にかかる
どん底に落ちて真価が問われてる
酒の席安請け合いをして悔やむ
イクメンの出番必死にビデオ撮る

米子市　池岡たけし

亡き母に届けたい詫五十年
子の無理をだまって聞いて逝った母
あれこれと思案重ねて心病み
生きるため多くの無理を棄てきれず
御老人お待たせしたと春の声

米子市　加藤正二

老いひとり寝ても起きても文句ない
ひとり者部屋で仏に見張られる
老いひとり子は里捨てて出稼ぎに
血圧が寒さ続きでうろたえる
大声も笑いも消えたひとり暮し

米子市　田村周子

さくら咲き相棒いない散歩道
たっぷりの時間もらってもて余し
何事もほどほどが良いこの浮世
ご先祖の血を引いてるか飲み助だ
良い思案いい物食べて福待とう

米子市　永井三津子

過疎地にも起きろおきろと風光る
猫パンチお見舞いしたい奴が居る
人のエゴ笑顔で自然破壊する
見たくない子供の様な母を看る
辛いけど悔いは残さぬ介護する

松江市　武島千代枝

リハビリの後に待ってる梅昆布茶
測り終えジョーク飛び出す血圧計
しみ皺に八十余年振り返る
新顔のサプリにまたも手がのびる
〆切りがくると脈拍早くなり

松江市　山根邦代

孫が来る庖丁うれし弾み出す
目覚めだす野山の誘いにぎやかに
花が咲く若芽にやる気もらってる
種まけば笑いの花が咲いて来る
ハンガーに愛着心がぶらさがり

雲南市　松本昌

もったいない過疎バス空車で走り去る
耳遠い老婆笑顔があればいい
詐欺被害性悪説を信じよう
久し振り旧友杖と補聴器と
地域性冠婚葬祭ままならず

岡山市　藤成操江

掴めないチャンス黙ってすれ違う
余生まだ免許更新今一度
現実を拒めば自分を見失う
字余りをころころさせている深夜
眉下がる跳べてうれしい日の鏡

瀬戸内市　東槇ますみ

鳥籠の鍵をなくしてまだ一人
胸の鍵そっとはずした春の宵
プラトニックラブコーヒーを苦くする
ときめきが溢れだしてる旅鞄
茶碗酒義理人情が浮いてくる

尾道市　日谷寛

新鮮な恋若鮎のごと光る
少年の恋麦笛に似た音色
ときめきの恋を連ねて花筏
秘密めく恋葉裏に点す蛍の火
ひたむきな恋稔らせる蝸牛

竹原市　若年幸子

動きなさい無理はするなと医師の言う
初午の赤い鳥居へ祖母の影
祠にも春の喜び盛ってあり
悪戦苦闘春の眠気と五七五と
無人島足跡ひとつおいてくる

山口市　増田めだか

亡父の骨カラカラ鳴って千の風
桜さくら旨いビールと柳友がいる
百歳のまだまだ元気姑といる
それからの私過去など振り向かぬ
指切りが重いあの日のラブソング

段畑の汗は知らない褒め言葉
決断を迷い迷っている歩幅
二番手は名前が付かぬ春嵐
モナリザの笑みまねてみる朝鏡

松山市　栗田忠士

年齢が心の隅で見張り役
ハンドルの遊びが緩くなる余生
曇天に向き鷺草の翔ぶ構え
一度でも歌ってみたい油虫

今治市　渡邊伊津志

祝誕生メガネ屋歯医者補聴器屋
狸爺何ごともなく横にいる
身の錆がふき出してきた秘境の湯
強面もイチコロでっせ杉花粉

高知市　三谷待太郎

川清掃出席だけは顔を出し
回覧板サインだけしてすぐ隣
自転車で転んで顔が少年に
孫誕生祝収金息子する

佐賀市　清水園實

五十年愛が空気に変わる頃
家計簿も赤字連続壁がない
入学式眠った着物羽のばす
同じ事もう三回と孫は言う

唐津市　吉冨節子

曾孫の良く似た名前間違える
東洋の魔女もう出番みんな待つ
温暖化日本列島二分され
両親の遺伝子ついだ歌音痴

唐津市　北村松風

故里を捨てる被災地の現実
復興税取られてるのも知らぬ人
雲多き人生夕焼けがきれい
桜満開花びら一つ落さずに

熊本市　杉野羅天

卒寿でも裸眼のお針自慢です
おしゃべりが過ぎて孫から注意され
顔の皺歎けば友は年輪と
運命とシビレた足をたたいてみる

山鹿市　前田幸子

怨霊の目に囲まれたきれいな目
顔見ればどっちがワルかすぐ分る
ケイタイは原発やタバコより罪深い
犬ネコ鳥みんなケイタイ持ってない

山鹿市　三谷たん吉

懸命に生きるばかりが能じゃない
百歳まで生きると選りによった食
長い付き合い電話の声が暖かい
断捨離の後は今日明日だけの物

シドニー　坂上のり子

メルボルン　藤原ポン吉

評価得る仕事案外いいかげん
また明日ちょっと心を軽くする
営業で梅雨が浸みいる靴の底
変わり目の季節感じて骨がなる

弘前市　須郷井蛙

カルチャーはウーマンパワーが席をしめ
消費税おしん思えば何のその
里帰りまず仏壇に手を合せ
温室の苺は石油食べた色

弘前市　髙森一呑

ハイビンゴ合格祈願絵馬のかず
乗せられて天にも登る豚になる
不器用に生きて波風やり過す
飲むくすり両手で数え切れません

弘前市　肥後和香子

五月晴れ空に大きく字を書くよ
それからのガラスの靴の物語
アンパンマン・ドキンちゃんいて習字会
間際まで揺れていたい女です

塩竈市　木田比呂朗

誕生日すぎて八十路へまた一歩
恙なし日記にしるす句読点
倦怠の日々へアドリブ足してみる
レトルトでまだ増税の後始末

つくば市　嶋本喬

気がつけば割烹着だけ屋根の上
卑怯だな梯子下りた男達
曾孫来て昔にもどる綾取りで
上りたがる煙と一緒孫達は

東京都　井上つよし

清貧が死語でなかった昭和の日
食べ残し昭和ひと桁許さない
炊飯器少し焦げ目を入れて炊き
予告篇ちらりと見せて幕を引き

東京都　大竹一良

気休めとわかっていても友の情
どこにでも気儘に過ごす人がいる
知りつつもそ知らぬ顔の難しさ
駄目だからだめとはきついお言葉ね

東京都　川本真理子

春らんまん人口密度爆発す
調律の音に寂しさつのらせる
鉢植えの蜜柑移して蝶迷う
口つぐむ水底の石揺れる空

東京都　髙岡弥生

戸惑って春の門出に足踏みを
消費税上がったその日家に居る
子のお陰ママ友増えて助け合う
辛い事いい事神のプレゼント

佐渡市　髙野不二

試供品につられてほめる側になり
遊んでも呑んでも税から逃げられぬ
君にもいる筈だピロリ菌
二円値上げばったり手紙来なくなる

静岡市　渡辺芳子

いつまでも咲いてたいけど無常の世
一生はこんなに短いなぜなやむ
病院でお出掛けしなさい言われても
気力だけではついては行けぬやはり年

江南市　脇田雅美

自慢話聴いた振りしてまたかいな
脇あまい隙間風にもつけこまれ
消費税上がり一円浮かばれる
人脈にトントン拍子落とし穴

京都市　清水英旺

春うらら病後の妻と初デート
春眠をむさぼっている脳細胞
人の世はもぐらたたきが好きらしい
世の中は疑心暗鬼の闇の中

長岡京市　日置みどり

噂話相槍打って自己嫌悪
春先は日本に衣笠かけたいな
時々はエゴな私に喝入れる
好奇心目減りしてゆく哀しさよ

大阪府　小栢こずえ

気も踊る桜吹雪の中を行く
図書館へ話のねたを借りに行く
日を浴びて老いも草木も活気づく
楽しい事湧いて来るよな春の朝

大阪府　高木道子

暖春の候でたっぷり花粉群
感情の起伏現状維持の他人
しばらくの桜吹雪に見とれてる
蝶二匹もつれ合いして隠れ宿

大阪府　西川冷子

景気動く少額税が弾みつけ
黙してる影に木洩れ日花咲かす
誕生日余生と言いつ欲が出る
介護品残りは誰に我が為に

大阪府　畑中節子

老眼鏡外して脳も一休み
珍しい鳥呼ぶ庭のピラカンサ
行動のにぶさ何でも齢の所為
贅沢な毎日平和を生きて知る

大阪市　浅井公平

いたずらの孫の落書きそのままに
秘境行き人の多さにうんざりす
奇妙でもみな同じなら流行かな
子供達みんな家族のエースだよ

グルメ旅今年もできたありがとう
体脂肪下げる頼みの野菜食
じじばばの財布で締める食事会
満面の笑みに隠れた咽の棘

大阪市　内田志津子

おりふしに後ろふり向く癖がつき
仏滅の日に土色の車買い
仰向けに飲んだバリウムいちご味
家潰し小銭蠢く床の下

大阪市　梅里南天

衣替えしても私は私です
だいじょうぶ生きているから痛いんだ
相続の話拗れて炎上し
手加減しない褒めてやるのも叱るのも

大阪市　太田としお

年齢を隣に置いて若化粧
核悲劇その電力を使います
あの人と同じ電車で今日も吉
選り好みしてられへんで決めなはれ

大阪市　大治重信

旅三日そろそろ妻の御番菜
不可能はないと信じて花の種
一病を得て昨日とは違う景
これだけは自賛梅漬薤漬

大阪市　田中ゆみ子

血糖値グーンと上がる春となり
母さんの形見器用な指がよい
絵手紙の筆持つ母の輝く瞳
子の助け知らぬ間に増え老いを知る

大阪市　橋本典子

夕食後座りなさいと父の声
願い込め一文字取って名付けする
無口ならイケメンなのに多弁です
一言で終わる話がまだ続く

大阪市　藤田武人

釣鐘の伝統守るお饅頭
桜咲く消費税をも連れてくる
健康も神頼みですお賽銭
花の宴酒と花とのダブル酔い

大阪市　前川善之

税金を籠で掬うが漏れ放題
軍事費は昔も今も白蟻が
文明の進歩人間幸せか
八十路越しぼちぼちけじめ付けなきゃあ

堺市　増田わこう

だんだんと角がとれたら和ができる
目もとから好きという気がはじけてる
これという特技はないが笑顔だけ
長く生き恩ある人が増えてくる

堺市　大和峯二

草取りを終えてシャワーの爽快さ
給料日回らぬすしの贅沢も
赤ちょうちん不平不満を聞いてくれ
少子化で大切な君鯉のぼり

泉大津市　助川和美

始めから水はその気の魚心
いい月だ今夜は昔話しょう
真夜中の目覚め現在過去未来
不便さに昭和の暮らし思ってる

泉佐野市　稲葉洋

郵便に半端な切手貼る不満
孫帰り予約忘れぬマッサージ
五月には話の種にハルカスへ
安普請値切る分だけ雨が漏る

河内長野市　渡邊修

病気して夫婦の仲が良くなった
幸せだ何を食べてもおいしいよ
金無いが時間たっぷり贅沢に
アイドルが酒豪になった同窓会

高槻市　三谷白黒

それいいね最後の言葉甦る
五十年添えば愛憎超えるもの
曲がってた手足ものびて棺の中
このわれに最後の呼吸見せて逝く

豊中市　荒巻夢

尖閣をたてに対話をなぜしない
福祉にすると福祉切り下げながら言う
安倍の支持誰かがゲタをはかせたか
九条でノーベル平和賞取ろう

寝屋川市　荒川鈍甲

夜桜に星見る隙間ないほどに
質素倹約都おどりのヨーイトサ
米寿なの恋する人の二、三人
乾燥注意お肌に水分あげましょう

羽曳野市　安本美喜

俄雨言い訳出来る居酒屋へ
天気予報雨より着るもの気になって
ジャンボクジゴミ箱に捨て酒不味く
今年こそ恥を忍んで薔薇一輪

羽曳野市　磯本洋一

走っても歩く若者追い越せず
一念発起趣味の道へと走り出す
気持ちだけ走って足がついて来ず
なるようになるさゆっくり歩く喜寿

枚方市　河田洋子

転勤で大阪弁がくずれてる
朧月湯ぶねで抱いて深呼吸
下手な落語あっさり落ちてほっとした
夜桜の妖気を月が消している

枚方市　坂本ミヨノ

年重ね怪しい漢字増えて来る
美人にも悩みあります深い溝
組長が変わり回覧右回り
雨上がり庭に星座か沈丁花

藤井寺市　田付絹枝

買う前に取説読むと買えぬ物
チャンネルのどこを押しても吉本が
トラブルが出ると顔出すナンバー2
分水嶺越えた流れは止めにくい

枚方市　松原保

焼きついて目から消えない割烹着
気心の知れた国だけ外遊し
学校は好き勉強は大嫌い
大声で素うどんたのむ大阪人

箕面市　寺井柳童

診察が終り不二家でケーキ買う
新聞を読んでもいい句出てこない
子どもらに天外寛美聞かせたい
カガミは正直ちゃんと私の顔

箕面市　村田恵子

お国訛りの受話器の先に故郷の春
明日がくることを信じて夜具の内
世渡りの術ライバルに教えられ
おかげさまありがとうねでまた明日

八尾市　赤木妙子

孫受験禁酒は出来ぬ茶断ちする
喜寿過ぎて高い補聴器躊躇する
春がきて花粉とPM踊り出す
子離れより辛く寂しい孫離れ

八尾市　田邊浩三

井戸端が町の喫茶へ移動する
余所事の愚痴は突っ込み入れておく
向かい風受けて揺れてる赤帽子
笑ってるのに止まらない涙です

八尾市　中岡妙

定年後妻の合図で恙無し
水温む出合いの季節人和む
マイハート丸洗いして無限大
妻の留守世界遺産が食べられぬ

八尾市　前田紀雄

名門は補欠を競う大世帯
切り札に諭吉登場活気づく
自販機に早くしなよと叱られる
ほめ言葉空気読みすぎ場が白らむ

神戸市　井上忠貞

湯があふれメタボの腹を恨んでる
あぜ道をしっかり固め雨を待つ
紫陽花の青紫は梅雨の巫女
初孫の小さな指がタクト振る

神戸市　興水弘

雑草がだんだん生える気の緩み　神戸市　木村忠義

高齢で多忙な日々のつづく旅
エンジンがかかると食事忘れてる
専門医に診てもらった安堵感　神戸市　玄番美恵子

栄光の過去もあったと言う補欠
おろおろと揺れる心の反抗期
言い訳をしてる議員の目が泳ぐ
増税に財布の紐も固くなる　神戸市　松井文香

本音吐く安堵する人困る人
恋の音色クレッシェンドになっていく
鳴き砂の言い訳聞かぬ事にする
苛立って見た大空は笑ってた　加東市　安達厚

生きている運がいいから生きている
老いるとは電話番すらむずかしい
散る桜弁当に受け春食べる
ころんだらそのまま休む老いの知恵　加東市　岩本美緒子

題目を唱え自転車乗っている
ああ辛労予定ない日の不自由さよ
絵の中に遊ぶ基地あり彩がある
好きな道意地にかまけて果てし無い　加東市　黒崎美紗子

順を待つ患者しみじみ多いなあ
医がすんで薬で待ってくたびれた
ことごとに免許返上困りごと
建売りの旗音立てて客を呼ぶ　三田市　辻開子

予報士を越えた神経痛の足
旬を取り旬を食して春うらら
おおあばれ元気な孫を文字で見る
孫二人同時祝いも喜んで　三田市　野口晶子

愛犬と生きてる今日もとりあえず
天女だと信じた女の碑を清め
赤外線当ててあなたの場所を知る
痛哭止まずそれでも夜は明けていく　篠山市　石田久子

七人の敵より怖い女房どの
白酒にほんのり酔った雛人形
この年になって老母のこころ知る
菜の花を沢山もらいおすそ分け　篠山市　北澤稠民

誰とでも仲良くなれるおでん酒
農の苦を知らぬ背広の机上論
土地もあり家もあるのに金がない
さてどこに車停めたかスーパーで

篠山市　藤井美智子

ちょっとしたサービスへまた足が向く
失敗が明日の暮らしへアドバイス
七回も転ばぬうちに策を練る
七光もらえずやれず凡家族

宝塚市　井上風花

消費税花見弁当売れ残る
忘れ物数では負けぬと胸をはる
おれおれにわたしわたしと返事する
ダイエットがんばり過ぎて拒食症

西宮市　株元玲子

アンチエイジングの術を学んでる
年の数ポッケに隠しザ・チャレンジ
小鳥のさえずりに思わず合唱
なんとかなる言いきかせつつ布団ける

西宮市　福島弘子

初対面が友の友とは奇遇だなぁ
道なりに喜寿をめざそう緩やかに
新しい出会いでまたも縁つなぐ
九十九折を越えた老母には及ばない

三木市　山口久子

庭の草わが世とばかり生きのびる
坂道を杖なく歩き頑張るよ
ランドセル背中でおどるひ孫です
ひなまつりわが家も同じ花ざかり

奈良県　谷川憲

へばりついた脂肪がとれぬ減量苦
プライドを捨てる修養まだ出来ぬ
きらめきの残像置いて逝った友
敗者にもあった歴史が語られず

和歌山市　北原昭枝

花ばさみ活ける大きな夢をもつ
キッチンの古い茶碗にある役目
本当のこころが言えぬおぼろ月
短いが楽しくすぎた里がえり

和歌山市　平田元三

吸う吸うが老いに苦しいハーモニカ
アイディアが転がっている台所
授業ではウトウト塾でしゃんとする
七日後の予報は当てにしない梅雨

岩出市　村中悦男

アウトドアーまたずに花が散り急ぐ
子ら帰るブランコ少し揺れ残し
体調の不安ドクター解いてくれ
割り切れぬ余り残して生きている

紀の川市　楠原富香

再三の注意に閉じた耳ゆるむ
幸せの花は目立たず咲いている
産声が家族の絆ふかくする
今日の疲れ癒してくれる窓明り

饒舌が三人寄れば人を刺す
海峡の彼方は神経過敏症
どの花を抱いてもよろし憂さ晴らす
くしゃみして花粉に狂う視神経

田辺市　大峠可動

過疎の村寺の鐘から暮れて行く
無駄話何時も楽しい老い仲間
笑い声語る話は老いの明日
世界は一つ平和な国を願う日々

鳥取県　飯野菖子

見ていたい楽しい夢はそこそこに
川柳で時代の流れ読んでいる
舞うように別れを惜しみ桜散る
世間体ばかり気にして狭くなる

鳥取県　田口清帆

公開の皇居桜に人の波
サクラ今日本列島花の旅
下中上吉野のサクラ奥と咲く
散歩すりゃ徘徊容疑される歳

境港市　中井虎尾

心配ごとつぎつぎ増える老いの脳
欲がありまだ生きて行く気力ある
苦労して来た分早く衰える
老化度が進みときどき深呼吸

鳥取県　橋谷静江

お医者様内緒でお菓子食べてます
仏様お下がり団子満腹よ
あと何年お彼岸団子作るやら
猫の恋独居ばあさん怒らせる

鳥取県　森脇美和子

札束がゴミ袋から顔を出す
外食つづく妻よキッチン忘れたか
君の背に愛の温度差見え隠れ
極楽の入試を閻魔にらみつけ

鳥取市　坂本とも湖

札束を積めば尻尾ふってくる
くり返し飽きた話を聞いている
知恵絞れ先ずは頭に活力を
若かったデート映画も夢の中

鳥取市　高原かおる

知らぬ間に初な心に毛が生えた
消費税プラス二円で実感し
井の中の蛙じゃ取れぬ金メダル
喉元を過ぎれば苦労知らぬ顔

鳥取市　谷口回春子

議事堂でスマホ棒読み新時代
あればなぁー俺もポーンと妻名義
老夫婦聞こえは良いが老い二人
年金暮し買い溜める余裕無い

鳥取市　津村律子

一つづつさぐる記憶に母がいる
私には過ぎた嫁です楽隠居
まだ遠い思う八十路の坂見える
次はどこ流れるままに生きている

倉吉市　岡崎　美知江

躓いて歩幅を狭く戻してる
ひと言が刃となって重荷負う
口車乗ってへそくり泡と消え
ブランドに縁がなくなるメタボ腹

倉吉市　鈴木　たけ代

チャンスには欲と迷いを捨てるべし
今日も無事明日の太陽拝みたい
真っ直ぐな道を素直に歩む日日
ゆうゆうと寝そべり雲と手を繋ぐ

倉吉市　田中　紀美恵

看護師の出戻りだめよおだいじに
どよめきと歓声ソチの羽生技
うさ晴らししたい今夜もにがい酒
口ぐるま乗って損して恥をかき

倉吉市　堀　かずこ

乱雑に脱がれスリッパ笑い出す
増税に買占め無理な侘び暮らし
つれあいの罠に互いがはまり合う
飴玉で文句一つをそっと呑む

米子市　生田　和之

生れ持つ気だての良さは変わらない
窓明り光の帯も春の色
物忘れ海馬の窓がずれている
それぞれに愛の形があるように

米子市　小野　鶴子

継ぐ子のない田地を守る尽きるまで
全没句上下入れ変え投句する
フルムーン期待するほど事もなし
菜の花寿司相伴しますひなまつり

米子市　見山　温子

桜に酔うてさくらちらしの味に酔う
春の陽に手抜きの掃除見透かされ
「ごちそうさん」終りふぬけのようになる
頑健な夫が風邪を春の乱

米子市　森脇　麗

リードした時に止めたい口喧嘩
心配は尽きないが手立ては尽きる
天秤に暇とお金が釣り合わぬ
盃の横で薬が小言吐く

米子市　湯浅　俊久

いやいいよ人を許せることも愛
神ほとけ愛も空気も目に見えぬ
ふたりして愛の深さを競いあう
仕舞い風呂誰が長生きするのかな

松江市　相見　柳歩

誕生日をあまり気にせぬおじいさん
古里へ昭和の空気吸いに行く
擦り減った消しゴム様に勲章を
ここまでの話あちこち飛んでいる

松江市　中筋弘充

マイペース自分の道をのんびりと
平和への心はひとつ人の道
もの忘れひとつやふたつなんのその
偏見と差別の旗をおろしたい

出雲市　黒目英男

ＤＤＴで絶えて久しい蚤虱
春一番閉じ込もり居る花粉症
蕗の薹たっぷり馳走みやげにも
山の端でひっそりがいな蕗の薹

安来市　原煩悩児

病窓の春の野山がむずがゆい
草の無い畑褒められ手を抜けず
花だよりテロのニュースが同居する
用心かぐうたらなのかやせ蛙

岡山県　池田たか子

出しそびれ錆びた切り札持ったまま
肩凝って心に隙を開けてみる
免疫力弱いがやる気人一倍
許し方わからぬままに友は去る

玉野市　片岡富子

歯が疼くので正露丸噛んでいる
新しい明日のために手を汚す
鳥帰る空を仰いでから無口
傷口が痛いふりする春の風

岡山市　丹下凱夫

湯上りのさっぱりを待つグラス二個
ときめきのカタチでのぞく蕗の薹
野にスミレ華の私をどこに置く
堕天使のささやき毒のある苺

岡山市　永見心咲

ときめこうまだ化石にはなりません
財布にはすぐに小銭があふれ出す
要領が悪くて尻尾持たぬまま
物分かりいいばあさんになりません

岡山市　前田恵美子

はつらつとしていて薬飲んでいる
どっぷりと昭和に漬かり整理する
和ぶとんの重さで夢に魘される
側に居れチャンネル権は譲らない

竹原市　土井輝恵

自画像の額にしわが二本増え
ぶり返す寒さに耐えたボケの花
今年こそ優勝するぞ我らのカープ
手をさすり明日の無事を祈念する

竹原市　六田半徳

（坂本加代さん・高山清子さん・中前幸子さん・柴本ばっはさん・安東モモさんの句は42頁にあります）

新川柳鑑賞 (28)

麻生　路郎

年四十タイプ何時迄打つつもり

（季　賛）

会社の隅で、終日パチパチパチ、ガチャン、チーンとやっているオールドミスのタイピストを詠んだ句である。別に独身主義者ではないが収入がいいのと良縁に恵まれないので、いつのまにやら芳紀正に四十になったのであろう。年が年だから初婚はのぞめないし、後妻になって気苦労するよりも、いっそ今のままが気楽だと半ば結婚をあきらめているようである。

それを「いつまで打つつもり」と常に異性の社員に話題にされているのである。

腕時計動かなくてもいゝのんよ

（豆　秋）

若い女性はアクセサリーを愛する。虫と称する小さな腕時計となると又しても動かなくなる。動かなくても腕に腕時計があると云う意識だけで充分満足が買えるのである。

それは時間を知るための時計ではなくて、装飾としての時計であるからである。若い女性の心理をハッキリと掴んだ句である。

紅一点凄い拍手で立たされる

（博　也）

八頭身でないにしても、男ばかりの中にタッタ一人の女が交じっていると、その集まりを非常になごやかにするものである。次は何子さんに、お願いしますと幹事の人が尻込みする女をムリに立たせると、期せずして盛んな拍手が起るものである。そこをとらえたのがこの句である。

でもでもと女あくまで逆う気

（高　志）

事件は少しも判らないが、男の云うことを、「でも」斯うだと云って、素直に請けいれようとしない斯うした女が世の中にはいるものだ。それが逆らわなければならんほどの大したことではないにしても「でもでも」を繰りかえすのである。女性心理の一面を巧みにつかんでいると思う。

すねて見たけどほッたらかしにされ

（良　子）

恋愛中の男女とすれば、すねた場合に、ほったらかしにはしないであろう。ほったらかしにしても、大丈夫だとたかをくくっているところから考えて、この句は中年夫婦のことを詠んだものであろう。この句の味は口語体からうける軽味であり、ほったらかしと云う大阪弁がこの句をより効果的にしていると思う。

一円のお釣へ女わるびれず

（水　客）

虚栄心の強いのも女の一面だが、一円のお釣りでも呉れるまで平然と立って待っているのも女ごころの一面である。そしてこの句は後者を詠んだものである。一円とは最小限を表したもので必ずしも一円に限った訳ではない。

ファッションショウ銀座を歩く気で歩き

（東岸子）

これから売り出そうという流行衣装を纏うて、いかにも得意そうにステージを前方に歩いたり後方にしりぞいたりするファッションショウのモデルくらい嫌味なものはないが、それを銀座を歩く気で歩いていると見立てたのである。

それは作家の主観に外ならないが、或はそうかも知れないと同感の出来るところにこの句の面白さがある。

窓ぎわの女の腕は蛸に似て

（方　正）

これは感覚派に属する句である。と云って作者が感覚派の作者だと断定する訳ではない。たまたまこの作者が「窓ぎわ」の女の腕を蛸に似たように感じたので、コレはこの作者の主観であるが、この主観にいささかでも共鳴することが出来るとすれば、この句にはいのちがあるとしなければなるまい。

後ろめたさの一分の理

『上方芸能』発行人　木津川　計

忸怩たる思いが九年余り続く。

『川柳塔』の同人句評「川柳塔の川柳讃歌」を僕が担当させていただいて九年三カ月、一一一回になった。

川柳の実作をせず、知識も浅薄な門外漢を起用してくださったのに恐れ入り、こわごわお受けしたのだ。

どうせ一年で御役御免になろうと思っていたら二年が三年…、全くもって困り果て、毎月締切りが近づくと僕は、わずか六句の選評に命を縮める。

毎号、選句を終えると僕は、川柳への大きな勘違いをしているのではないか、トウシロウの慙愧の念は深く大きい。

編集部も不安であろう。僕の同人句評だけでは、心許ないから重鎮の「川柳塔鑑賞」を別に二頁設けている。毎号その選句評を読んで僕は愕然。こんな句があったのか、この句もあの句も見落していたのか、ときまって落ち込む。

なぜ落ち込むのかと問われれば、僕は後ろめたいのである。実作者でなければ気づけぬ、そんな見落しを、重ね続けていると思う訳はこうだ。

毎年赤穂市が「身近な怒りの川柳コンクール」を行っている。市に提案したせいで僕が選考委員長になった。メンバー六人の内、川柳家は大西泰世さんだけだ。

大西さんの指摘や説明に僕は何度虚を突かれ、無知を恥じ、教えられたかしれない。つくづく素人の怖いもの知らずを思うにつけ、後ろめたさはつのるばかりだ。なにしろ田辺聖子さんの憤慨を思えば、僕は消え入らねばならない。

大著「道頓掘の雨に別れて以来なり」のあとがきで田辺さんは、川柳が短詩型文学の中で誤解され、貶しめられていることに次の異議申し立てをされた。

「日本文学史にも川柳の項はなく、インテリは見向きもせず、新聞、雑誌、各種団体の川柳募集は（編集部選）、として平然としている。（短歌や俳句の投稿欄に、編集部選がまかり通るものだろうか）柳誌は多く、川柳人口も多いのに、川柳の社会的・文学的権威はいっこう高まらない」

罷り通る（編集部選）とは（素人選）と同義語だ。確かに短歌や俳句の（編集部選）は、ない。なぜないのかは明らかで、難しいから専門家に委ねる。素人にわかるものかの「文学的権威」は高い。

それ故に僕の後ろめたさは大きいのだが、まるっきり言い分がない訳でもない。

専門家にしかわからない文芸なら、専門家を対象に詠めばいいではないか。しかし、あらゆる文芸は厖大な素人読者のために書かれる。面白いか、くだらぬか、読者はすべて素人なりの評価をくだしている。

その評価がすべて見当違いで、専門家から見れば噴飯物ばかりと言い切れるか。一例を挙げる。

妹が夏の夕ぐれひそひそと
親孝行の話持ちかける　（松田梨子）

いつかの朝日歌壇で四人の選者中、三人もが選んだ歌だ。ことに馬場あき子さんは十首選の筆頭にこの歌を選び、次のように評した。

「梨子さんは十五歳、妹のわこさんは十二歳。『親孝行の話』は心にしみてうれしい」

うーん。「心にしみ」る歌だろうか。僕には悪知恵を働かせるわこちゃんの悪巧みとしか思えない。馬場あき子ともあろう歌人がこんな解釈をするのか、の思いなしとしない。読者諸賢のご意見を伺いたい。

わこちゃんには魂胆があって、親孝行を出汁にしたのである。梨子ちゃんに知られたくないから「ひそひそ」と「持ちかけ」ているのである。

いたいけな少女がおとな社会の駆け引きを身につけつつあるのだ。それは成長でもあるし、辛い成長記録でもある。すでに梨子ちゃんも純真無垢ではない。妹の奸計を見破っている。

いや、馬場さんの評価が正しく、お前の解釈は間違いだ、となるのなら、僕は「川柳塔の川柳讃歌」でどれほども曲解し続けてきたことだろう。だから後ろめたいのである。

しかし、専門家の評といえども間違いはあろうし、捩じ曲げもあるだろう。たとえば次の俳句である。

八十は余命いくつと思う年

ある大きな団体の会報が設ける「俳句塾」の添削コーナーの原句である。講師は伝統俳句協会のえらい方でNHK俳句会の重鎮でもある。添削してこうなった。

傘寿の日余命思ひて更衣

講師はこう言う。「この句には季題がありません。いつも申し上げているように、俳句には季題が必要です。そして季題に託して思いを綴るのが俳句です」と。

そうであろう。ことに「ホトトギス」同人でもあるこの講師の立場は。しかし、開かれた大きな団体のオープンな「俳句塾」である。毎号選ばれる特選三句、入選二十句を伝統俳句の枠に閉じ込めたら無季句や自由律を含む現代俳句は浮かばれない。選句は公平な俳句観に立たねばならぬ。

それにしても、原句の切実はかくも扮飾されて命を失うのであろうか。すると、ある中学生の詠んだ次の短歌を思い出す。

鳥がいる生きてなかった驚いた
理科室にある鳥の剥製

この歌を専門歌人が詠むとどうなるか、ある歌人が詠み直した。

生きおりと思えばいたく驚きぬ
理科室にある鳥の剥製

中学生の驚きは、ほぼ詠嘆に変わった。川柳の選句にかかわり、後ろめたさのつきまとう僕であるが、「まるっきり言い分がない訳でもない」と先に書いた訳はこういうことで、「盗人にも三分の理」があれば、素人にも一分の申し訳は立つ。そう思って「川柳塔の川柳讃歌」を担当している。

川柳は素人選句の戦場である。「日本最大の公募川柳」と毎日新聞が誇る「仲畑流万能川柳」は年間十四万句台、一日一六〇〇句から毎日十八句を選び続ける仲畑さんはコピーライターが本職だ。

（編集部選）を叱った田辺聖子さんは有数の川柳通にして職業は小説家である。門外漢が川柳を応接して著作でどんどん選評される。であれば田辺さんの異議申し立ては自家撞着に陥っている。

田辺さんや仲畑さんほどでなくても、完然素人が短歌や俳句の選評に加わったら、日本の短詩型はもっと面白くなるだろう。

（川柳「葦群」No.29より転載）

誹風柳多留一二篇研究 12

小栗清吾・細井龍夫
伊吹和男・山田昭夫
石川道子
清　博美

87　**向ふがわ無イでうなぎがうれる也**

小栗　「向う側無い」というのは、道の一方の側にだけ家並みがある、いわゆる片町をいうのだと思う。反対側の家の人目を気にしないでいいので、密かに鰻を買いに来る人で繁盛するというのであろう。そういう客は誰かといえば坊主という連想ゲームでいいのではないか。

うなぎやへのろりと化て山の芋　九二18
左視右視（タミカウミ）してうなぎ屋へ山の芋　一〇九32
うなきやて囲ヒの下女ハなふられる　天八麗2

したがって、
おもんはかつて片町へかはやきや　拾四30
となるのである。

細井　賛。片町はどこなのか、地図を見たがよくわからない。類句から上野山下の浜田屋と大和屋のことでは、と思われる。向い側は堀があり、その向うは寺ばかり。

入道も匂ひに迷ふ仏店　一〇六12
かばやきかどくしせゆの鼻へにほふ也　天二満2
仏店うなぎへ山の芋が出来　六九26

山田　賛。細井説成る程。

清　賛。

小栗（再説）　「仏店」と「蒲焼」がはっきり結ばれている句は、細井兄お示しの通り、全て後期で、主題句の頃（安永）どうなのかよくわかりません。加えて、『世のすがた』に「うなぎの蒲焼は天明のはじめ上野山下仏店にて大和屋といへるもの初て売出す」という文献があるものですから、主題句を仏店とする決断がつかないでいる次第です。

かばやきも斗てすまぬ所なり　七6・明六松2

を、「教養文庫」で西原亮先生が、仏店の句としておられるが、根拠が書いてありません。「参考図」として『山下珍作』の絵がありますが、この本は天明二年の洒落本のようです。

何かの輪講のとき（思い出せませんが）、この問題で困った記憶があります。どなたか教えて下さい。

88　**くわんおんの茶やのきうじハびくくに**

小栗　「観音の茶屋」は浅草寺境内の「二十軒茶屋」とし、「びくびくに」は観音の縁でひとまず「比丘比丘尼」を宛てるとすると、二十軒茶屋で給仕をする人は、場所柄、比丘・比丘尼（出家して具足戒を受けた男・女）みたいなものだという句意になろうかと思うが、何が面白いか。「びくびくに」は給仕が何かを怖れて「びくびくしている」様子を示唆するかとも思うが、それが何かわからない。プロの茶屋女が鼻下長族に尻を触られるぐらいにびくびくするとも思えないし。ご教授願います。

細井　賛。

ふだらくの地に善女人二十人　一八34
普門品五ッへらして茶見せなり　三六23

というように仏語を使っただけではないかと……。

清　賛。仏語仕立ての句でいいのでは……。

89　**はなやかなめんふくを着るかる井沢**

小栗　軽井沢の飯盛女郎を嘲った類句多数の一。田舎としては華やかに着飾っておいでだが、なにしろ綿服（綿布で仕立てた衣服）だから何ともはやと。

かる井沢太夫もへたつあかねうら　一三35
此里の太夫と言も木めん物　宝九仁

清　賛。

90　**じゆくすいのげんくわにたへぬ　はやりいしや**

小栗　流行医者が、玄関に薬取りを多数待たせているという、これも類句多数の一。居眠りどころか、待ちくたびれて熟睡するものが絶えぬのである。

流行医者玄関に絶ぬ大あくび　一三七24
はやり医者一トかたまりにねふらせる　二一1

清　賛。

91　**地かみうりかゞみときをばくぼくみる**

小栗　窪く見るは、見くだす。軽蔑する（「江」）。

地紙売りは、扇の地紙を売る行商人で、陰間上がりや勘当息子など優男が多かったことになっている。一方鏡研ぎは、加賀国からやってきた風体みすぼらしい老人ということになっているので、この両極端の業態を並べて、洒落者の地紙売りは身なりを構わぬ鏡研ぎを見くだすに違いないと作った句。

地紙やと咄のあわぬかゝみとぎ　筥四21

清　賛。

92　**ころびおれやいとおるす居大ふざけ**

小栗　おなじみの留守居役と踊子の句であるが、何が面白いか今一つよくわからない。

「転びおれやい」の「おる」は「他人の行動を見くだす・軽く見る補助動詞」だろうから、「転べやい」「転びゃがれ」というニュアンスか。とすると、いくら「転び」（裏売春）が準本業の踊子に対してとはいえ、こういう言葉を口にするとは、いかにも「大ふざけ」だねというだけの句か。

ぐつ〳〵をしてくれおれと留守居いひ　二一18

清　賛。

93　**一トおどり仕廻ふとかたきやくいじめ**

小栗　歌舞伎の舞台演出の句。詳しいことを知らないのできちんと解説できないが（どなたか教えてください）、

しよさをする内かたきやくてれて居る　安六義4
所作の内まじいり〳〵赤つつら　筥二15乙
しよさの内とりて四五人てれて居ル　一七39

などの句から類推するに、劇の途中で例えば主人公である女形が劇中舞踊をする場面があり（所作という）、見せ場であるから敵役など外の登場人物はじっと動かないでいるという演出方法があったのだと思う。主題句は、主人公が所作で一踊り終わると本来の筋書きに戻り、敵役がその主人公をいじめる芝居を始めるということであろう。

清　歌舞伎の知識なく、勉強しなければと思ってはいるのですが……。

英語 de Senryu ㉚

麻生路郎句集『旅　人』

英 訳　吉村　侑久代　Kim HORNE

近道にされてる敷地　売りに出し

a site for shortcut
has been putting up
for sale

鍵ツ子だったからか　虫けらに魅力

latchkey kid
I was---
I've loved the worms

～リバーウィローのため息～
(川柳の国際化６：川村安宏の英訳川柳 (1)「詩の名刺」)

今回は現代川柳の英訳を紹介します。長塚節『土』*Earth* (Liber Press 1986) の翻訳者である川村安宏（茨城大学名誉教授）は、所属吟社の「つくばね川柳会」の機関紙に、1996 年以降一年ほど会員の川柳を英訳しました。現代川柳の英訳が始まったのです。ある時、「タンカジャーナル」編集長である妻のハツエ（1931-2012）が、「自作の短歌をいくつか載せたブックレット（小冊子）を名刺代わりに配っている人がいる。」と言いました。二人は名前、職業、住所を書いた名刺を配るより、その人の短歌作品を載せたブックレットの方が、作品と人物の印象が残り、「詩の名刺」になると思いました。実は欧米では自費出版のブックレットをチャップブック（*Chapbook*）と呼んでいます。厳密にはチャップブックは、「英国で 19 世紀以降に、行商人やチャップマン＊により流布したもので、内容は主として大衆向けの物語やバラッド、論説などを含む小冊子。」を意味します。＊＊　チャップブックには「詩の名刺」という意味はありませんが、詩のブックレットを配布し、その内容を人に知らしめることから見れば、「詩の名刺」とチャップブックに共通性を見出すことが出来ます。その後、川村はアメリカのアーカンソー州立大学で学究生活を始めるにあたって、「詩の名刺」となるブックレット、つまりチャップブックを出版してアメリカに向かいました。これは日本で初めてのセンリュウ・チャップブックと云えるでしょう。次回、川村の「詩の名刺」をもう少し詳しく紹介します。お楽しみに。

＊*chapman* 英古語：行商人、呼び売り商人（*Random House English-Japanese Dictionary 2nd Edition*）　＊＊小林章夫『チャップ・ブック：近代イギリスの大衆文化』（晶々堂 1988）

西尾 栞句抄

（定本『西尾栞句集』平成八年発刊）

長男誕生

初産へ神棚しかと灯をともし

タテ ヨコ ヨコ 子供の昼寝のたのもしし

内は役者が揃うています子沢山

子沢山蚊帳吊れば吊る騒ぎよう

洗濯を手伝う邪魔も女の子

ポケットから出るたのしみへ子は並び

どちらにも似ず赤ん坊猿に似て

愛の結晶もう言うことをきかず

四人目を抱いて器用に飯をつぎ

這えば立て 立てば歩めのカメラ向け

赤ん坊湯気のまんま抱き上げる

長女　三女昭和四十年十月に男子出産

ヨーイドン産声あげた孫二人

ようきいときやと妹ついでに叱られる

つぎつぎに寝顔のぞいて俺の子だ

泣きやまぬ子へ倉の鍵がちゃつかせ

油断がならぬとは伜のことであり

子沢山どっちでもいける柄をより

医者の機嫌を損ねる程に親は訊き

次女の死

平均寿命四十年を残し娘逝く

肉親の嗚咽の中の釘の音

盂蘭盆会幸せうすき次女なりし

江戸を楽しむ 18

婚礼は恥ずかしい

小栗清吾

お見合いがうまく行けば、いよいよ婚礼です。嬉しくも恥ずかしい儀式です。

一生の極彩色はよめりの日　拾一30

「よめり」は「嫁入り」。女性にとって、化粧・衣裳・嫁入道具は元より、すべてが絢爛豪華・極彩色に輝く日です。

姿見へお暇乞いは綿帽子　宝一一義2

現在の結婚式では、和装の花嫁さんは角隠しをしますが、江戸時代は「綿帽子」を被りました。花嫁衣装で着飾り、最後に綿帽子を被って、慣れ親しんだ姿見に暇乞いをします。

花嫁は輿か駕籠に乗って行きます。それに、近親一同と嫁入道具が続きますが、

いびられに行くに立派な支度なり　天五義3

というのは、川柳作家の皮肉な観察です。鬼より怖い姑・小姑が待っています。

わが内へはじめて入る恥ずかしさ　安九宮2

やがて夫の家に到着。これから自分の家になるところへ初めて入ります。恥ずかしくもあり、また不安もあることでしょう。

裃の音ばかり聞く綿帽子　四34

綿帽子は真綿を延ばしたもので、頭部をすっぽり覆いますから、まわりが見えません。隣りにいる花婿の裃の擦れる音が聞こえるだけです。

一生に一度男へ舐めて差し　一二1

いよいよ三三九度の盃です。男と盃のやりとりをするなど、一生に一度この日だけです。普通の酒席ならば「飲んで差し」となるところですが、そこは花嫁ですから「舐めて」程度です。

恥ずかしい耳へ謡の切れっ端　四六8

仲人が「高砂やア、この浦舟に…」と謡うのが耳に入ります。長い謡のほんの一部だけ謡いますから、「切れっ端」です。

三三九度が終われば、儀式は終了。花嫁はお色直しです。

白くなり赤くなりする恥ずかしさ　安五梅1

白無垢から色模様の小袖に着替えるのを詠んだ句ですが、白粉を塗った顔が赤くなるのを匂わせているのかもしれません。

あとは夜中まで大宴会です。

色直し迄は仲人禁酒なり　天二礼2

儀式の間は緊張していた仲人も、盛大に酒盛りの仲間入りします。しかし、我を忘れるほど酔ってはいけません。

仲人は酔って言うのが本の事　拾一37

仲人口がばれるような「本当のこと」を言ってしまっては一大事です。危ない、危ない。

嫁へ差す迄はろれつが回るなり　拾一34

ご披露のお酌に回ってきた花嫁に、返杯のお酌をした頃まではシャンとしていたのですが、その後は泥酔状態という親戚の叔父さんあたりでしょうか。

でも、いくら酔っても、婚礼のしきたりは守らねばなりません。

婚礼の座敷でこむらびらきがし　拾一37

「かえる」は禁句ですから、腓返りを起しても、「腓開き」と言わねばいけません。もちろん冗談です（笑）。

かくして婚礼は無事終了。続いて、

吉日は昨日になって夜は明ける　明五義3

と、新婚第一日が始まりますが、

宵よりも今朝被りたき綿帽子　四一2

当分の間、恥ずかしい日々が続きます。

愛染帖

新家　完司　選

（投句　272名）

物忘れ弱味じゃなくて強みだろ

三田市　北野　哲男

（評）忘れるということは、その事柄から解き放たれるということ。忘れてしまいたい嫌な記憶から解放されるのは大いなる強みだ。

忘れたんじゃなくて覚えていないのだ

松江市　石橋　芳山

（評）そう、本当に「覚えた」ことは生涯忘れない。人の名前や難しい漢字など、「覚えよう」と真剣に向かわなければ覚えられない。

犬の世話して子育てを振り返る

長岡京市　山田　葉子

（評）食事の世話から排泄の始末、遊び相手から入浴まで。手がかかるのは犬も赤ん坊も一緒。犬のおかげで母性本能が甦った。

先生が死んでも続くクラス会

尼崎市　市坪　武臣

（評）先生が先に逝くのは順当なこと。それでくじけては先生が嘆かれる。その人柄や思い出を語り継ぐためにも続けなければ…。

プレイボール春はじゃがいも植えてから

鳥取県　細田　裕花

（評）ジャガイモの植え付けは桜が咲く前。寒いときに耕すのは大変だが、「春の到来だ、もうすぐ花見だ！」と思えば元気が出る。

蟻よりも参考になるキリギリス

堺　市　奥　時雄

（評）蟻のようにストイックに貯め込んでもあの世には持って行けない。かけがえのない「今」をもっと謳歌すべきではないのか？

娘に叱られ孫に慰められている

海南市　堂上　泰女

（評）娘はしっかりした母親になり、孫は優しい子に育った。「しかし、我が身は…」と愚痴りたいだろうが、順番だから仕方がない。

蕎麦食べに行ったついでに寺参り

堺　市　村上　玄也

（評）イスラム過激派の行動を見ていると、「宗教は恐ろしい」と思う。神仏に対する姿勢は本句ぐらいが穏当でいいのではないか。

したたかに酔えばゴッホの星月夜

高槻市　原　洋志

（評）精神病院で療養中に描いた「星月夜」。ゆらめく糸杉、星と月、すべてぎらぎら渦巻いて、酩酊したときに遭遇する風景と同じ。

永眠があるから不眠気にしない

芦屋市　竹山千賀子

（評）不眠症を嘆くなかれ。イヤでも眠らなければならないときが来る。それは、もう目覚めなくてもいい永遠の安らかな眠りだ。

東大阪市　北村　賢子

ゴミ出しへ鏡ぐらいは見て行こう

松江市　三島　淞丘

今日もまたルーチンワークして暮れる

橿原市　安土　理恵

健さんの胸ならどっと泣けそうだ

大和郡山市　坊農　柳弘

浴びるほど呑んで騒いで以下余白

香芝市　大内　朝子

幸せな時共有の飲み仲間

神戸市　大島まさる

酒粕を焼いて食べてる彼岸過ぎ

佐賀県　真島久美子

花柄に負けているのは目鼻立ち

藤井寺市　鈴木いさお

ビブラート効かせて「ぞうさん」を唄う

長岡京市　日置みどり

ドンマイン死ぬこと以外かすり傷

堺　市　加島　由一

爺ちゃんはナンパ気分のデイケア

和歌山市　柏原　夕胡

恋人の目線で見ていたい夫

池田市　上山　堅坊

浅い瀬でちゃぶちゃぶ遊ぶ老いの恋

和歌山市　坂部紀久子

透き通るまで推敲をして生きる

酒肴開花宣言待ち望む
弘前市　稲見　則彦

さくら咲きぱっとあかるい胸の内
吹田市　木下　敏子

律義にも桜満開喜寿となる
川西市　山口　不動

ぼんぼりを灯してサクラ眠らせぬ
鳥取県　西谷　悦子

昨年より二回も減った花見会
三田市　堀　正和

酒を呑むために花見について行く
岡山市　丹下　凱夫

酒好きの桜が猪口に舞い降りる
鳥取市　岸本　孝子

ママチャリで公園梯子する花見
貝塚市　石田ひろ子

花吹雪浴びて夫とストレッチ
奈良県　渡辺　富子

宮島の鹿が食べてる花吹雪
羽曳野市　宇都宮ちづる

絵手紙が想い出させる春の午後
和歌山市　喜田　准一

ときどきは大きな声で笑いましょ
三田市　上田ひとみ

飢えた日の記憶今でも箸拝む
茨木市　藤井　正雄

傷口が疼く今夜は深い雪

逮捕するなどと悪友誘う酒

梅酒飲み次の梅の実待っている
海南市　小谷　小雪

誰からもお便りのない日曜日
枚方市　寺川　弘一

診断書あんまり嘘は書いてない

宗教家神と仏を弁護する
貝塚市　吉道あかね

古時計狂ってからのいい時間

昨年より狭くなってる守備範囲
寝屋川市　平松かすみ

細胞がどうのこうのとサイエンス

よいニュース連絡網で来てほしい
弘前市　髙瀬　霜石

できることすこし　募金とボランティア

長生きをすればさみしいお葬式
鳥取県　斉尾くにこ

そのままの昨日が待っている机

あとかたを車に残す春の雨
青森市　守田　啓子

裸電球の説得力に敵わない

どん底でちゃぷちゃぷと波の音
河内長野市　村上　直樹

うれしめでたし子等うち揃い喜寿の宴

自慢気に薬の数と酒の量
寝屋川市　森　茜

早生まれです根っからのスローモー

まん前でハックションそれはないでしょう

生臭く明るい若い絵の自分
富田林市　山野　寿之

介護して介護を受けぬ下準備
西脇市　七反田順子

毒味してあなたに食わす芋の蔓

好きだから毎日カレー食わせてる
奈良市　岩本　浩二

恙無くただ凡々と凡々と

記憶から消したい人が粘っこい
鳥取市　福西　茶子

変わり映えせぬが三キロ減っている

新緑を目薬にして七千歩
松山市　栗田　忠士

ピロリ菌七十年も飼っていた
大阪府　小栢こずえ

規則良く出た便にまでありがとう
札幌市　三浦　強一

クラス会生きのいいのは未亡人
河内長野市　梶原　弘光

知日派という言葉聞きホッとする
大阪市　古今堂蕉子

ワンツースリー私はいつも三拍子
枚方市　松原　保

脳と足元気なうちに目医者行く
河内長野市　山岡冨美子

ボランティア傘寿米寿が美しい
鳥取市　土橋　螢

国を愛するこの青空がある限り

紀の川市　宇野　幹子
配線がつながり彼と初デイト

藤井寺市　増井ヨシ枝
念入りに化粧したのに待ちぼうけ

大阪市　佐藤　忠昭
ゆるキャラに一目惚れした満二歳

京都市　桝本　宏子
朝ぼらけ寺のおつとめBGM

河内長野市　藤塚　克三
ひっそりとシャッター街に朝が来る

三田市　今西　廣子
人好きの私退屈させません

大阪市　伏見　雅明
親もまた観察される参観日

岡山県　田中　恵
水温むメダカが餌をねだりだす

明石市　糀谷　和郎
これからも妻とは不等式のまま

米子市　見山　温子
施設の母せめての絆つめを切る

宇部市　平田　実男
捨てて出た里の訛りを口ずさむ

奈良市　大久保眞澄
御一考ください禁酒専用車

鳥取市　夏目　一粋
男下駄履きもせぬのに捨てられず

弘前市　肥後和香子
こなごなのあなたさかなに赤ワイン

和歌山市　武本　碧
紅一点だから難なく持てている

姫路市　古川　奮水
ボロ屋でも一目で趣味が分かる家

大阪市　谷口　義
小保方さんの名前は覚えにくかった

藤井寺市　太田扶美代
来年の注文がきました釘煮

米子市　後藤美恵子
野草摘み乙な肴の一品に

大阪市　坂　裕之
ちょっとだけ忙しかった年度末

和歌山市　福井　菜摘
マイウエイもう雑音は気にしない

藤井寺市　肥山　一文
酒の席ライバルに負け二日酔い

和歌山市　古久保和子
絵葉書はパリ消印は東京都

橿原市　居谷真理子
王様はガッツポーズなどしない

高槻市　初代　正彦
余所行きの昭和のスーツ棄てられぬ

鳥取市　津村　律子
日本海沖異変続出深海魚

大阪府　米澤　俶子
躓き防止先のまあるい靴を履く

大洲市　中居　善信
風に乗る匂いを嗅いだ猫の髭

岡山市　藤成　操江
来ると聞くだけで疲れる孫一家

三田市　上垣キヨミ
顔に皺あるがお腹にシワが無い

尼崎市　春城　年代
心ばかりを探して歩く百貨店

吹田市　太田　昭
同じ傷なめ合う友と長話

瀬戸内市　東槇ますみ
電話口元気なふりをしてみせる

篠山市　佐々木　勇
一日をみどりに染めた定休日

三田市　久保田千代
手のしわに流れた日々の重さ見る

鳥取市　山下　凱柳
老いた脳虫干しに出し活性化

紀の川市　北山　絹子
香水の匂いが鼻につく季節

大阪市　藤原千恵子
若さゆえ乗り越えられたあの苦難

四條畷市　吉岡　修
ラブコールひょいと躱されそれっきり

西予市　黒田　茂代
バックシャンってこれかいなうちのひと

堺　市　大隅　克博
0の数5つ以上は諦める

神戸市　山田婦美子
干からびた紙魚までもらう形見分け

生きていると追っかけてくる請求書　紀の川市　辻内　次根

後継ぎと墓と仏壇ちゃんとある　大阪市　笠嶋　惠美

思い出したように仏壇の掃除　羽曳野市　徳山みつこ

柩には欠かせぬ酒とするめいか　堺市　澤井　敏治

夕刊の音で走って来るバイク　大阪市　大川　桃花

歯科眼科整形外科の梯子する　鳥取市　倉益　一瑤

見送れと言うのか長居する夕日　和歌山市　平田　元三

灰汁強いわたしに誰も寄りつかぬ　和歌山市　玉置　当代

バス旅は無口な人のそばがいい　神戸市　冨永　恭子

歴史認識大事な友を遠くする　大阪市　太田としお

自衛権どこに着くやら日本丸　吹田市　野下　之男

ストレスのサプリは酒と信じ飲む　岡山県　池田たか子

今日は吉まっ直ぐ向かうクジ売り場　八尾市　中岡　妙

緩和ケアが安くなるまで生きてやる　堺市　遠山　唯教

損得が絡むとボクが露見する　三原市　鴨田　昭紀

歌劇百年娘ごころが甦る　富田林市　片岡智恵子

鉦太鼓春は六甲おろしから　神戸市　白川　淑子

補聴器が雑音ばかりよく拾う　堺市　内藤　憲彦

耳遠い二人の会話ケンカ腰　防府市　坂本　加代

花冷えに毛糸ソックス重ねてる　鳥取県　岩崎　和子

怖いもの見たさに覗く女風呂　奈良市　米田　恭昌

グーチョキパー足を伸ばして起きる朝　三田市　足立つな子

習い事意のままならず苦戦する　出雲市　黒目　英男

マラカスを得意に振って演歌節　和歌山市　上田　紀子

哲学の道に昔がうずくまる　大阪市　津守　柳伸

気まぐれな電話　昔の旅仲間　亀岡市　井上　森生

台所卒業させぬ同居人　高槻市　島田千鶴子

浅い川石の下には魚いる　奈良市　尾畑なを江

飲み込みが遅いとスマホ駄駄こねる　神戸市　能勢　利子

寄り道をしてストレスを置いてくる　和歌山市　北原　昭枝

マー君を追いかけBS見てる妻　塩竈市　木田比呂朗

どうせなら好きな事して暮らしたい　鳥取県　山下　節子

七人の敵もいっしょに歳をとる　八尾市　村上ミツ子

夜なべした母の遺影に感謝状　和歌山市　磯部　義雄

筍一本茹でる幸せかみしめる　池田市　栗田　久子

もったいない今日が最後と出かけてる　大阪市　榎本　舞夢

玄関に福の色紙でお出迎え　加西市　中川　修

ゲリラ雨虹の土産をおいてゆき　西宮市　福島　弘子

ワンコインランチに味は求めない　箕面市　出口セツ子

黙祷でいつも始まり締め校歌　つくば市　嶋本　喬

節々に精一杯の孫自慢　松江市　錦織　禮子

たんぽぽもれんげも咲けとそよ風が　堺市　近藤　治子

共選欄

樽椽抄

（薫風書、カットとも）

（投句　382名）

「美人」　竹治ちかし選

近頃は女の天下皆美人　大阪市　笠嶋　惠美
負けてない美人と競う笑い皺　河内長野市　穂口　正子
介護してくださる方は皆美人　松江市　中筋　弘充
次の世は美人になって生れたい　大阪市　松尾柳右子
ほんとうは美人の君にほれました　高知市　小澤　幸泉
それなりの苦労があって今美人　芦屋市　黒田　能子
ミス東大天は二物を与えます　倉吉市　中村　毅
受付嬢を替えて来客急に増え　東京都　井上つよし
税上がり素顔美人に切り替える　宝塚市　井上　風花
美人とは言えぬが僕の宝もの　篠山市　酒井　真由
パラソルをさすと美人に見えてくる　宝塚市　田中　章子
愛されて心美人になっていく　富田林市　山野　寿之
今宵また美人の嘘に酔うてます　和歌山市　喜田　准一
美人薄明とんとご縁のない家系　高知市　小川てるみ
化粧せぬ花の素顔が美しい　大阪市　神夏磯典子

「美人」　大内朝子選

さくら吹雪の下で美人になっていく　藤井寺市　鴨谷瑠美子
うたた寝の美女に肩貸し乗り過ごす　奈良市　岩本　浩二
マスク美人言われてマスク外せない　芦屋市　竹山千賀子
クレヨン画園児のママはみな美人　鳥取市　岸本　宏章
八方美人かなり努力をしています　奈良市　大久保眞澄
鼻すじ美人褒めて子猫を嫁がせる　高知市　小川てるみ
中入りの和服美人を追うレンズ　枚方市　小林　わこ
おかしいねどうして美人薄命だ　堺市　増田わこう
美人には弱い男の万華鏡　山口市　増田めだか
目を奪う美人ほんとはニューハーフ　和歌山市　北原　昭枝
美人画は黒猫抱いた白い指　弘前市　今　愁女
美しい仮面を外すときひとり　神戸市　山崎　武彦
官能の匂いのしない美人ロボ　鳥取市　池澤　大鯰
淳一のスタイルブックみな美人　三田市　石原　歳子
美人だが少し口数多すぎる　和泉市　横山　捷也

みんなみな美人に見える春ですね　京都市　清水　英旺
恋という薬が効いてくる美人　鳥取市　夏目　一粋
母ちゃんの畑のトマトみな美人　大阪市　柴本ばっは
引き立てる役で美人の傍にいる　三田市　上垣キヨミ
コンパクトいつも美人を連れ歩く　枚方市　丹後屋　肇
被災地にこころの美人ゆき来する　堺　市　遠山　唯教
CMの美人に財布揺さぶられ　岐阜市　平野あずま
楊貴妃似クレオパトラ似金しだい　東かがわ市　川崎ひかり
苦労して皺も中味もある美人　大阪市　原田すみ子
神さまに来世は美人予約する　鳥取県　石谷美恵子
美人では無いが困った事はない　河内長野市　谷　久美子
割烹着妻が美人に見えてくる　堺　市　内藤　憲彦
アングルを変えて美人にしてもらう　出雲市　岸　桂子
本当の歳は隠していても美女　川西市　西内　朋月
謎多き美人尻尾は隠してる　米子市　小野　鶴子
永久にライバル美人対美人　米子市　吉田　陽子
女同士美人に辛い点つける　茨木市　藤井　正雄
無意識に美人を意識する美人　堺　市　大隅　克博
美人から離れて写真には写る　鳥取市　福西　茶子
美人には遠い母だが世界一　八尾市　宮西　弥生
美人にはなれぬが化粧だけはする　犬山市　金子美千代
美人でも逃れられない消費税　大阪市　太田としお
紅一点美人ではないが座が弾む　西宮市　秋元　てる

其の日まで心美人を枯れさせぬ　和歌山市　堀　冨美子
スッピンの貴女の方が美人だよ　奈良県　安福　和夫
税上がり素顔美人に切り替える　宝塚市　井上　風花
ボランティア笑顔はじける美男美女　羽曳野市　吉村久二雄
クラス会美人の順位入れ替わる　神戸市　能勢　利子
意外にも美人はすぐに飽きるもの　弘前市　稲見　則彦
パラソルをさすと美人に見えてくる　宝塚市　田中　章子
カミさんはきっと長生きするだろう　大阪市　江島谷勝弘
これからは心美人で介護する　西脇市　七反田順子
みよちゃんが天女に見えた盆踊り　弘前市　高瀬　霜石
苦労して皺も中味もある美人　大阪市　原田すみ子
美しい人の背筋が伸びている　大阪狭山市　矢野　梓
美人薄命わたし百まで生きられる　青森県　松山　芳生
美人には遠い家系で未だ独り　八尾市　村上ミツ子
美人だったらきっと生き方違ったろ　富田林市　中井　アキ
妙齢の美人は欠伸にも色気　札幌市　三浦　強一
はつらつと生きてる人は美しい　シドニー　坂上のり子
美人と二人流れ着きたい無人島　枚方市　海老池　洋
手間暇を掛けたりんごは皆美人　弘前市　福士　慕情
ひと味が違う美人のしゃれこうべ　藤井寺市　鈴木いさお
朝市の姉さん被りした美人　貝塚市　石田ひろ子
雨の日も風の日も美人は美人　大阪市　古今堂蕉子
美人だが高くとまっていて孤独　東大阪市　佐々木満作

手間暇を掛けたりんごは皆美人　弘前市　福士　慕情
愛されている時わたし美人です　枚方市　寺川　弘一
美人にも遠慮はしない杉花粉　京都市　高島　啓子
整形の美女に終着駅がない　横浜市　川島　良子
私を美人だと言ういい鏡　堺　市　柿花　和夫
お多福も美人も同じかまの飯　倉吉市　山中　康子
美人にも心に秘めた傷がある　瀬戸内市　東槇ますみ
ウェディングドレス着る日はみな美人　堺　市　矢倉　五月
美人より心やさしい女といる　出雲市　小白金房子
はつらつと生きてる人は美しい　シドニー　坂上のり子
みよちゃんが天女に見えた盆踊り　弘前市　髙瀬　霜石
美人だと思ってくれる人と居る　藤井寺市　若松　雅枝
スマイルの裏で美人は爪を研ぐ　大阪市　小谷　集一
美女帰し安い酒肴で飲み直す　堺　市　奥　時雄
歳とるとみんな美人になってくる　堺　市　加島　由一
わたくしも美人も同じ影を持つ　鳥取市　倉益　一瑤
美人はいいないつも誰かが負んぶする　米子市　政岡未延子
羽化をして少女ことさら美しい　西予市　黒田　茂代
逢う度に美人になって行く彼女　三田市　福田　好文

秀　句

雨の日も風の日も美人は美人　大阪市　古今堂蕉子
美しい仮面を外すときひとり　神戸市　山﨑　武彦
恋びとが一番美人だと思う　鳥取市　土橋　螢

老いて尚美人通れば振り返る　紀の川市　楠原　富香
ピエロだと思う美人に酔っている　松江市　石橋　芳山
犬が見て私は美人なんだろか　尼崎市　藤岡　りこ
羨望と嫉妬背負っている美人　和歌山市　平田　元三
整形の美女に終着駅がない　横浜市　川島　良子
美人はいいないつも誰かが負んぶする　米子市　政岡未延子
口角を上げて美人になる明日　大阪市　栃尾　奏子
喋るまでほんに美人と見えたのに　堺　市　澤井　敏治
美人にもまさかと思う悩み事　豊中市　藤井　則彦
吐息吐く美人なんかに生まれつき　東京都　川本真理子
損なこと有るか美人に問うてみる　米子市　後藤美恵子
スマイルの裏で美人は爪を研ぐ　大阪市　小谷　集一
美人先生叱られたくて悪さする　倉吉市　田中紀美恵
美人税これなら女性きっと出す　四條畷市　吉岡　修
恋人ができて綺麗になってゆく　江南市　脇田　政美
羽化をして少女ことさら美しい　西予市　黒田　茂代
愛されて心美人になっていく　富田林市　山野　寿之
普段着のようにたしなみつけている　寝屋川市　森　茜
花に酔いわたしいっとき樹下美人　橿原市　安土　理恵

秀　句

恋びとが一番美人だと思う　鳥取市　土橋　螢
愛し子を見つめる母のやさしい目　倉吉市　堀　かずこ
歳とるとみんな美人になってくる　堺　市　加島　由一

「三　角」

（投句　199名）

指宿　千枝子　選

素手だったなあ三角ベースボール　三田市　堀　正和
原っぱの三角ベース思い出す　塩竈市　木田比呂朗
お腹ペコペコ三角にかぶりつく　三原市　鴨田　昭紀
三角のむすびは母の手のかたち　出雲市　竹治ちかし
三角のおにぎりぎゅっと母の愛　東大阪市　佐々木満作
三角がやはり食べよいにぎり飯　池田市　上山　堅坊
三角布いざと言う日に備えてる　大阪府　小栢こずえ
三角も修業を積めばまるくなる　南あわじ市　萩原　狸月
三角がまあるくなって老いを知る　横浜市　川島　良子
三角形の底辺にいる高齢者　貝塚市　吉道あかね
三角の屋根メルヘンの中にいる　大洲市　花岡　順子
三角の心を癒す森の径　和歌山市　福井　菜摘
郷愁がトライアングル奏でさせ　今治市　渡邊伊津志
叱られて目が三角なママを描く　堺　市　矢倉　五月
三角形頂点めざす子の野心　京都市　桝本　宏子
三角の底辺で歯を食い縛る　鳥取市　福西　茶子
三角が付けば見込みがある印　高槻市　富田　保子
親と子の三角形に要る工夫　唐津市　仁部　四郎
三角をやさしく変えたのはジョーク　藤井寺市　太田扶美代
取り敢えず三角にして様子見る　和歌山市　平田　元三

設計図三角定規はなせない　鳥取市　吉田　弘子
関数に四苦八苦した遠い日々　堺　市　羽田野洋介
棒暗記サインコサインタンジェント　泉佐野市　稲葉　洋
幾何苦手サインコサインもっと駄目　大阪市　佐藤　忠昭
サインコサインここで数学あきらめる　大阪市　古今堂蕉子
安定感テトラポッドは最高だ　鳥取市　山下　節子
大阪の町育んだ三角洲　大阪府　籾山　隆盛
三角洲都市と文明培った　松江市　小川　注湖
ピラミッド昔の人は偉かった　和歌山市　磯部　義雄
親友もぼくの彼女が好きらしい　札幌市　三浦　強一
花明り不倫の愛が疼き出す　豊橋市　藤田　千休
万華鏡くるり女は夢を見る　香芝市　大内　朝子

佳

三角で良い可も不可も無く生きる　箕面市　出口セツ子
お互いが三角付けて仲が良い　河内長野市　藤塚　克三
三角にも三角なりの自負があり　藤井寺市　鈴木いさお
目を三角にする程の事でなし　和歌山市　喜田　准一
惜しいなと三角くれた赤いペン　犬山市　関本かつ子

人

ピラミッドの底辺に居る安堵感　豊中市　松尾美智代

地

文明の発祥デルタ地帯から　堺　市　村上　玄也

天

どっしりと裾野が広い富士の山　神戸市　冨永　恭子

軸

輪に馴染み三角四角まろくなり

「プレイ」

（投句　194名）

丹後屋　肇　選

サイレンが鳴り止む前にホームラン　交野市　森本　弘風
フロントのプレイガイドで夜の街　茨木市　藤井　正雄
オスプレイ入学式の上を飛ぶ　京都市　桝本　宏子
脳の錆プレイボールがまだ出来ぬ　大洲市　花岡　順子
一日を遊び尽くして眠る鞠　大阪市　栃尾　奏子
身の丈に合ったプレイをする余生　和歌山市　土屋起世子
緩慢なプレイにファンから罵声　堺　市　村上　玄也
プレイボーイと言う厄介な虫が付く　和泉市　横山　捷也
ミスプレイ心のネジを締め直す　鳥取県　細田　裕花
地球儀を無尽に馳せるプレーヤー　羽曳野市　徳山みつこ
プレイして奥の深さを知るゴルフ　和歌山市　磯部　義雄
リプレイに傍目八目さわがしい　大阪市　古今堂蕉子
侘しきはプレイボーイのなれの果て　堺　市　奥　時雄
礼節がプレイ前後にある相撲　河内長野市　松岡　篤
プラチナ切符プレイガイドで手に入れる　河内長野市　木見谷孝代
自分史のプレイバックは愚痴ばかり　三田市　今西　廣子
ナイスプレイ思わず敵を褒めている　鳥取市　池澤　大鯰
わたくしをディスプレイする絵の具皿　和歌山市　武本　碧
プレイ後は友に返って酒を酌む　出雲市　竹治ちかし
大方は届かぬボールの始球式　亀岡市　井上　森生

氷上のプレイ選手は華になる　豊中市　松尾美智代
主婦業もたまには欲しいプレイオフ　藤井寺市　太田扶美代
捕手よりも投手にしたい妻がいる　札幌市　小沢　淳
今は昔プレイボーイの紙おむつ　奈良市　米田　恭昌
スタンドプレイみんな気付いておりますよ　堺　市　矢倉　五月
リプレーがあって相撲がよくわかる　池田市　上山　堅坊
プレーバックたやすいものじゃ無いだろう　大洲市　中居　善信
生涯はきっと真面目な珍プレイ　橿原市　居谷真理子
プレイ中断猫一匹のハプニング　西宮市　福島　弘子
イチローはファインプレーを淡々と　三田市　北野　哲男
記録より記憶に残る珍プレイ　松江市　中筋　弘充
何度でもプレイバックしたい恋　大阪市　伏見　雅明

佳

犠打というチームプレイに花が咲く　豊中市　水野　黒兎
ゲーム機が相手侘しいエネルギー　河内長野市　坂上　淳司
戯れているのだろうか花吹雪　和歌山市　柏原　夕胡
人生をプレイバックで遣り直す　河内長野市　藤塚　克三
へましても笑いのタネにするピエロ　高槻市　初代　正彦

人

人生のプレイボールだ呱呱の声　枚方市　寺川　弘一

地

齢ですねと笑って赦すミスプレー　鳥取市　福西　茶子

天

プレイバック私の過去は多色刷り　河内長野市　山岡冨美子

軸

ウインブルドンのラリーに息を詰めている

「怪しい」

（投句　198名）

森　松　まつお　選

深夜二時職務質問受けました　大阪市　藤原千恵子
増税に合わせたとみな値を上げる　大阪市　岩崎　公誠
尖閣の空に怪しい雲がある　鳥取市　近藤　秋星
原発がブロックされているのかな　長野県　丸山　健三
腰抜かす請求届く通話料　横浜市　川島　良子
宿帳に妻と書いてる固い文字　弘前市　福士　慕情
美女だけどどうも気になる喉仏　奈良市　岩本　浩二
いそいそと出かけオシャレになった母　箕面市　出口セツ子
怪しまれアンネの日記手にとれぬ　鳥取市　夏目　一粋
練炭が後部座席に積んである　大阪府　米澤　俶子
ガッテンに後押しされてドック入り　三田市　堀　正和
山陰の陰のところに生きてます　鳥取県　斉尾くにこ
地味好きの妻がピンクを着はじめた　香芝市　大内　朝子
たっぷりと利息が付くと言う話　富田林市　山野　寿之
久しぶり髪たっぷりの友と会い　南あわじ市　萩原　狸月
カルテ手に主治医が息を詰めている　和歌山市　福井　菜摘
特売の本日限りまだ続く　大阪市　坂　裕之
寅さんの仕事怪しい風まかせ　シドニー　坂上のり子
泥棒が下見をしてたボランティア　弘前市　高瀬　霜石
サプリメント個人差あると小さい文字　貝塚市　吉道あかね

怪しげなビットコインに手は出さぬ　鳥取市　岸本　宏章
疑えばみんな怪しくなるこの世　出雲市　竹治ちかし
バーゲンで安かったのと妻は言う　大阪市　高杉　力
モンタージュよく似た顔を知っている　犬山市　関本かつ子
鼻唄で家を出たのを怪しまれ　三田市　北野　哲男
おやすみのキスが三秒長かった　大阪市　栃尾　奏子
母の言葉怪しくなった気配りを　八尾市　宮崎シマ子
夜な夜なに黒の上下にサングラス　西宮市　緒方美津子
監視カメラつい小走りになる私　河内長野市　山岡冨美子
銀行でマスク外した花粉症　堺　市　奥　時雄
自動ドア怪しみもせずいらっしゃい　大阪府　高木　道子
別々に来て隣り合った席に居る　和泉市　横山　捷也

佳

子の下宿歯ブラシ二本挿してある　三田市　上垣キヨミ
ただいまと言って風呂場に直行す　大阪市　古今堂蕉子
こんな値でブランド裏に何かある　西予市　黒田　茂代
本当にあれは寝言であったのか　橿原市　居谷真理子
よく見ると修正液の跡がある　三原市　鴨田　昭紀

人

メモ帳の中に△○印　松山市　栗田　忠士

地

越後屋と聞いてガードを堅くする　豊橋市　藤田　千休

天

手に取っただけでブザーが鳴る無礼　神戸市　白川　淑子

軸

ケータイの履歴が一部消してある

民族の詩歌 (24)

― 詩と医学

三好専平

大阪府富田林のPL病院の受付の壁に「人生は芸術である、医もまた芸術である」という言葉が、ラテン語とともに揚げられている。『医』は医学・医療の意であろう。病気の原因を突き止めること、患者の信頼を得ながら治療すること、ともに創造的な営みであるという意味であろう。

精神科の方では、早くから芸術が治療に使われてきた。ゴッホがアルコール中毒（アルコール依存）の治療のために絵を描いたことはよく知られている。

なだ・いなだはフランス政府給付留学生としてフランスに渡りアルコール中毒の専門家医に師事して、実態をつぶさに研究し、帰国し国立久里浜病院の医師となり、日本のアルコール医療の草分けとなった。若いころから文章に長け、本当は医者になるのが好きではなかったという。

絵に限らず、音楽、演劇、舞踊、朗読、詩作などもしばしばその患者に応じ使われる。精神障害児には、絵を描くことが最も効果があるとされる。映画も同じ働きをする。末期がん患者や妊産婦の精神安定にも音楽が使われる。健常者でも、ムードミュージックは心の癒しになる。カラオケで一炊の夢を見る。現代人は多かれ少なかれ病んでいると言っていい。

『言葉と歩く日記』（多和田葉子・岩波新書）のなかで、日本語の全く分からないスペイン文学の先生に「日本語の詩の朗読は素晴らしかった」といわれたことが最もうれしかったという、エピソードが書かれている。彼女自身は作家でドイツ語の教師であるが、言語の違いを越えて、心に響かせることのできる力を「詩」は持っているようである。

そういえば、歌人や随筆家、小説家に多くの医師がいる。早いところでは、明治の須山信行、御歌所の寄人（よりうど）でもあった。こんな献詠歌をのこしている。「いにしへに照らして今を仰ぐにも余るは国も光なりけり」

アララギの斉藤茂吉は、あまりにも有名で、戦時中は学徒を励ます歌を多く詠み、戦後、悔いて自らそれらの歌の世に出ることを嫌った。『赤光』より

・くれなゐの百日紅（ひやくじつこう）は咲きぬれど此（この）きやうじんはもの云はずけり

・としわかき狂人守りのかなしみは通草（あけび）の花の散らふかなしみ

岡井隆も医者である。

・病む心はついに判らぬものだからただ置きて去る冬の花束

ミサイルが蛍のやうにとび交ふを愛咬の図とくらべて果敢無

川柳塔でも、川柳を詠むことで病に立ち向かい、生きる支えとしている方たちがいる。

錠剤を忘れて今日もいい日和　藤成操江

やせがまんせずに甘えて暮らそうか　巌田かず代

紅葉は靄にかすんだ大山寺　田村周子

よっしゃ眠れぬ夜は句を作ろう　小松紀子

山登り遭難してもまた登る　三谷圭角

初しぐれ教室

題 ― あっさり

山口光久

一つの題で多く句を作り、作った句をあらゆる角度からよく検討してみることです。それらの中から自分で良いと思う句だけを厳選（自選）しましょう。

この句は自分の詩想が正しく描き出されているかどうか、句のリズムは良いか、句に余韻があるかなどから取捨すべきです。自分の詩想からかけ離れた句は再考を重ねぴったり合致するまで推敲するようにしましょう。

芭蕉は推敲のことを「言葉を正す」と言っていますが、最適の言葉になっているかどうかを考えねばなりませんし、ほかに、もっとぴったりの言葉は無いか探す努力が必要です。

更に、意図がよく表現されているか、句のリズム感は崩れていないか等吟味することが必要です。若し、リズムが悪ければ語順を倒置したりしてリズムを整える工夫もしたいものです。

【添削】

原 出て行けと言ったらすぐに去った妻　(穂)正　子

単なる説明句になっています。ああそうですか、で終わってしまいます。

添 出て行けと言ったら妻は喜んだ

原 あっさりとかぶと脱ぐのも芸のうち　洋　志

兜を脱ぐのは降参すること。「芸のうち」ではちょっと変ですね。

添 あっさりと兜を脱いだ力の差

原 高額品貯めたへそくりあっさりと　開　子

へそくりは貯めた金。貯めたとダブります。高額品より高価品の方が適切。

添 へそくりであっさり買えた高価品

原 時間ですあっさり言って戸を締める　加　代

戸をしめるときは「閉める」です。

添 時間ですあっさり言って店閉める

原 白旗を揚げあっさりと膝まずく　義　雄

「膝まずく」は跪くです。誤字に気をつけましょう。中八になっています。

添 白旗を揚げあっさり跪く

原 あっさりと流して初心を取り戻す　たけ代

中八です。リズムが悪いです。

添 あっさりと流し初心を取り戻す

原 あっさりと言う怖さ誰でもよかった　(前)洋　子

抽象的で解りにくい。少し具体的に。

添 殺すのは誰でもいいと殺人鬼

原 片思いあっさり言えぬ恋心　ひとし

片思いと恋心はダブります。

添 好きですとあっさり言えぬ恋心

原 才女だがあっさりしてて人気者　忠　貞

添 あっさりとしている才女人気者

原 あっさりと割り切れず病む老い心　正　二

添 あっさりと割り切れません老い心

原 あっさりと別れ涙の旅立つ日　こずえ

添 あっさりと別れ気晴らしする旅路

原 近ごろの近所づき合いあっさり目　治　子

添 あっさりの近所づき合い恙なし

原 あっさりと負けを認めておりた僕　英　男

添 あっさりと負けを認めて引き下がる

原 ソチ後にあっさり辞める猛者いづこ　勝　治

添 五輪後にあっさり辞めるアスリート

原 女房があっさりすれば恐怖です　回春子

添 あっさりと負けております恐妻家

原 辛抱と言う字を知らず辞表書き　狸　月

添 辛抱が足りずあっさり辞表書く

原 宝クジまたあっさりと国へ寄附　道　子

添 あっさりと国へ寄付する宝くじ

原 下手な落語あっさり落ちにほっとさせ　ミヨノ

添 下手な落語落ちはあっさりしています

原 勝負師はあっさり投げず粘り抜く　国　和

添 勝負師はあっさり投げることはない
原 あっさりと自白をすれば死刑囚　風花
添 あっさりと自白をしたら減刑に
原 待ちこがれあっさり散ってゆくさくら　昭枝
添 待ちこがれた桜あっさり散ってゆく
原 こんなにもあっさり越えた喜寿の坂　信二
添 あっさりと越えて来ました喜寿の坂
原 あっさりと時には下がる処世術　楽鬼
添 あっさりと引き下がるのも処世術

【少しの修正で良くなる句】

原 花と風あっさり和えて春がゆく　(川)真理子
添 花と風あっさり和えて春景色
原 あっさりとイエスと言われ拍子抜け　恵
添 あっさりと受け入れられて拍子抜け
原 あっさり転び綱が遠のく稀勢の里　律子
添 あっさりと負け綱が遠のく稀勢の里
原 誘われてあっさり返事花ツアー　安子
添 誘われて二つ返事の花ツアー
原 年重ねこってりよりもあっさりと　(山)久子
添 歳重ねこってりよりもあっさりを
原 あっさりと認めた悔が付きまとい　絹枝
添 あっさりと認めた悔いが付き纏う
原 あっさりとゴメンと言えて仲直り　(魚)順子
添 あっさりとゴメンが言えて仲直り
原 あっさりと退く裏に何かある　喬
添 あっさりと退く裏がきな臭い
原 しがらみをあっさり捨てるビルの街　(富)恵子
添 しがらみをあっさり捨てる都市砂漠
原 あっさりと負けを認めている半旗　心咲
添 あっさりと負けを認めている叛旗
原 淡白な性格でした長所です　モモ
添 淡白な性格だから損もした
原 遺憾です謝罪の言葉これ一つ　元三
添 遺憾です謝罪の言葉これっきり

【入選句】

プロポーズいともあっさり断られ　秋星
あっさりと別れも出来ず五十年　(渡)修
病院のあっさり味に音をあげる　(中)修
あっさりの味に隠れた自己主張　武人
健康に良いと毎日菜のおかず　恭子
あっさりとあなた好きだと言われても　紀美恵
定年後妻があっさり主導権　紀雄
増税があっさり決まり生活苦　和之
手作りの蕪の酢漬けにご満悦　つな子
こだわりも盃重ねあっさりと　洋一
退職日さらりと妻が離縁状　晶子
延命は要らぬあっさり逝くつもり　忠士
ごめんねと言えばあっさり済むものを　孔一
あっさりと昼もラーメン一人者　一泉
あっさりと湯豆腐鍋にでもしよう　のり子
息子の結婚あっさり決まり拍子抜け　(村)恵子
あっさりと美人は素顔見せている　(見)温子
あっさり味長持ちしてるお付き合い　(株)玲子
あっさりな味が素材を引き立てる　(高)弥生
あっさりと負けを認めて次の策　きっこ
あっさりと白状されて拍子抜け　凱柳
あっさりと許した妻の下心　富香

【佳句】

あっさりと別れて写真抱いている　ひろ子
嫁ぐ日も「じゃあね」と笑顔見せて出る　亜希子
へそくりをあっさり見つけられました　美紗子
あっさりと別れた恋にある種火　文香
あっさりとコートを脱がす春の風　(畑)節子

【今月の推せん句】

ありがとう一言残し逝った夫　能勢　利子

存命中の夫婦仲が想像されます。有難うの一言が生き甲斐になっているでしょう。

法案があっさり通る恐い数　内田志津子

議会での議席の恐ろしさをまざまざと知らされます。多数決の横暴です。

あっさりと別れた後に後遺症　大島　友子

不本意な別れだったのでしょうか。諦めきれない恋心。後遺症は永久に続くかも。

【私の句】

あっさりと降参したい時がある

川柳塔鑑賞

同人吟　牧野芳光

―5月号から

東北の桜を何年か前に巡ったことがあるが、東北の桜の瑞々しさと東北の人の桜を愛でる気持を垣間見た気がした。

普段は何気なく読ませていただいていた川柳塔鑑賞であるが、真剣に作品群と対峙させていただいた。

年齢は記号と決めて元気出す

岩崎公誠

そんな考え方もあるかと気付かされる作品。還暦、古希と関所が横たわるが、年齢は精神年齢で数える方がいい。一度しかない人生、前向きに生きたい。

誘われそうで迷彩服は子に着せぬ

緒方美津子

憲法九条の解釈が話題にのぼり、また若者が戦士にされるかも知れぬ。戦士が着ている迷彩服には異様なものがある。

誘いには乗らぬわたしの太い指

小白金房子

あの手この手の電話による詐欺は後を絶たず、人間の弱い部分を巧みに狙ってくる。また、誘惑もしかり。心を逞しくしていれば、しっかりと物事に対処できると思える。

医者の指示守り楽しくない余生

菊地政勝

酒も恋も断てば味気のない暮し

松尾美智代

自分の好きなように生きていられたら楽しいのに、あれも駄目これも駄目と言われたら、人生が味気なくなる。時には羽目を外したくなることもあるが、何事も良い加減がいいと思える。

独り身にその日その日の匙加減

竹村紀の治

肉体労働をする人は、体を動かさない人と比較して塩分が濃い目の方を好むと言われる。本人も日毎に好みが変わるのだろう。味に限らず精神面にしても独りでいれば起伏は大きいと思う。

人体図開くと危険個所ばかり

吉田陽子

年とともに身体は衰え、危険な部分は増えていく。人間の体は微妙なバランスで健康を支えており、健康でいられることがむしろ奇跡のように感じられる。健康でいられることに感謝したい。

要職につくと失言したくなる

海老池洋

政治家の発言は衆目にさらされ、一寸した発言もマスコミの記事になる。職に就く前には看過されていた事も、失言になってしまう。

現役のかたちに靴が脱いである

両川無限

長い間働いてきた中で、退職をしても急に自分を変えることが出来ないのは仕方がないことである。現役時代の考え方や言葉遣いがついつい出てしまうが、気を付けないと気まずくなることもある。

遊びがあって夫婦のリボンほどけない

斉尾くにこ

遊びは車のハンドルにもついている。夫婦にもお互いの許容する部分があれば

夫婦仲もうまくいけそうな気がする。長く続いていかれる秘訣かも知れない。

何より怖い何時まで私わたしなの

北村賢子

認知症はじわりじわりとやってくる。生きていても、自分が自分でなくなることに対する内心の恐怖は、言い難いものだろう。

夫無口たぶん聴こえてないだろう

川崎ひかり

よく聞こえていた頃もあまり喋らなかった夫だったかも知れない。耳が遠くなっても同じ反応なので、「たぶん」というユーモア的な句になったのだろうか。

たくあんでご馳走さんを締めくくる

古久保和子

和食が文化遺産になった。沢山のご馳走を食べた後であっさりとしたたくあんに行き着く。やっぱり日本人だなあと思う時である。

新聞が読めぬ新語がわからない

宮崎シマ子

若者が使う新語や英語を略した新語がいとも簡単に認知されて使われている。ＩＴをイットと言われた人がおられたが、本当に笑っていいのだろうか。

カメレオンのような世間とにらめっこ

細田裕花

情報が入り乱れ、社会は日々変化している。うっかりしていれば、すぐに取り残されそうな気がする。

推敲を重ねて消える一生も

辻内次根

青年の頃は、人生について本を読んだり、いかに生きるべきかなどと考えていた。今日に至っても同じ「生きる」ことに拘っている。生きているのに生きることを考えているのは、滑稽とも思える。

たたみ終えて夫のパジャマ一叩き

安土理恵

洗濯物をたたんでホッとした時に夫のパジャマがあったのだろう。思わず叩いたのは日頃の不満から来たのだろうか。

他人の恋聞いてるうちに痒くなる

大久保眞澄

君恋えば古都むらさきに暮れなずむ

渡部富子

恋二句。人を恋することは、生きている証しだと思う。恋をすれば生きる力が湧き、人生に幅が出来るかも知れないがほどほどにするのが無難である。

人が好き悪口聞くのもっと好き

小沢淳

人間が好きと云う人は多いが、悪口を聞くのが好きと率直に言う人はまれである。しかし、人に言わないにしても、誰しも心に思うことかも知れない。

じゃあまたね何時とも聞かず言いもせず

坂裕之

日本語には、多分に曖昧さのある言い回しがある。社交辞令か本心か受け手に解釈を委ねられる。社交辞令がユーモアを交えてサラッと詠まれている。

座ってるだけでも肩は凝りますよ

齋藤さくら

働いていても、何をしないでいても、肩が凝る。「座っているだけで肩が凝る」と大きな声では言えないが、それが事実である。

後継ぎを待ってるように立つ案山子

竹山千賀子

田圃に立ててある案山子も、見方によればそう見えるのだろう。鳥取県の若桜鉄道沿線には、あちこちに等身大の人形が置かれて訪ねる人を待っている。

水煙抄鑑賞

—5月号から

古久保　和　子

人生はたんと笑った方が勝ち

太　田　としお

誰でも一生は一回限りです。最後に笑うことも大事かもしれませんが、やはり日頃どれだけ笑ったかも大切、笑顔は周りをも幸せにしてくれます。

いいですか隣の席にすわります

上　田　ひとみ

素敵なパートナーの隣りにお座りになって何年になるのでしょうか。女性らしい振る舞いを感じます。余韻の残る句に魅かれました。

いかなごを炊いたと友が春を連れ

石　田　ひろ子

御当地の春の風物詩である「いかなごのくぎ煮」花を愛で、春を賞味し、友と会話の弾む春です。頂いたくぎ煮は格別のお味だったことでしょう。

入社式母の選んだスーツ着て

大　竹　一　良

社会人一年生、親離れ子離れの時期と自覚しませんか。社会風刺を織り交ぜた作者の目線が楽しいです。

大丈夫と根拠はないが言い放つ

冨　永　恭　子

自分に言い聞かせるには最適な言葉です。大丈夫に理由が有ろうと無かろうと言い続けると力が湧いて来るものです。

無駄使いしたストレス飛んでもた

藤　塚　克　三

あとで後悔するとしても、ストレスが飛ぶのならけっして無駄使いにはならないと思います。

消しゴムが斑に消した記憶力

藤　田　千　休

顔は知っているのに名前が出て来ないや、大事な物を置き忘れての大騒動も、すべて、犯人は脳の中の消しゴムだったのですね。

足すものも引くものも無い日が沈む

池　田　たか子

平穏無事。感謝の一日でしたと締め括るのも、物足りなく思う一日も。

戦いを終えた両足錆びてきた

吉　川　ひとし

定年を迎えた足は方向を見失ったまま止まってしまいがちです。錆を落とすには、句会に出かけるのが最適です。

ポンとキー押して買い物できました

村　田　恵　子

便利すぎて戸惑ってしまいます。井戸端会議はどうすればよいのでしょう。

日々健康医者の薬を飲んでから

松　本　昌

みんな同じです。薬は食事の中の一品。薬を持って楽しくお出かけしましょうか。「一病息災」無理はせずに。

子が親を連れて平和の署名する

荒　川　鈍　甲

平和への願いは親から子へ確実に受け継がれています。

鯨通る室戸の沖のやさしさよ

田　口　彦　六

台風も鯨も通る室戸の沖を、岬から眺めている作者が眼に浮かびます。

倒れないようしっかり麦を踏みました

小　川　イ　セ

そして、立派な若者になりました。

42 指示語（指示詞）を考える

3月号の120頁「ひとこと」欄に、藤井宏造さんが指示語について書いておられました。ご本人の承諾を得ましたので再掲載させていただきます。指示語は正式には「指示詞」ですが、指示語のほうが明確なので私もそのように記します。

【私は川柳の先生に「あの頃、あのとき、あの人、あの話、あの歳、そのとき、その言葉、この窓」などの指示語を使った句は弱いと教えられてきました。それは、指示語の内容がはっきり見えないし、わかりにくいと言うことです。塔誌にも、指示語を使った句がかなり載っています。指示語を使った言葉は、何を指しているのかわかりにくいのがほとんどです。詠み手がわかっていても、読み手はわからないのが指示語のようだと思います。句報で目にする句は入選句です。選者はどこまで指示語を理解して選をされるのかが一番気になるところです。みなさんは、この指示語についてどのように思われますか。（藤井宏造）】

ずいぶん前になりますが、私もこの件につきまして某誌上において具体的に作品を挙げて書いたことがあります。それを再読して少し書き直しました。

あの人もきっと持ってる悩みごと

誰でも悩みごとを持っているのは当然のことです。右の句の「あの人も」を「どの人も」に置き換えると、「どの人もきっと持ってる悩みごと」となって、「あたりまえ」になるのが明確です。しかし、作者が敢えて作品にしたのは「あの人」が、いつも朗らかで悩みなどないような人だからでしょう。作者の作句動機は、「あの人のような朗らかな人でも、きっと悩みはあるはずだ」ということだと思います。しかし、読者は「あの人」がどのような人物か知りませんから心に届かず、ただ単に「あたりまえの句」となってしまうのです。

この傷が治った頃にきっと春

あの傷をたまに出しては笑い合う

右の「この傷」「あの傷」が身体の傷なのか精神的な傷なのかは分かりません。「きっと春」とか「出して笑い合う」と言っていますので、こころの傷であろうと推定いたします。が、どのようなことで傷を受けたのか、どれほどの痛手なのかは読者にはまったく分かりません。そのようなことには拘らず、ただ「傷が治ったら」という期待感。そして、「出して笑い合う」と過去になった傷。という心情だけを汲めば良いのかもしれません。しかし、やはり読者としては「どんな傷なのか」が気になり、歯痒い思いだけが残ります。

先ほどの「あの人」も右の「この傷」「あの傷」も、作者にとってはハッキリ分かっていますが読者には雲を摑むようなことです。宏造さんが「詠み手がわかっていても、読み手はわからないのが指示語」と述べておられる通りです。

文芸は自由自在が信条ですから、「これは間違い」ということではありません。指示語を使用するのも自由です。しかし、文芸はまた、自らの想いや感動を他者に伝わるように記すことが肝心でもあります。右で検証した通り、指示語を使用すると読者には「何のこと？」となってしまいますので、出来るだけ避けたほうがいいでしょう。

『麻生路郎読本』余滴（21）

「矢車」と路郎作品③

桒原道夫

「矢車」に関西の川柳人がどのように関わっていったかを、号を追って見ていくことにする。

創刊号（明治42年4月）に句を寄せている関西の川柳人は、浅井五葉だけである。募集川柳「傘」久良岐選二句、「雑吟」（編集部選か）二句入選している。

傘さして叔父閑さうな顔で來る
文使大門を出て黄昏れる

浅井五葉は、〈本名・浅井林之介。別号・八公、了見。明治一五年九月二五日、大阪市生れ。銀行役員。はじめ俳句に入り丈草に傾倒。その写生吟を川柳にとり入れ八公と称し「滑稽文学」の常連投句家となり、「葉柳」、「矢車」、「わだち」同人を経て、大正二年創刊の「番傘」創立同人となる〉（『川柳総合大事典』より引用）。五葉は、読売派の「滑稽文学」に投句していたので、「滑稽文学」から分立した「矢車」にも投句したのだろう。ただ、以後しばらくは五葉の名は見えず、本格的に投句を始めたのは八号からである。

明治38年5月に「新編柳樽」を発刊、明治39年6月から「葉柳」に改称し、関西川柳界の雄であった小島六厘坊が、明治42年5月16日（日）、肺結核のため21歳で亡くなった。「矢車」三号（明治42年6月）、久良岐の「六厘坊より矢車への遺言」中に、〈六厘坊が死前十日程前に、余に當て、長い手紙が來た、其中に曰く、現下の柳壇は確かに進歩したのに相違ないが、未だ娯樂範圍を脱して居らぬのは自分の慊らぬ點で、どうか君の今一度奮發を望む、そして「矢車」同人は君に信頼してゐるやうだから、どうか眞面目の發展を望みたい、そして小虚榮心の小選者に安んじないやうにして貰らいたい、是は呉々とも頼むと云つた意味である〉とあり、六厘坊が「矢車」に注目していたことがわかる。「葉柳」同人であった齋藤松窓が同号に「小島六厘坊君」を寄稿している。〈終りに「矢車」と「葉柳」との關係を言つて置かう、これは白馬君などが愚劣なる而笑子の手を離れて、獨立したといふ事に多大の同情と何んな風に活動するかと言ふ面白味を持つて迎へて居たからである、川柳雑誌で小島の意に叶つたものはまづなかつた、「獅子頭」と矢車の一號は死ぬ二三日前に見たのである。〉

「矢車」では、三号（明治42年6月）から六号（同年9月）まで、そして一周忌の一四号（明治43年5月）に、松窓の「小島六厘坊遺稿」を掲載している。松窓は、〈本名・齋藤万七。明治十八年三月二十四日、京都市生れ。（中略）六厘坊の死後、路郎、日車が新短歌運動を目ざして大正四年に創刊した「雪」、またそのあとの「土団子」にも協力〉（『川柳総合大事典』より引用）。

六厘坊と麻生路郎は共に明治21年生まれだが、当時すでに関西柳壇のトップにあった六厘坊は路郎（当時・天涯）に川柳の眼

を開かせた人物である。東野大八は、「麻生路郎物語(3)―川柳開眼は六厘坊―」で、正岡子規なくして夏目漱石は出なかったという小宮豊隆の『夏目漱石』を引用した上で、〈路郎にあっては、六厘坊が子規の役割を果たしたといえば大げさだが、川柳への刺戟を与えた人物であったということは明らかだ〉と述べている。路郎が大正7年に発行した柳誌「土團子」は、六厘坊が明治41年8月に一号だけ出した「土團子」の名前を借りて、六厘坊を偲ぶために発刊したものである。「矢車」に掲載された「六厘坊遺稿」は貴重な資料なので、その概要だけでも記録しておく。

「矢車」三号の口絵より。写真の下に、〈天才六厘坊／は十六の時こ／んな貞をし／て居つた／4字不明（松窓記置か）〉の文字が見える。

・三号「魚崎日記」（一節）

明治41年10月25日から12月17日まで、神戸市魚崎に転地療養したときの日記の一部。12月17日の日記は、〈雨だ、風だ、さむい日だ、咯血したが黒い血だ、黒い血がい、のか悪いのか自分では解らず、い、やうにも思ひ悪いやうにもおもふ〉

・四号「六厘坊書翰」

明治41年10月4日（肺結核発病翌日）付から10月30日付まで、松窓宛て十一通の書翰。10月4日の書翰は、〈葉ガキハ見テクレタロウ　血を吐いた注射した、肺病だシカシ落膽ハセヌ安心シテクレ／咯血に我が魂は蘇へり／氷嚢になやみの胸を冷すべく／見返れば長く短かき過去のかげ／よし僕が返事ヲ出サズトモ手紙クレタマへ頼ム　今思フ清瀧デ飯ガ食ヘナカッタ、金剛山デ殿リダッタ　コノ時分カラ悪カッタノヨ、オハリ、〉

・五号「詩二篇」

「詩人さまへ」「よしや黄泉へ通ふとも」の詩二編。松窓の註に〈昨年夏ごろの作なるべし〉とある。「よしや黄泉へ通ふとも」を挙げておく。〈○／髪の匂ひ、／紫の袖に、／電車を下りて行く。／○／煙草を捨てゝ、／「したい事をするさ」／○／匂ひ――／これだけでも人間は生きられると思ふ／○／寶典――／昔の匂――虫――／い、でしやう。／○／何、／野の石の音を聞いた?／ジヤア氣違だ。／○／車の響――／チヤルメラの音――／秋の晝の靜かさ。／○／エジプトの火と／「大和」の火と／臭い刻みの火と／オリエントの火。／○／どんよりした色、／濁つた光、／腐敗を誘ふ匂、／白粉、絹行燈――寢くたれ髪。／○／君のいふ美花とは?、／フ、ン、鴉に孔雀の羽を／くつ、ける事かネ。／○／この道のよしや黄泉へ通ふとも。〉

・六号「一錢」

一錢足りなかったばかりに俥で目的地の淀屋橋まで行けず平野町で降りることになったという、金にまつわる随筆。松窓の註に〈三十九年の冬か四十年春頃の作なるべし〉とある。

・一四号「川柳百端書」

〈十六の春法隆寺の雨に濡れたる事あり／金堂の灯火細し春の雪／下五を春の雨にしやうと思つたが、それでは「細し」が利かぬので雪にした〉などの短文を集めたもの。この号には、五葉の「僕の知れる六厘坊氏」も掲載。

「矢車」六号で、募集川柳「簪」の選を松窓が担当。集句二〇五句で入選一六句。

八号からは、前々回の「余滴」で記したように募集川柳とは別に、八題句数無制限で入選した句を「新川柳」のタイトルで発表している。五葉は、「心中」「指環」「二階」「友」「別」「雑」で、計一二句入選。

二階借何處から來て何處へ行く
行倒れ成程と云ふ姿にて

同号の募集川柳「戀愛に対する諷刺」の選を日車が担当。集句一四七句で入選八句。

一〇号（明治43年1月）では、募集川柳「運」の選を日車が、「縁」の選を松窓が担当。また、同号には、社友として「名古屋川上日車、大阪　齋藤松窓」の名が見える。

一二号（明治42年3月）から、新川柳の募集に雑吟も加わる。

一三号（明治43年4月）から、木村半文銭も新川柳に投句を始める。「遺言」で二句入選。

一四号（明治43年5月）には、新川柳に半文銭の雑吟が九句入選。

寢轉んで顔を並べる春の草
一人旅茫然として襖の畵

同号募集川柳「雨」の選を日車が担当。

一七号（明治43年8月）には、藤村壹が「思つたまゝ（矢車七月號を讀む）」を寄稿している。その末尾に、〈終に「矢車」が現今川柳雑誌中最も眞面目に、最も多くの佳句を產むといふことは僕も以前から聞いて居たが、僕が詳く見たのはこれが初めである。そして、最も内容に富んで居るのに感服した〉とある。藤村一の号は青明。藤村青明は、〈明治二二年二月二五日、高知県野市村生れ。（中略）明治三八年、覿面坊の号で登場、神戸柳樽寺に参画。（中略）このころ（筆者註―明治四〇年頃）川上日車と共同して初めて「短詩」の語を用いた短詩社を創立、四一年四月の解散まで続く〉（『川柳総合大事典』より引用）。一七号「短詩社の復活」に、〈大阪の舊短詩社同人藤村青明氏は此回日車、五葉、ひさご、水府、＊三太郎の諸氏と謀り同社を復活し大に活動せらるゝ由、健全なる發達を祈る〉とあり、「近業二三」として、〈處女あまたさざめき行くを思はぬにあらず〉〈宵闇に忘れられない女の香〉〈水銀が懶げに九十度に眠つてる〉〈果物屋に西瓜が並び君をおもふ〉を載せている。

＊「三太郎」は、川上三太郎ではなく、「葉柳」などに参加していた関西の作家。

そして、一八号（明治43年9月）から、岸本水府が登場する。

日南

罵つて出たが母親が氣にかゝり
拜命の辭令に譯もなく顫ひ
職工の日南へ出ては生欠伸

これは、課題吟ではなくて、「日南」のテーマで雑吟として出したものである。

一九号（明治43年10月）では、水府は、

「日」「疲」「惰」「醜」「務」「辭令」「醉」「黄昏」で、計一二句、雑吟「赤い風船」五句入選。また、募集川柳「會社員。銀行員」「愁」「家庭」「氣」でも六句入選している。「赤い風船」から二句挙げておく。

迷ひ子の赤い風船哀れなり
或時は肘突の色の物憂くて

二〇号（明治43年11月）では、新川柳は雑吟のみ掲載。藤村青明「生きて在る日」一八句、淺井五葉「鐵の音」八句、川上三太郎「青と刺戟と」八句、中島紫痴郎「挽歌集（一）」十八句、岸本水府「夜の幕」七句、森井荷十「平凡（二）」二一句などが掲載されている。この号辺りから、「詩川柳」と呼ぶにふさわしい作品が多くなってきたようだ。

マツチ擦つてわづかに闇を慰めぬ　青明
沈滞の頭に響く鐵の音　五葉
居留地の青き匂ひに朝の虫　三太郎
山越へて山越へて海濤荒く　紫痴郎
就職難友にはぐれる心地して　水府

二一号（明治43年12月）では、新川柳は課題吟を掲載しているが、二二号（明治44年1月）以後、雑吟のみの掲載となる。二二号には、社友として、「大阪　今井卯木、西田當百、藤村青明、淺井五葉、京都　齋藤松窓、名古屋　川上日車」の名が見える。

二二号（明治44年1月）に掲載された岸本水譜（水府は、二一号と二二号のみ水譜と改称した）「Gペン」を全句挙げておく。というのは、大阪市立中央図書館に所蔵されている「矢車」は麻生路郎が寄贈したもので、水府の句に○印のチェックが入っている点が興味深いからである。

Gペン

○Gペンの禿びたる尖の強き光り
○淋しさに吹くハーモニカ歯に軋る
○物足らず我に父あり母あるに
割引の電車に釦のとれし服
缺點ばかり　友の戀人
傷ましい小春を屋根に腐蝕の香
米の味飽かずに今日も食ふ淋し
連れを待つ紅提灯の温り
○ふと覺めて寒し鼾の親二人
今日も又我を迎ふる破椅子
○地圖を見れば君が故郷の火山系
白い花母に負はれて通った野だ
的もなく橋の上まで的もなく
譯もなく一つの石を蹴て往く
＊「美しうお成なさい」と嫁ぐ人に
○火事を見る君が握手の堅かりき
○二十錢と思ひし五錢淋しうて
友の女の眞赤なリボン

＊この句は、「岸本水府川柳集」（昭和23年10月）には未収録。『定本　岸本水府句集』（昭和33年1月）に、〈美しうおなりなさいと嫁く人に〉の形で収録された。

路郎がチェックした句は、単に自分の思いを素直に述べたものではなく、意外性のある措辞を用いているのが多い。例えば、Gペンの先端が強く光っているのは当たり前だが、「禿びたる」に意外性がある。同様に意外性のある措辞を挙げていくと、「歯に軋る」「鼾」「火山系」「火事」などが、それに当たるだろう。「物足らず」や「二十錢と」の句は、意外性に欠けた平凡な句だと思う。

路郎は、明治42年4月に「葉柳」が廃刊した後、しばらく川柳から遠ざかっていたようだが、明治43年8月14日（日）、関西川柳社例会に千松の名で出席。「矢車」には路郎の名で、二五号（明治44年4月）から登場する。

（次回に続く）

本社 五月句会

◇五月七日(水)　午後一時
アウィーナ大阪

連休明けのみどりの風薫る七日、5月句会は百二十九名（投句七名）の参加で開催。初出席は、松浦英夫（岸和田市）林ともこ（生駒市）足立つな子（三田市）の三氏。

今月のお話は、編集長の木本朱夏さん。「本の愉しみ」と題して子供のころから本が好きであったこと。古書市で十数万円もする『国宝』全六巻をただ同然の百円で買ったこと。作家・北杜夫や遠藤周作にファンレターを送って返事を頂いたこと。今はミステリー作家の有栖川有栖にはまっていること。世界で一番のベストセラーは『聖書』、二番目は諸説あるがセルバンテスの『ドンキホーテ』やマルクスの『資本論』であること。

一冊の本との出会いが人生を豊かにする、本には素晴らしい可能性があること、など本の魅力を熱っぽく語られた。　（まつお）

月間賞は、居谷真理子さん（橿原市）

（司会―蕉子・真理子）（脇取―五月・勝弘）

（受付―唯敎・ふりこ）（清記―勝弘）

席題「盛り」　長浜　美籠選

姥盛りこれが中々元気です　萌子
一生の今が盛りと抱きしめる　万紗子
後期高齢という盛りもあるのです　蘭幸
盛りには行かないことにして気楽　かずお
三度目の今が盛りと跳ぶ卒寿　宏子
早い者勝ちだと皿に盛ってある　まつお
一発芸今を盛りに稼いでる　宣子
限られた命盛りと蝉しぐれ　賢子
春うららスマホの恋のまっ盛り　希久子
満開のままで散れたらなと思う　保州
働き盛り未だに親の脛かじる　哲子
盛り塩にこだわりがあるおもてなし　柳弘
知識欲旺盛すぎるなぜなあに　とーな
自由席一期一会の盛りあがり　柳弘
バブル期は三億でしたマイホーム　正和
父ちゃんもいたずら盛り歯も抜けて　ばっは
イヤリングぴしっと決めて姥盛り　義
我慢の末男盛りが過ぎてもた　克三
自分には今が盛りと言いきかす　(安)和夫
お盛んな噂へ補聴器のキャッチ　キヨミ
最盛期過ぎた夫が主夫になる　ともこ
大盛りも同じ値段という怖さ　蕉子
連休の帰路渋滞の真っ盛り　瑠美子
旺盛なお腹に詰めるバイキング　キヨミ
大盛りはもう止めよう胃がもたぬ　勝弘

光輝高齢いまが盛りと恋に酔う　敏治
野球空手育ち盛りでいたずらで　寿子
髪ふりみだして子育ての盛り　真理子
恋と言う魔法へ女盛りです　朝子
残念会反省点の天こ盛り　正雄
アメリカンドリーム右腕わし摑み　柾子
盛り場で風邪と孤独をもらうはめ　宏子
二次会と三次会辺り絶好調　紀雄
赤紙に働き盛り吸い取られ　ひろ子
今が盛り野原も森もわたくしも　扶美代
空白に女盛りを閉じ込める　寿之
果てぬ夢抱きしめたまま盛り過ぎ　公誠
あの頃は昼は鰻と決めていた　としお

佳

人生の盛りを介護家事育児　楓楽
人生の盛り子育てしてた頃　能子
句ができぬ盛りがすぎているからね　(田)章子
盛り場の隅に桃源郷がある　楓楽
8%へ値段は上げず盛り減らす　いさお

人

離合集散盛り場の吹き溜まり　克己

地

食卓へ婚期逃したネギ坊主　進

天

生きている限り盛りと思いたい　保州

軸

最盛期と励ましながら日々過す

兼題「血」　北野哲男選

アル中の血を吸い取りに来る藪蚊　敏治
図星らしい血相変えた慌てぶり　美籠
地球儀のところどころにある血糊　富子
解釈で不戦の文字を血で染める　三四郎
軍歌には若く貧しい血がさわぐ　唯教
チチンプイプイ母の血止めに子は安心　欣子
この命まだ鮮血が迸る　キヨミ
血が燃える応援団長辞められぬ　肇
水よりも濃い血時にはうとましい　楓楽
美人の血なくて長生きしています　希久子
にんげんが傳く犬の血統書　アキ
黙々とメダルの裏の血の努力　靖鬼
血から血へ一子相伝守る味　美智代
初孫が生まれジイジと同じ顔　茂
ああ夫婦不慮の事故でも血はやれぬ　一歩
DNA血は争えぬ臍曲がり　克己
血圧をものともせずに飲んでいる　朋月
血圧を気に掛けながら今日も飲む　武臣
献血はしたいが今日は二日酔い　隆彦
たこやきが好きな血筋でよく笑う　哲子
血は真赤それぞれ肌は違っても　としお
今度こそ息子が欲しい三姉妹　茂
ご自慢は三代続くトラファン　正和
ひと呼吸置いた主治医に血の気引く　武彦
有名になれば血縁増えて来る　准一
何とまあ下戸も美人もない血筋　まつお
血を見ると泣いた息子が医者になり　(田)章子
見るからに血縁並ぶ通夜の席　英夫
ロボットに教えてやろう血の温み　良一
あたたかくも煩わしくも血の絆　美津子
血と汗でつかむ涙の甲子園　光久
血でしょうか丸いお顔にまるい鼻　昌代
再会に血が止まるほど握手され　好
妥協案反骨の血が泣いている　正雄
妻の血を吸った藪蚊が死んでいる　瑠美子
拉致の母血を吐くようなインタビュー　六点
故郷に逢えば十五の血が燃える　直樹
佳
B型の男すべてに大雑把　公誠
低血圧いいわけにして朝寝坊　大子
汗みどろ血みどろ父の回顧録　ひろ子
誕生日の献血出来た頃が華　淳司
返り血を浴びない位置で吠えておく　楓楽
人
血の出ない刃物持ってる毒舌家　文代
地
血迷うてプロを目指した頃がある　扶美代
天
血と汗が僕を育てたよいとまけ　寿之
軸
まだ傘寿血を騒がせる好奇心

兼題「タッチ」　岩佐ダン吉選

九条がタッチをしたいノーベル賞　一歩
手探りで小銭より分け消費税　英夫
握手した手がやわらかい暖かい　としお
ソフトタッチで一家言ある人が好き　光久
「20歳以上」の画面にタッチ酒を買う　完司
タッチする画面に脳を試される　唯教
パソコンで打診聴診すまされる　順子
タッチの差で勝ったよろこび汗の量　光久
核ボタンタッチさせない世界の眼　ひろ子
若者へのタッチ彬の志　朝子
ATMタッチ急かせる後の目　妙子
古傷を横目で触れる他人様　郁夫
さわるなと言えば意地悪したくなる　(久)千代
母に触れ目覚めて此処は戦地なり　奏子
ハイタッチして喜びを分かち合う　玄也
タッチしてメロンの気持ち聞いてみる　朱夏
手にとって触れて眺めて買わず出る　俶子
わだかまり一挙に消したハイタッチ　(安)和夫
憲法はこのままで良し触れないで　いさお
タッチをしたい気持ちわかってくれますか　弘一
反核平和世代を越えて手から手へ　蕉子
ハートにはタッチして来ぬ美辞麗句　楓楽
触れ合えば分かち合う日がきっと来る　満作
次世代へバトンタッチを第九条　洋

ハグは無理まあいいところハイタッチ　理恵
タッチ差の負けを男は忘れない　扶美代
ようやったタッチの差まで頑張った　見清
タッチするだけのスマホに踊らされ　裕之
燃えるもの抱いて貴方にタッチする　柳弘
立ち話なにわおばちゃんよく叩く　隆彦
芽が出てるあなたがタッチしたところ　理恵
絵手紙のタッチはもはや夏模様　正和
ミスタッチノー憲法と核ボタン　卓
タッチしてタッチして手を繋ごうよ　義子
タッチするだけで見破る改札機　キヨミ
人情に触れたくなって無人駅　美智代

佳

タッチしたせぬで駅長室に居る　耕治
札束でタッチされると直ぐ転ぶ　敏治
次世代へ反戦バトンタッチする　敏治
ＡＴＭわたしの指にアレルギー　冨美子
原発の理論汚染にノータッチ　六点

人

スキンシップ知らぬ少年院の闇　洋

地

元気でいろよと地球儀を撫でる　蕉子

天

バトンタッチする子がいない梨畑　完司

軸

タッチの差生きた生かされたと思う

兼題「からから」　森松まつお選

からからの骨も肥やしの樹木葬　直樹
出番待つ間は喉がからからで　光久
じんべえ鮫からから笑い人を見る　蕉子
からからとしくしくおもしろいお酒　とーな
からからと井戸水を汲む里の夏　黒兎
水くれの悲痛な声を忘れてる　(安)和夫
からからの心にしみるいい話　富子
妻という砂漠さまようラクダです　奏子
美しい造花は愛に飢えている　進
初舞台声出すこともままならず　裕之
トラ快調テレビの父は高笑い　たもつ
あまり干し過ぎても旨くない干物　かずお
雨を待つ大地のように人を恋う　柾子
最後にはみなからからの白い骨　(矢)五月
からからの瞳に愛は語れない　万紗子
植木鉢からから留守は頼めない　耕治
遠慮会釈なく黄土日本に飛来　義子
喉ですか脳みそですかからは　いさお
衣食住足りて心が乾き出す　楓楽
優勝の文字がからから回りだす　信子
少子化のからからと鳴る鯉のぼり　冨美子
履きなれぬ下駄が浴衣で湯を巡る　眞澄
ひび割れた心に沁みる国訛り　三四郎
自画像を描く絵の具が干からびて　恵
オアシスへ辿りついたと大ジョッキ　哲男
手のひらにこんなに小さくなった母　賢子
貯金箱からからにしてプチ旅行　アキ
からからのこころへ落語満ちてくる　昌代
祝杯へ喉からからにしておいた　蘭幸
税務署で喉がからからになる受け応え　正雄
雑巾からから奥様ベンと仲が良い　希久子
からからの命を謳歌する湯船　日の出
ひび割れた地面に萌えている命　寿子

修

からからの懐と知り寄って来ぬ　理恵
わたくしのハートに乾燥注意報　富子
青汁を煽って蘇生する男　完司
母の日の母をからから笑わそう

佳

脳味噌が干物のようになっている　完司
スピーチの番近くなり乾く口　恭昌
買溜めの冷蔵庫も底をつき　たもつ
ロボットがからから笑う日も近い　完次
からからになるまで愛したいあなた　美籠

人

からからの喉にお茶とは気が利かぬ　いさお

地

懐がからからなのによう遊ぶ　敏治

天

からからの心触れたらすぐ燃える　すみ子

軸

酔い醒めの水は一気に流し込む

兼題「拝　む」　松本　柾子選

黙祷で始まる古稀のクラス会　隆彦
道すがら片手で拝む事故現場　恭昌
うしろ姿を拝んでいると振り向いた　蘭幸
拝ませてもらった美女の大あくび　六点
内戦の続く国にも拝む神　順子
返してと借金取りに拝まれる　としお
ウイニングボール外野手拝み取り　(安)和夫
スイーツを供えて母の七回忌　満作
無神論忘れて拝む震度4　誠一
拝ませてもらうと贋作のにおい　紀乃
アラホーと出雲の神に直訴する　好文
お賽銭お札しかないまた来ます　見清
拝む手を何度も滑り落ちた神　瑠美子
靖国を拝むと荒れる日本海　淳司
蟷螂の拝むポーズで千涸びる　たもつ
一生の願いに弱いおばあちゃん　一歩
拝むのはどっち神さま仏さま　わこ
手を合わすはざまへ命包み込む　寿子
陽へ月へ自然に拝む日本人　妙
立ち姿拝む姿勢の美智子さま　(田)章子
仏壇に愚痴を聞かせている独り　アキ
拝んでも妻は首ふる三本目　(奥)五月
受験期が済んで神さま大あくび　キヨミ
合掌の手からこぼれる罪の数　俶子

夕焼けへ今日一日をお蔭さま　ばっは
千羽鶴拝むかたちで折ってゆく　瑠美子
人のため拝む姿が美しい　好
先ず拝み箸を動かす食文化　篤
手を合わす他に術なし手を合わす　三四郎
平穏な一日でした仏さま　能子
拝むこと人間だけが知っている　洋
拝む時前に神さま居るつもり　弘一
ボーナスを拝んだ昔忍ばれる　欣子
母の背が拝む形に丸くなる　楓楽
拝むより話しかけてるお仏壇　(矢)五月
拝むたびだんだん僕が透けてくる　ダン吉
蛇行して川は祈りを深くする　完次
佳
散るさくらの後姿にありがとう　義子
そっぽ向く指は合掌から外す　良一
仏壇に住んでいる人にお茶お花　真理子
乳呑み児が拝む形で母の胸　郁夫
合掌の指も節くれ立ってくる　完次
人
悔しいがお金を拝むことがある　としお
地
こってりと汗出してから拝むこと　ダン吉
天
土壇場ですこしやましい鈴を振る　理恵
軸
ありがとう君の好意を拝み取り

兼題「愉　快」　小島　蘭幸選

ああ愉快意気天を衝く虎ファン　直樹
新聞を愉快に読んだ事がない　良一
悪友が鴨葱背負ってやって来る　紀雄
里山を守ると川に鮎戻る　黒兎
愉快だった頃を偲んでいる仮設　賢子
愉快だなキャッチボールが続いてる　能子
愉快ですアンバランスな夫婦です　堅坊
愉快ではないか百越え遊ぶとは　哲子
オレ流に徹してポックリ死を遂げる　卓
団欒の笑い亭主の留守に咲き　誠一
晩年を愉快に笑い飾ります　光久
青空と五月の風とおにぎりと　蕉子
ハルカスに溜飲下げているなにわ　楓楽
本心を掴まれきみまろへ笑う　あや子
大阪弁愉快な値切り方をする　正雄
愉快に話そ邪魔者はもういない　美籠
車座の愉快な仲間多面体　寿之
近大で鯨養殖できないか　保州
斗酒浴びて李白と語る夢の中　直樹
毎日が愉快と白寿インタビュー　キヨミ
空想の翼広げてペン走る　富子
また一つ世界遺産となる愉快　萌子
磯野家の窓から漏れてくる愉快　六点
駅長は猫で愉快な旅になる　希久子

泣く孫をあやす魔法は秘密です　誠一
亡き母とボケツッコミでした介護　篤
愉快な家の窓を覗いてる女神　俶子
生前葬みんな愉快に河内節　ふりこ
寅さんが来ると愉快なつむじ風　朱夏
履歴書に愉快なボクが並んでる　とーな
青空と同化こころもTシャツも　柾子
歳月は愉快マンガが好きになる　一歩
ツバメ戻るただそれだけの北の空　ダン吉
福島の酒は愉快で泣き上戸　岳人
旧友が蕎焼酎とやって来た　ひろ子
ジョーカーを握った束の間の愉快　柾子
家族ではないからヘソクリも話す　アキ

佳

卑弥呼にはきっと愉快なかくれんぼ　進
顔揃うまで乾杯の練習だ　完司
我が街を天守閣から見る愉快　まつお
亡夫には悪いが愉快ですひとり　あや子
説教の後半戦が愉快です　信子

人

兄ちゃんがこけた愉快になってきた　理恵

地

飲み仲間あつまれ妻は三日留守　完司

天

細胞が笑いたがっている五月　居谷真理子

軸

三人目も男愉快になりそうだ

句会燦燦

4月句会を読む

井上一筒（いのうえいいとん）

鉛筆を転がす槍に化けるまで　完次

えんぴつにも常に化身願望があるようだ。昔ながらのトンボ鉛筆。少し目を離すとすぐ錐になり槍になりたがる。昨年で百周年になるクラシックなロゴは「Tombow」。

卒業証書丸めて覗く国の先　たもつ

総人口の25パーセントが65歳以上のお年寄りの国で、オレにこれから何が出来るというのだろう。即興の遠眼鏡で覗いてみても、じいさまの入れ歯とばあさまの皺ばかり。

修正の白さ気になる娘のたより　キヨミ

あのレオナルド・ダ・ビンチは或る朝、描きかけの「モナリザ」をホワイトで塗りつぶしてしまったという。ここでは、気になる修正液の「白」。微妙な心の綾を句に託された。

カメレオンあなたの側で化けてます　順子

正体はツルだったのかありがとう　耕治

女性はあらゆるものに変身出来るのだ。午後は七色に輝く爬虫類、宵には美しい布を織る鶴の姿に。それに比べて、男は唯の老人に化して行くばかり。

小窓少し開けているのが合図です　わこ

ロミオを迎えるジュリエットは大きな窓を全開にして声を上げて歌っていた。句はその逆方向の秘めやかな世界。

起きたくはないが五時には五時の音　眞澄

平凡な連想では新聞バイクのエンジン音。牛乳配達のビンの音はスーパーの紙パックになった。闇夜が店じまいをする音か。

終章は風の化身となるもよし　武彦

「臨終は駄馬の涎となるもよし」に比べて別次元の清らかさ。

柳壇

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。

編集部

川柳塔すみよし（大阪）　森松まつお報

見返りのない約束で塩贈る　シマ子
他意は無い今日の貴方は遠い人　半　錢
戦無い国へ九条の誇りよ　朝　子
物の無い時代が生んだ思いやり　賢　子
金はある一番欲しい嫁が無い　(奥)五　月
歳をとり財産無くて気は楽だ　公　平
お互いに期待しないでいる夫婦　和　代
欠点のない人なんてつまらない　直　子
穏やかな日々運勢に逆らわず　美　籠
お守りも四葉も抱いて汗もかく　(矢)五　月
平凡な倖せ一番の米洗う　篤　子
我が家には幸せ運ぶ孫がいる　順　子
幸運が舞い込む隙間こしらえる　光　久
手のひらでやさしく運をつつみ込む　安　代
運不運神に委ねた今日の糧　亜　成
不運でもいつも笑顔を忘れない　舞　夢
回転ドア運は勝手に出ていった　公　誠
これとても天の運命あぶらむし　重　信
幸運の女神素通りばかりする　かりん
幸運の女神に逢ってから迷い　柳　弘
エースでもグランド平す草野球　妙　子
我が家ではエースと思うわたくしが　美世子
七人の敵に育てられたエース　ゆみ子
エースでも火の粉を被る正念場　日の出
タイガース真のエースを待っている　舞　蹴
雲海に顔出すエース富士の山　紀　子
ただ寡黙いつもひとりでいるエース　ダン吉
朗読の余韻にひたる帰り道　一　歩
うっとりと伸ばしています鼻の下　勝　弘
うっとりと見とれる先にある平和　志津子
玉三郎女以上のおんな見た　温　子
イケメンにうっとり見とれ躓いた　典　子
春らんまんうっとりしてるお茶の席　芳　香
赤と黄に何を混ぜたらあの夕陽　克　博
爺転び地球抱いたと豪語する　福貴子

川柳塔打吹（鳥取）　野口　節子報

人恋しほろほろ鳥の鳴くお宿　義　人
ほろほろと泣いて別れた風の愛　幹　啓
盃がほろほろ月とゆれている　みち子
紅葉ほろほろ一緒に浸る露天風呂　重　忠
ほろほろと肩に天使の雪が舞う　耕　治
ほろほろの後はコロコロ泣き笑い　完　司
ほろほろとやさしい嘘に溺れそう　美知江
ほろほろと笑うお顔はおまんじゅう　くにこ
二三輪紅梅ほころぶ雪の朝　たけ代
一張羅の晴れ着ほころび恋終る　芙美子
一本の酒でほころぶシャイな人　龍　枝
少々のほころびあればなおかわい　滋
さわやかに十五の春がほころんだ　公　恵
幸せのチャンス見つける旅に出る　久芽代
満開の宴の下に有るチャンス　野　蒜
売り時の株が不時着して仕舞う　紀の治
北帰行今日がチャンスと風に乗る　道　子
飛ぶチャンスも有れば沈むのもチャンス　三津子
今買うと消費税分へそくりだ　貴　恵
トコロテンチャンスはいつかやってくる　芳　光
大往生一生一度来るチャンス　照　彦
戸を開けていつも待ってる青い鳥　泰　山
黙りこむ口ではしょせん勝てぬから　玲　坊
老脳を黙ってこねる五七五　悦　子
夫婦仲黙んまり続き一カ月　紀美恵
いい合って負けては黙る夫婦仲　善　江
種もみも黙って出番待つじゅんび　美代子
戦争を知らぬ奴等は黙っとれ　石花菜
終章のページ黙って空けておく　重　利
黙んまりの吐く一言に骨がある　節　子

和歌山三幸川柳会　武本　碧報

歩いて来た道がわたしの遺産です　純　子
遺産分けそっと兄嫁席外す　ひろ子
欠けている猫の茶碗も遺産分け　章　子
戦争の遺産九条だけでよい　ダン吉

東京へ富士山見える側の席　き く
世界遺産天保山では駄目ですか　義 雄
熊野路の牛馬童子を訪うロマン　幸 子
ホタルとぶ記憶遺産へ知覧の灯　昭 枝
現世が一番よろし遺産分け　み ね
大切に育てたわが子こそ遺産　よしこ
遺産分け知らぬ女が座ってる　美枝子
太陽はいつもあなたの上にある　保 州
お日さまに会うのは嫌というもぐら　俶 子
太陽も休暇を取ったらしい雨　八重子
太陽が溶かしてくれたわだかまり　美 羽
徘徊の父が夕日と話してる　宏 夫
お日様がほっこり笑う春日和　昇
日の出に手を合わせた祖母の歳になる　弘 子
太陽はあなたと決めて生きてきた　碧
欲一つ捨てれば坂も楽になる　菜 摘
決断へ坂を見上げてする思案　竜
吉報もそうでないのも春の坂　和 子
坂の上の雲に大志を抱く風　眞知子
山坂を越えてまあるくなる二人　みつ江
人間の下山期そろり坂おりる　義 泰
信念は曲げぬ男の登り坂　幹 子
七坂を越えた平和な土踏まず　イ セ
押しのけて登ると落ちる坂の下　次 根
のぼり坂くだり坂あり世は無情　彦 弘
森林浴に出かけ花粉を持ち帰る　当 代
樹海より深い悩みの森に居る　准 一
傷ついた森が涙を溜めている　富 香

森を出て森の素顔を知るカラス　智 三
一人来て森に心を奪われる　絹 子
モヤモヤが消えた程よい森の風　起世子

竹原川柳会（広島）　古田　太虚報

頭上注意気にして溝に嵌り込み　幸 子
消費税頭ごなしに降りかかる　白 狐
群れをいく鰯のトップにある覚悟　千代美
棟梁は無口頭と目で指図　力
頭巾と仮面脱いでにんげんとり戻す　寛
先頭に立つ風除けになるために　蘭 幸
過去は過去消して明るい火をともす　規 代
灯を消せばやっぱりひとり風の音　鬼 焼
亡父を恋う母に消えない軍靴の音　敬 子
十二時で消えてしまった馬車捜す　輝 恵
エプロンを外して妻は消えたまま　静 風
遅咲きの孫の感性個性見る　汎 美
芽の出ない仲間同志は仲良しで　半 徳
歯を食い縛って木の芽覗きけり　笑 子
裸木の芽吹きへ雪よそっと降れ　栄 恵
ぐんぐんと伸びる花芽とランドセル　淑 子
ふくらみはきっと花芽だ恋人よ　慶 子
気合い入れ気分転換掃除の日　歩 美
やさしさについつい甘えている私　房 子
新世界背中に羽根が生えてくる　あゆみ
般若経いのちが円くなってゆく　厚 子
お粥さんやさしい母のひびきなり　比呂子
お誘いは皆OKの春うらら　栄 香

中　居　善　信　選

努力する過程がきっと金メダル　史 子
一言に殺し文句が見え隠れ　森 子
握手っていいな心に灯がともる　巴 子
誘ったのは月かそれとも沈丁花　いわゑ
することが無いので酒を飲んでいる　朋 月
崩れたら漢字も人も読めません　美恵子
湯豆腐が一番似合う雪の夜　紀の治
そのあとは記憶喪失しましたの　理 恵
アルバムは嬉しい時の顔ばかり　弘 一
高齢者ばかりになっている郷里　ルイ子

佳句地十選　（5月号から）

政　岡　未延子　選

門限に破る楽しさ教えられ　紀の治
毎日が記念日今の持ち時間　次 根
合格だ定員割れの広き門　岳 人
宅配の料理独りは味気ない　克 己
気の利いた料理は不得手あしからず　真 由
ストレスを仲間と飛ばす縄のれん　安 男
謎めいた人と寄り添い謎のまま　堅 坊
握手して二度と会わないサヨウナラ　勲
税務署が親切すぎて嘘付けず　武 彦
指先の記憶に任せ千羽鶴　千 歩

新しいスタートライン君と立つ　史子
悔いのない一日でしたただ歩く　一路

松露川柳会（鳥取）　山本　正光報

大山の恩いただいて生きている　鈴枝
恩うけて感謝忘れず生きている　弘子
幼少に受けた恩師の墓参り　智恵子
恩人の尽くし切れない感謝状　和代
恩がえし復興支援忘れない　公美枝
恩のある人へ節目を忘れない　静江
生かされて来たのも親の愛と恩　正光
大志抱く前にもらった恩ひとつ　雄々

川柳ふうもん吟社（鳥取）夏目　一粋報

俺の番近い骨壷選りに行く　洋々
ライセンスはずし名刺が風邪を引く　義徳
お陽様も母も無料の愛をくれ　一瑤
どうせなら笑って終わりたいこの世　無限
原発に厳しい民のライセンス　金祥
浄土への道も無料でないようだ　文香
どうせなら結果は同じ止めておく　回春子
わたくしの中でマグマが騒ぎだす　あしび
ライセンスなしで運転あっとろし　雅女
おい女房ちったあ色気あるんかい　清信
どうせなら何も言うまい貝になる　美佐枝
怒ってばかりちったあ笑顔せんかいや　凱柳
高速道路オープン前に歩き抜く　かつよ
太り過ぎちったあ飯をぬくが良い　とも湖
クリミアの春を軍靴が踏み荒らす　隆浩
ライセンスないが川柳十五年　昌鼓
片道は無料にします黄泉の国　野蒜
どうせならドンと施設へ寄付しよう　善夫
ライセンス履歴書からも疑われ　行男
ワイナリーの試飲が春にしてくれる　地佳平
ライセンス有っても飛行機は落ちる　妻子
おためしは無料それから高くつく　みゆき
無料でっかほんまでっかと列の後　毅
金見ると急に元気になる私　一京
どうせなら大法螺ふいて憂さ晴らす　重忠
どうせなら美人の横に座りたい　秋月
どうせなら死んだつもりでガンバロウ　弘康
どうせなら天に吐ける句目ざしたい　節子
どうせなら廻しゆるめて敗けてやる　蟹郎
冬眠を香りでおこす沈丁花　美恵子
いつまでも車の免許手放せぬ　圭一郎
ライセンス生かしてこそのライセンス　正子
家護れ父からもらうライセンス　房江
窓全開無料の空気たんと吸う　天翔
もうちったあ心みがけば光る石　一粋

ほたる川柳同好会（大阪）水野　黒兎報

力にはなれないけれど祈ってる　桂子
陰からのお力添えとふと気づく　久子
天性の非力幸いして長寿　勝
浮き沈み何度乗り越え夫婦舟　美智代
口上手お世辞だったか歯が浮いた　正子
浮遊する敵は見えない2.5　純子
ご先祖も浮かばれないよこの世相　正代
白かった割烹着いま泥まみれ　黒兎
ハイキング孫のバナナを猿がとる　長一
前向きに過去より未来考える　郁子
UFOに誘われ謎の空の旅　柳童
ゾラ取って汗拭く上司見てしまう　幹治

南大阪川柳会　津守　柳伸報

出来ちゃったわざわざ親に言うて来る　更紗
すかんたこわざわざ歳を聞きにくる　一歩
人生劇場ひとりコントの幕を引く　恭昌
引けないが妻に一応謝って　弘泰
一歩引き二歩前進の策を練る　庸佑
引き潮へ亡き人達に花託す　シマ子
幕引けば人は誰でも地に還る　たもつ
補助線を引いて糸口見えてきた　昌紀
引き算になると混戦する頭　祥昭
バージンロード長い裾引く晴れ舞台　なぎさ
政治献金汚職の噂絶えなくて　弘子
汚れ役承知で一歩前に出る　ダン吉
落ち目でも汚れた金に手を染めぬ　正春
汚染水きたないだけで済まされぬ　勝弘
介護とは笑顔忘れぬ下の世話　柳伸
シャツの汚れは父の尊い汗である　志華子
子を守るためなら汚名受けて立つ　栄子
汚い手口で企業秘密を盗む　ルイ子
くしゃくしゃの脳焼酎で活入れる　集一

どんな夢見たのか目尻くしゃくしゃだ　修
くしゃくしゃがアメリカ村でたむろする　柳右子
マドンナがくしゃくしゃになる筈がない　灯子
崩したらあかんあかんと嵯峨どうふ　ばっは
皺の顔酸いも甘いも噛み分ける　楓楽
顔以外バッチリ決めて電車待つ　東風
百均で今風も買うエトセトラ　あや子
ネット通販なんやわからんツイッター　和雄
今風のメイクで妻は春の乱　あさ子
俺うどん子供給食妻ランチ　忠昭
ナウイパパ炊事洗濯育児まで　いさお
今風の魔女は電車で出来上がる　克己
今風を裏漉しにして生き延びる　柳弘

高知川柳社　小川てるみ報

旅三昧まだまだ自信ある五体　千鳥
しんしんと雪降るも良し古都の旅　てるみ
歯ぎしりと斬互角の夫婦旅　幸美
鈍行で昭和の風を探す旅　ふき
旅役者ゴザの固さを忘れさす　暖
念仏を唱え無欲と旅をする　哲史

川柳塔鹿野みか月（鳥取）福西　茶子報

すっぴんで拒まれてから厚化粧　いさお
二つ三つついでに出来た時もある　鈴
臨月の母恨む親子遠足　孔美子
遠足に行く気にならぬかたつむり　盛桜
格式の祭りに偲ぶ城の主　(西)和子
夜ざくらの静寂こころまで静か　弘子
祭りの日神を忘れて酔いつぶれ　咲和
はしゃぎ過ぎ祭りの後の蛻殻（ぬけがら）　すみれ
人の生ついでばかりが多すぎる　照彦
もう少し行くと地獄が見えてくる　螢
右向け右ぼくは正面向いたまま　石花菜
遠足は無口の足ががんばった　八重
声からしバイトの兄ちゃんみこし練る　実満
母さんと財布ぐったり祭りあと　茶子
遠足で拾った小猫老いたなあ　恒
砂時計過去もついでに消去する　満
命令を拒み残った命です　小鹿
お人好しのついでに馬鹿もぶら下げる　(岩)和子　美ッ千
三食を拒むと元気失せてくる　蟹郎
遠足の供に足腰萎えてくる　富久江
ついでにと頼まれごとを忘れてる　かおる
杖をつき遠足している老いの坂

川柳ささやま（兵庫）　北澤　稠民報

満腹でうっとり童謡聞いてます　久子
夢もてと余白余生と伸びていく　美緒子
共白髪老々介護覚悟する　純子
便利だが使われないは年のせい　美紗子
怖かった父をさすっている涙　哲男
介護するされる話を妻とする　稠民
老々介護視野に入れてる二人膳　真由
おもいっきり笑って過ごす倦怠期　勇
新調のケイタイメールが分らない　多美子
試着室高値の方でおもいっきり　開子
便利さへ素直になれぬ老いの汗　可住
母急病介護師免許役立たず　かほる
想い出の第九うっとり引き込まれ　幸子
厳寒へ碗のお茶から暖を取る　照代
共白髪果たせなかった夫婦道　美智子

川柳塔なら　坊農　柳弘報

ライバルの影がだんだん遠くなる　いさお
感動の拍手拍手でアンコール　博一
割り勘と聞いて注文追加する　郁夫
先輩のおごりとわかり酒追加　おたか
ありがとう一言追加心地よい　次郎
新聞に出ると並び出すラーメン　比呂志
老木ももう一花を咲かす気で　将文
追加した地酒くどくどお説教　ふりこ
がっちりと二人三脚影と僕　寿之
薩摩切子柩の隅へもう一つ　理恵
一寸だけ頭を出して叩かれる　弘風
長生きのおまけを貰う迷子札　成子
ガラス越し隣の家の灯はぬくい　萌子
いやいやの影を宥めて連れ歩く　克己
真心をそっと追加のおもてなし　辰雄
オーダーがストップされて時間知る　勝弘
多数派のひとりで影までも薄い　ダン吉
満足を紡ぎ出してる目の高さ　堅坊
血圧を考えビール追加する　紀雄
さよならの向こうで面影が笑う　柳弘

黙祷がまた深くなる同期会　順啓
説教をされてる影に耳がない　孝子
エリートの影を引きずるホームレス　良一
僕の心透き通るまで拭くガラス　富子
あれ以来パパの動きはガラス張り　恭昌
ラムネ玉みたいな人といる疲れ　柾子
ときめきを隠しきれないガラス窓　惠美子
生の道死の道ひとり風を出る　隆盛
私の影から逃げていただけか　真理子
ちぐはぐの影で泳いでいる野心　美智子
その先の修羅は語らぬ磨りガラス　仁
悔しさがふつふつにじみ出る背中　怜依子
追加した言葉に本音詰めてある　朝子
疑いを持たれはじめたすりガラス　完次
光りなさい私が影になってやる　國治

川柳同友会みらい（鳥取）吉田　陽子報

おためし期間終わる頃には興味失せ　葵
消費税やりくり上手見せどころ　由里
普天間も辺野古も嫌と無茶を言う　和之
事件事故人を見る目がやせ細る　陽子
子育てにおためし期間ありません　みどり
逃げる道確かめてから腰おろす　章子
恐々と昔のドレス試着する　美恵子
こっそりと非常袋の酒賞味　信平衛
痴話喧嘩あんなこんなを掘り起こし　和郎
いろいろな刺激が明日の張り作る　美香
がっかりとするのは早い明日がある　里美
泣くよりも笑顔で暮らす福来たる　理子
きらきらとしてきた娘恋かなあ　三郎
白ならば逃げも隠れもするなかれ　敦子
ネジ巻いて今日一日を若返り　嘉子
メス入れた体たちまち隙間風　澄子
編むほどに手編みは色を増している　安子
どう抵抗したって税は増すのです　華蓮
レッテルの賞味期限はあてにせぬ　慶一
永らえて感謝と動くボランティア　菜美
豪雪に泣いても郷里捨てられぬ　和代
身の丈のレッテル少し越えてみる　一眸
消印がなくて嬉しい手紙くる　公弘

川柳塔まつえ吟社（島根）相見　柳歩報

何かしら起る予感の川向う　美智子
清流にわたしの愚痴を流してる　桂子
川ひとつ越えて絆を太くする　草庵
さらさらと流れて欲しい子の川よ　孝亮
春の小川澱んでいるとめだか泣く　涼子
川の字にならんで昼寝保育園　哲子
さらさらと川は流れて強くなる　禮子
まだ魔法解けずにガキのままである　芳山
アメ玉の魔法が効いてから多忙　博子
耳元でハートに魔法かけられる　久絵
塩と酒魔法のような隠し味　たけし
欲しいなあ意中の人に逢う魔法　幸子
そのジョーク耳の底から洗い消す　注湖
悲しみを消す妙薬に酒がある　淞丘
擦り減った消しゴムにある成就感　弘充
消しゴムがよくちびるのは私だけ　繭
少子化に村の母校も消えて行く　幸代
ライバルが私の影を消していく　寿代
みんな消すみんな無かったことにて　畔
お隣りの猫にこそこそ覗かれる　叮紅
こそこそと今夜の酒を買いに行く　ちえこ
かっこつけ一つ咳してこそこそ逃げる　ゆき
湖面ではこそこそしてるお月さま　青帆
こそこそと道の百円玉拾う　知恵子
良薬と溜めた雫が大騒ぎ　とも子
大海のひと雫だが反骨だ　輝山
ひと雫たらせば丸くなる話　千里
死ぬまでに汗の雫を積み重ね　柳歩
裸足の子ぞうきんもって追いかける　俊子
思い切り傘の雫を切る別れ　昌枝

富柳会（大阪）古田　千華報

足して二で割れる答えの無い社会　和子
腕力で負けても口で渡り合う　彦次
あの時の答がほしいバスに乗る　千恵
叱られる予感語尾が震えだす　アキ
人間を信じられずに冬になる　文重
泣きながら生まれて笑いながら逝く　正治
恩愛の絆は深し冬帽子　信子
バケツリレー昭和時代のいい絆　清
雪見酒一人が良いと思える日　静子
答無き円周率の無限大　壽峰

一流の舌でないから騙される　千華
まどろみの時間をくれたおもてなし　高鷲
割り切れぬ答を抱いて黄昏れる　佳子
筆圧の強さに出てる緊張度　常男
雪解けは叶わないのか嫁姑　武人
気まぐれな風と待ってる雪便り　登子
耕した心をいつも持ち歩く　よしみ
煩悩を捨てると見分けつかぬ顔　奏子
雪しきり耐えろたえろと父の檄　寿之
北風に真っ直ぐ向かう冬の章　未知
まごころへまごころ渡す素手と素手　欣之
汗の背な見せて答はまだ白紙　澄子
土俵際女の意地が闘ぎ合う　慶子
ひたすらにジャンプ答に届くまで　恵
残ってる時間は知らず一歩ずつ　伸雄
勘違いされて想わぬおもてなし　七朗
よく弾むように磨いてから渡す　紅紫朗
有情無情その真ん中を泳ぎ切る　森子

川柳塔唐津（佐賀）　**仁部　四郎報**

どん底で浮上の努力髭を剃る　蜂朗
波に乗り白星続く千代鳳　實
靖国の御霊がもますご政道　高明
入院中犬は散歩の嫁をボス　松風
老いの背を励みなさいと春の風　節子
金曜日チラシに踊る大特価　四郎

わかあゆ川柳会（島根）　**松本はるみ報**

はらはらとさせた我が子に支えられ　かつ子
すきな酒一人で飲みたい時もある　安子
今になり傘の大きさしみじみと　澄子
あの星に今宵も聞かそうわらべ唄　はるみ
目が覚めたそれもしあわせ朝の顔　好栄
ぬれた傘たたむ仕草が君に似る　恵美子
酒買って酒はやめよと出してやり　英子
待ちわびる近くて遠い春の音　ちよえ
忘れ得ぬ人アルバムで生きている　昌

ローズ川柳会（兵庫）　**亀岡　哲子報**

カラスにはカラスの合図楽しそう　みつ子
出る幕でなかったときにしゃしゃり出る　年代
プリーズとドアを開いてくれた人　哲子
耳に入るうわさ半分漉して聞く　義子
SOS偶には出して見るもいい　てる
月が出ているわたしも丸くなるとする　いわゑ

川柳塔さかい（大阪）　**村上　玄也報**

ランドセル背負った孫が眩しくて　舞夢
眩しさもすてきローカル線の旅　清晋
孫達の声まで眩し春や春　月子
隠し事あって眩しい妻の顔　雅明
下心少し眩しいあんたの目　かりん
理も尽くす眩しさ真っ直ぐなコトバ　あきこ
補助線を足すと答が見えてくる　朋月
若くなく可愛くないがよろしくね　世紀子
ワンワンとカアカア派手な夜明けだな　健吾
あのヒントつかみそこねて恋逃がす　永久
木洩れ日の光を受けて生き返る　唯教
七輪で焼いたサンマが眩しくて　日の出
眩しさは無いが清楚に野辺の花　五月
モナリザの笑みは僕だけへのヒント　時雄
あなただけに気付いてほしいこのヒント　和夫
あるようで無い人生の参考書　としお
百歳にヒントを貰う長寿法　好
高砂で浴びたフラッシュ裏切れぬ　誠一
ライバルが持つトロフィーの眩しさよ　玄也
街中が眩しく光る退院日　清
羽化をして孫は眩しいハイティーン　敏治
多すぎるヒント混乱おこしてる　半銭
引き際のヒント老猿から学ぶ　俶子
きらびやかに百周年の宝塚　八千代
わが妻も眩しい時期もありました　わこう
わたくしが変われば屹度良い家庭　ヨシ枝
オシドリが眩しく映る寡婦の身に　澄空
いっぱいのヒント貰って焦り出す　愿
オーラ眩しくてあなたに近寄れぬ　みつこ
サユリスト今も眩しくあこがれる　素頓馬
藁屋根の過疎地が客を呼び集め　憲
答聞きやっとヒントの意味を知る　和幸
地震予知のヒントなまずに聞いてみる　光
割り切ってからよく見える世の流れ　天笑

長柳会（大阪）　**坂上　淳司報**

一〇〇年の花華やかにタカラヅカ　淳司
最後まで話噛まない人違い　修
黒幕は一席設け糸を引く　弘光
孫三つ僕の道化も通じない　篤

笑わせるピエロ悲しい役回り　久美子
我が身知り老いた道化師幕を引く　克三
節税で孫にどっさり新口座　(穂)正子

川柳花の輪(大阪)　**岡本　薫報**

愛された記憶が明日の児を育て　みちる
春つれて紋白蝶風に舞う　陽
寒風にも雪にも負けず寒椿　克衛
子の寝顔明日の平和を願います　やすの
就活の明日に備えるいい笑顔　一幸
明けぬ夜はないと命を愛おしむ　泰子
先輩風吹かしたけれど奢る羽目　敬子
明日プルン通販信じ顔パック　公子
風さわやかに心をいやす花の寺　薫
新成人輝く未来明日がある　昭好
ぬるい風とがった心ゆるくする　あや乃
風読めずいつも意地張り四面楚歌　勇太朗
逆風に立ち向うほど若くない　楽鬼

倉吉川柳会(鳥取)　**竹信　照彦報**

散りぎわが天晴れだった特攻隊　康子
散り散りにされた家族に春遠く　鬼一
紛争地毎日命散っている　次男
散る桜綺麗を残し逢瀬待つ　恭子
人生の散り際清く金残さず　紀美恵
散り際の見事な桜まね出来ぬ　けいこ
桜見る小高い山に登ります　瑞子
木登りの上手な兄に嫉妬する　光

ふうふうと登って拝む御来光　重忠
どっこいしょよっこらしょっと天までだ　石花菜
人知れず心の闇を登りきる　美知江
長谷寺の石段登り絵馬に会う　酔芙蓉
丸い海見えるとこまでまだ登る　野蒜
登りつめ行き場なくした点取り虫　悠子
やせ細る脳みそ庇い辞書めくる　風露
細ぼそと暮らすしかないわが老後　智恵子
細ぼその暮らしに座る消費税　龍枝
糸電話かすかな声で戯れる　日出子
男には書けぬ細腕繁盛記　玲坊
ざっと茹でほうれん草を寿司の芯　英子
毎日をざっと暮らして生きのびる　由紀子
ざっと見て七・八十代皆元気　萩江
ざっと見て歓迎された席でない　雄大
遣り過ごす度胸はざっと身に付いた　茶子
嫌なことざっと流して忘れよう　美ッ千
木登りは猿に任せている私　照彦

川柳大阪　**森松まつお報**

お転婆の私ごんたを謝らす　蕉子
ごんたくれ少しもジッとせん子やな　珠生
随分とごんたはしたが自殺ゼロ　堅坊
成功者ごんた経験みな多い　公平
恋病みて痛む心に冷やの酒　柳明
消費税負担能力越えている　紀雄
S席を棒に振ったよそら痛い　美濃
外反母趾ちくちく痛み恋終わる　万紗子

その位置で民の痛みは分かるまい　一歩
べっぴんに足踏まれても笑ってる　勝弘
福島の子等に昔の青空を　司
パパだって昔ばあちゃん泣かしたさ　柳昌
同級生昔話が酒の肴　善純
子育ても時代がちがう口だせぬ　美世子
青い地球むかし話にしてならぬ　義子
過去の事ばっか言いなやうっとしい　かよこ
錯覚で済まなくなったラブレター　柳弘
縦縞を着る錯覚の狙いうち　朝子
外観に絆されましたまだ未熟　美籠
ガラスだと知らず飛び込み頭打つ　五月
褒められていると思っていたのです　まつお
好きやったとは知らなんだ好かん蛸　靖鬼
金持ちが偉い人だと思ってた　温子
行き先を乗り間違えた上下線　功
外国の人の力を借る日本　和

川柳茶ばしら(愛知)　**関本かつ子報**

居酒屋へ美人目当ての客の入り　まみ子
本物はこんなに安い筈がない　遡行
真央ちゃんに一喜一憂ソチ五輪　百合
どこへでもリュック気楽な外出着　美千代
寝返りをうっても同じ見舞い客　雅美
顔だけを出すお見舞を喜ばれ　かつ子

あかつき川柳会(大阪)　**山本　柳昌報**

向い風まるごとあびているひとり　朝子

哀れだな二回三回廻るすし　堅坊
フクシマを哀れと言うな憤怒二字　ダン吉
日替りの特売品で暮したて　美智子
8億と聞いて8%縮こまる　紅絵
宴果てむなしさどっと眼鏡ふく　ばっは
暮れなずむ街に老う身のおきどころ　鈍甲
足し算とかけ算ぎこちない四月　キキ
世界遺産富士山匂う水を買う　生枝
掴んだら離してならぬ命綱　秀夫
踏む前に虎の尻尾は掴んどく　信二
九条をしっかり掴み離さない　康信
薔薇の棘掴んだままでいる平和　千代
会見から掴みたいのはSTAPだ　信子
生かされる意味を掴んだ助け合い　すみ子
無造作に風掴まえている詩人　愿
少年へ戻れる幻の小川　敏子
体内の小川に酒も混ぜておく　大気
おとこはん桃色メガネお好きです　たかこ
幸せを掴む努力は厭わない　隆昭
旅をして小川もいつか海を識る　紀乃
ここはねえ昔ホタルのいた小川　見清
ご近所が集い洗濯した小川　篤
雪国へ小川の音が春告げる　哲男
古里の小川に今も棲む童話　たもつ
市と村を別ける小川が横たわる　シマ子
林檎より桃を選んでいる入れ歯　幸子
桃の花梅さくらほど知らされず　直子
おばあちゃんの元気ピンクの勝負服　桃花
桃源郷こころ次第でいずこにも　穏夫
桃色があの頃とても似合ってた　一行
宝塚桃組はない雪月花　和雄
トマトだがなぜか名前は桃太郎　勝弘
私こそ春の花だと桃の自負　いさお
パソコンで桃源郷を検索中　忠昭

川柳塔わかやま吟社　川上　大輪報

長生きをしますお世話をかけますが　大輪
世話女房夫も煙たそうである　泰女
世話出来る今続くこと願いつつ　秀子
世話かけるねと老いの涙が痛ましい　克子
頼り切る人へも鞭を打つ介護　寿子
さり気ない予告に重い過去を見る　准一
予告なし元気な声が響く門　和香
人生は予告ないから生きられる　よしこ
鋏入れ生き生き花が蘇る　ほのか
へそくりを挟んだ本が見当たらぬ　英子
気にしない奥歯に挟む遠回し　千賀子
平凡な一日疑問符を挟む　小雪
誰か嘘つかねばならぬ板挟み　紀久子
迂闊にも挟んでしまうきみの闇　あきこ
カラオケのアイドルになる外れ節　冨美子
好きなんだ元アイドルの片えくぼ　愿
追っかけがアイドルよりも忙しい　紀子

サークル樗欅（大阪）　松尾美智代報

波風も埃も立てず生きている　房子
空の青もう急ぐまい楽しもう　いわゑ
この歌は青春の日のあのあたり　蕉子
金婚へ過去の恋路を聞きたがり　哲夫
目覚ましが謀反を起こす春うらら　昌紀
肝心な時だが傘が開かない　光久
向き合えば過去がやさしい顔をする　久仁雄
人間だけ神に逆らい生きている　たもつ
過去形に変われば夢がふくれだす　加お里
体力に反比例する口達者　美智代
まだ過去の夢追っている楽天家　扶美代
曲折も挫折も芯にする背骨　千代
明日への期待で今に精を出す　美籠
ぽちぽちと行く残り少ない旅路　希久子
言い訳ってほんとのことは言うてない　義子
聞いてしまった内緒話をもてあまし　智恵子
過ぎ去った日々は戻らず貴重なり　みつ子
過去帳のところどころに誤字脱字　楓楽

西宮北口川柳会（兵庫）　藤井　宏造報

いいんですひとりぼっちが好きだから　勝弘
下手な文記念切手でせめてもと　恭子
へとへともニンニク料理食べ元気　歳子
お日様が沈まぬうちは避ける酒　朋月
灰汁少し抜いて魅力が増して来る　遼子
へとへとの褒美キレイな花が咲き　直
就職が決まると変わる空の色　忠
味のある色合いになる喜寿の顔　哲男
理に合わぬことには尻尾振らぬ主義　美籠

かの芭蕉大山師とはうふふのふ　伯備
へとへとまで努力する人遊ぶ人　り こ
友の顔思い浮かべて花切手　淑 子
満開の桜に妬ける花嵐　キヨミ
広辞苑寄り道で夢広がった　章 子
核家族心のスキをつくる闇　洋次郎
内定へ父が目頭押えてる　秋 果
人目避けるのは不倫とテロリスト　宏 造
浮上して危機を知らせる深海魚　武 彦
グロッキー耐えて踏ん張るど根性　武 臣
不本意な就職先の水が合い　浩 司
へとへとになるまで止めぬ鬼コーチ　毅
満ち足りた子供扉を叩かない　千賀子
ラブレター切手貼ったがよう出さぬ　一 徳
入社式社長目指して並んだ日　盛 夫
渋滞を避けて出会った山桜　利 子
生活保護受けて仕事はせぬつもり　茂
極限の疲れ綿になって眠る　千 代
ゆずり葉ややっぱり僕は農を継ぐ　美津子
土壇場では逃げぬ決心秘めている　弘 子
就活でへとへとになる大学生　じろう
切手帳父からもらった宝物　わ こ
春は花切手シートが美しい　光 子
くじ運も避けて行くとはいじわるね　みよし
遺言書人目を避けて書いている　紀 華
玄関に花あり今日は入社式　比ろ志

川柳さんだ（兵庫）　**田中　章子報**

もう何をやっても妻は無関心　忠

無記名でいいなら本音書きましょう　正 和
今日の無駄明日は花咲くこともある　ちあき
引き算で無垢な頃まで戻りたい　喜久子
何もかも新品春のどまんなか　淑 子
新品も年代物も輝いて　つな子
新品の地球が欲しい原爆忌　晃
一着でテープを切ったことがない　哲 男
断ち切った酒の席へと友が呼ぶ　幸 香
怪電話しばらく待たせそっと切る　雅 尚
尻尾切り切った尻尾が暴れ出し　和 雄
世界中大阪弁で値切る義母　雄太郎
女です切端詰まってから強い　美 籠
二円切手今忙しく切られてる　千津子
歳ですと脳の断面見せられる　宣 子
日本食栄養グーとほめられる　順 子
酒代にバランス合わす化粧代　聖 也
バランスが日々悪くなり老いの坂　廣 子
自然界バランス崩す人のエゴ　光 久
バランスを欠いたトップが突っ走る　健 二
増税し収支バランス血が滲む　雅 司
ぴかぴかが少しよごれて二年生　耕 治
ピカピカと首で輝くイミテーション　恭 子
朝の寺びんずるさんを一人占め　俊 昭
ぴかぴかに磨きあげてる夜の蝶　章 子
川柳を愛し咲かせた友悼む　野 薫
妻の酌なかなか酔いがまわらない　キヨミ
母さんの昔話はその辺で　祐 康
花吹雪こんな日がいいピンコロリ　一 子
しょうもない男やけれど付いていく　好 文
隠しても見えていますか恋心　朋 月
春らんまん何もいらないただ歩く　ひとみ
　　ヨシエ

八尾市民川柳会（大阪）　**土田　欣之報**

あの頃の夢の欠片を探してる　朝 子
片道切符のままにふる里遠くなり　賢 子
8パーと8億円は気に食わぬ　紀 雄
鍵穴にピタリ填った今日の運　慶 子
ビジネスは運鈍根で次ねらう　安 男
平成の首輪が締まる消費税　清
探さねばならぬ私の在り方を　恵
運命の分岐に神の匙加減　寿 之
今生の一会と思う花の下　五 柳
奥の手を透かせば見えて来た真　壽 峰
ライオンの群れの中から嫁探し　高 鶩
愛は華運命線を手繰り寄せ　森 子
おみやげをあれこれ探し旅終わる　常 男
卒業という名の切符に感謝する　朋 子
眼鏡何処眼鏡は何処だ眼鏡何処　耀 一
迸る汗へ運からラブレター　欣 之

はびきの市民川柳会（大阪）**永田　章司報**

ご好意に甘えふわふわ生きてます　いさお
泣いたとは言わない祖母の割烹着　美代子
川柳をたかがなどとは言わさない　ダン吉
運命と決めたお方と白寿まで　ヨシ枝
ふわふわの蒲団で金縛りにあう　シルク
サクラサク受験地獄を耐えて春　フ ジ

耐えたのはお互い様と言うてます　さくら
風船がふわふわどこへ飛んで行く　雄太
賽投げてじっくりと待つ運試し　庸佑
子らの為辛い日々をも母は耐え　千鶴子
春ですね紋白蝶が花になる　アヤ子
お互いに呆けないように祈り合い　美喜
ふわふわの若者変える入社式　喜久子
運強く危機一髪で助かった　敏
いい人と言われて仮面はずせない　泰子
趣味三昧悠々自適のはずだった　久仁子
耐えて来た練習花の甲子園　悦子
ふわふわの嫁入り布団見栄があり　かつ美
幸運も不運も知らず恙無し　ちづる
カルチャーに女子会耐えている夫　光男
笑顔にはそっと幸運寄ってくる　みつこ
哲学をもたぬ凡人風見鶏　章司

岩美川柳会（鳥取）　石谷美恵子報

悲しみや喜び夫婦半分こ　圭一郎
糖尿病めし半分の半分こ　蟹郎
半分こ大きい方をくれた母　幸安
善と悪半分ずつが棲んでいる　天翔
相談に乗ってくれないお金持ち　完司
相談へ古老の顔をお借りする　忠良
相談はするが決定自分です　たぬ
先ず先に相談します足腰に　菖子
靴紐をしっかり結び仰ぐ空　重忠
結び目が解けて女は蝶になる　一瑤
結んで開いて今は介護のリハビリに　節子
夕暮れて今日の日記の結び書く　和子
相談は見ざる言わざる結んでる　清帆
弁護士に相談したいことはない　茶子
身に覚えある相談に情がわく　一粋
相談と言われてちょっと身構える　幸子
相談もなく若さ家風を変えました　雅女
相談が見事に咲いたサプライズ　弘子
背なの荷を半分こする夫も老い　美恵子

翠洋会（大阪）　佐々木満作報

乾杯の宴献杯となるやがて　希久子
乾杯の写メール届く嬉しい日　恭昌
乾杯の渦敗者静かに姿消す　舞夢
乾杯をしたら別れてくれますか　義
家人留守周平といる小半日　すみ子
ミステリー作家のペンにある威光　満作
大好きな作家の誘う良い眠り　弘子
ベストセラー印税だけで安泰だ　公平
艶やかな本と法話の寂聴尼　紀子
親不孝悔いて位牌に詫びている　浩二
ほろ苦い思いと食べる春の味　理恵
鏡の中に母に似てきた顔がある　眞澄
正論を通した後の自己嫌悪　捷也
生き甲斐は今日も明日も忙しい　集一
お転婆は私の裏の裏の顔　蕉子
年相応やっと納得する米寿　千歩
古道具捨てて気持ちを整理する　げんえい
時々は自分にも言うアリガトウ　みつ子
きっとくる自分が誰か解らぬ日　日の出
反抗期騒ぐな夫の体験記　正雄
沙羅ちゃんは心配りもチャンピオン　善之
好きやねん会うとドキドキ止まらへん　和夫
桜咲く散る美に心夢になる　照子
一服を何べんもする万歩計　志華子
お医者さんの梯子している花吹雪　桃花
顔を見て狸寝急ぎ其処や此処　知之
どきどきとわくわく老いを寄せつけず　楓楽

京都塔の会　桝本宏子報

豪邸の猫にも滲み出るオーラ　則彦
骨壺に喜怒哀楽を拾い入れ　英旺
この指輪思い切らせた消費税　悦子
華やかなオーラを貰うフラダンス　忠子
消費税わかっていても腹が立つ　弘子
お頭が登場すれば正座する　泰夫
花は根に人は火宅に帰らねば　牛延
月光に与謝野晶子も恋に落ち　知栄
おかえりの声大好きなランドセル　公子
ダージィリンボーンチャイナとマカロンで　みどり
頬骨のあたりゆるんで昼の酒　啓子
ただいまと元気に帰るうさぎ小屋　宏子
大リーグイチローの背に立つオーラ　義昭
骨のある人はペラペラ喋らない　益子
ご苦労さま母の骨壺抱きしめる　万紗子
肩の荷をおろして帰る長い影　求芽

青っぽい彼のオーラに賭けてみる　福子
新入生きらきらオーラ飛び跳ねる　ふりこ
オーラにひかれ歩き遍路の鈴を振る　和友
美しいオーラ男の骨を抜く　欣之
骨にして撒いてくれればそれでいい　弥生
ぽつぽつと私を語る骨密度　保子
帰還兵そんなお人が出ぬように　美津子
帰る事知らずに歩く母認知　五月
説法を語る住職からオーラ　庸佑
帰れない帰したくない夜が明ける　篤子
浮雲に乗ってふる里に帰ろ　朝子
かみ合ってた歯車の日に帰れない　葉子
花便り春のオーラが呼んでいる　弘之
説明を聞きつつ友の骨拾う　かずお

六甲川柳会（兵庫）　伊勢田　毅報

即席の家族になったバスツアー　光久
蕾のままで終りたくない補欠　能子
あいまいな返事大きな荷を背負う　美恵子
あいまいな自供を見抜くプロの技　武臣
あいまいに返事したのが命取り　繁義
おろおろと帰れぬ里の夢を見る　洋一
三流の列でおろおろ生きてます　弘子
おろおろと本音みせないもどかしさ　道子
おろおろを切り抜け母となりました　千賀子
いつになくおろおろとして疑われ　じろう
ぼろ負けで最後に情け代打席　浩司
熱戦を冷静に観る補欠の目　忠貞
今でしょう出した切り札期限切れ　和郎
切り札はどじょう掬いと決めている　武彦
亡母さんの切り札でしたちらし寿司　盛夫
出し惜しみチャンスを逃がす負け試合　敏夫
切り札に黙秘を使う技を知る　政一
社長の秘密全部知ってる部下の乱　茂
切り札を持った菩薩にすがりつく　文香
社の不況傷の舐め合い春遠し　勤
ちょっとだけ酔ったふりして胸さわる　邦子
人材は東京へゆく新年度　洋次郎
何事も起きずに今日の終い風呂　和子
燕来て老母の散歩が長くなる　利子
日帰りの青春切符目がまわる　康子
骨折を気にしながらの深呼吸　博史
うまい酒花とたわむれ青い空　弘
これしきの額で申告寒い春　美穂
桜の下紙のコップに花が浮く　毅
雨の日は雨のテンポで読む詩集　無限

岸和田川柳会（大阪）　佐藤　幸子報

葉桜は宴のあとに光り出す　昭
久米田寺枝垂れ桜が持ち直す　益祥
満開も散り際もよい山桜　香代
やっと春小川きらめく散歩道　和美
おばちゃんが陰気な空気入れ替える　清
マンネリへ頭蓋骨から緩みだす　和子
春ですねマリオネットの糸緩む　紀世子
はりつめた空気がゆるむ時間切れ　喜久子
僕も樹も骨太にしていく陽気　小雪
みどり児の嬉しい夢か口ゆるむ　幸子
頬ゆるむまだ谷あると言い聞かす　ダン吉
ぜひ妻を連れて来たいな美人の湯　隆昭
春風に誘われちょっと翔んで見る　珠子
桜散り葉桜僕ら待っていた　忠太
春や春蝶の紋にもかすみ色　大輔
陽気ですあなたの嘘も約束も　信子
笑う美学教えてくれたチャップリン　保州
正論の緩むあたりに人情味　宏之
散り敷いた花びらも又風情あり　弘子
背を伸ばし春の息吹も深く吸う　英夫
縦糸を緩めて和む三世帯　ひろ子
聞き上手此処だけの口緩めさせ　房惠
しだれ桜ゆく春惜しみこぼれ散る　ほのか
いよやかの郷で語らう小半日　当代
ときめきも花も折々変える色　みつ江
無意識に頬が緩んでくる知らせ　みね
湯に入りつやつやになり逢いに行く　康信
金融緩和僕の財布は膨らまぬ　義泰

豊中もくせい川柳会（大阪）藤井　則彦報

ありし日の書斎そのまま保存する　肇
もう一息ノルマ頑張る朝の靴　庸佑
奥床しい人は隅でもよく目立つ　堅坊
ぞうさんも長いお鼻で通夜の席　とーな
そのままを生きて詩から遠くなる　佳恵
しばらくは二円兎が跳びはねる　幹治
この島にそのまま残る戦さ跡　美佐子
面取りをしすぎ三角形になる　きらり
激励に立てた誓いがゆるぎだす　武彦

のっぺらぼうの地蔵様にも手を合わす　千恵子
月見草人目を忍び夜に咲く　歌留多
何本も包丁使い鯛さばく　美津子
頑張れば頑張るほどにややこしい　勲
方円の器の中にある指標　比ろ志
人目には触れぬところで爪を研ぐ　雀舎
祝う心を形にしますのし袋　(永)玲子
ど忘れを歳や歳やと笑えない　正彦
もう翔べぬ羽を畳んでわらべ唄　ヨシエ
そのままでいいそれは結婚までのこと　葉子
頑張って下さいねとは他人ごと　耕治
胸に掌を重ねてあたたかいいのち　求芽
消費税九九の頑張り役に立つ　巴子
カラオケで上司のオハコ盗り左遷　茂
形式はないようだけどあるのです　久子
夜桜の散歩人目を避けて闇　靖鬼
さりげなく有形無形の恩返し　千鶴子
幸せです家族揃った夕御飯　美籠
病む度に断捨離よぎるあれこれと　(岩)玲子
見栄捨てたら人目も風もあたたかい　美智代
ロボットが頑張れるのも欲の無さ　則彦
瞑想の時間が欲しい多事多端　健二
そのままにしようみんなが丸くなる　見清

川柳藤井寺（大阪）　鴨谷瑠美子報

おおらかな男になあれ鯉のぼり　みつこ
男一匹信念曲げて皿洗い　扶美代
子供でも男と言われ堪えている　フジ子
枯れてなお男社会で生きる華　キーキー
お化粧をしてるが戸籍では男　まつお
男の意地で一番風呂は譲らない　いさお
皆拍手孫の初芸第一歩　絹枝
8億で熊手買うのは芸がない　紀雄
小三治の名人芸がたまらない　勝弘
たかが芸されど芸なり命がけ　美代子
呑むだけが得意の芸と飲みつづけ　清之
手も足も心も弾んで芸の花　弥生
かくし芸俺の財布を出さんかい　光男
ハチパーの家計園芸で補う　シルク
絵手紙で返事をくれる芸達者　喜代子
一芸を追う終点のない切符　龍一
芸をした猿から順に森を出る　瑠美子
トップの座謝る芸が板に付き　英夫
阪堺線路郎水府が住んだ町　一歩
沿線に世界遺産というお墓　六点
男嫌いか心配した子嫁に行き　大子
女の長寿男を食って伸びている　婦美枝

川柳塔みちのく（青森）　稲見則彦報

許し合いながら二人で山を越す　黙人
ふっきれて背中におんぶする夕日　氏加子
孫抱いた妻と喧嘩はやりにくい　龍人
何げないおかずが美味い母の腕　綾子
新しい靴履きかえるタイミング　霜石
本当の顔があります湯上りで　花峯
夫婦箸来し方語る掘り炬燵　ふさゑ
発芽するチャンスは二の次老いの学　洋子
がらがらと捨てた未練が戸を開ける　一湖
病棟に朝陽の賛辞愛満る　花匠
紅添えて母の日贈る白い花　小とみ
金婚式妻に贈った感謝状　一呑
まだ坂があります杖を贈ります　きよし
子に贈る知恵も力も神の意志　一花
贈られた桜満開姉妹都市　隆樹
許してる証に贈る好きな酒　規子
後継ぎが贈る一等米農の幸　つとむ
真っ直ぐに生きた背中を子に贈る　慕情
いたずらな風は海から舞い上がる　ひとし
いたずらな子がおいおい泣く通夜　劦
いたずらはトムとジェリーのせいにする　則彦
守護霊のいたずら書きに道迷う　柳子
白い壁見るといたずらしたくなる　井蛙
いたずらで飢えを凌いだ少年期　呑舟
プライドが見え隠れしてニラの花　和香子
インテリも春にはにきび花盛り　初枝
インテリと云われて悪い気はしない　雅城
被災地の声なき声が聞こえるか　龍馬
呱呱の声この世の波に帆をあげる　美鈴
妻が病み子が病み海の荒れる音　五楽庵
告白の声だピンクに染まる顔　芳生

大山滝句座（鳥取）　新家完司報

昨日より遠出したがる三輪車　芳光
シンプルでベストな形塩むすび　楓花
雨季乾季わたし水陸両用車　くにこ
ミシュランの舌に和食は分かるまい　芳山
桜散る別れに梨が咲く出会い　照彦

年金という補助輪が外れそう　紀の治
渡り鳥和食を食べにやってくる　石花菜
うきうきと過疎の村にもランドセル　幹啓
二つ三つ春風乗せてペダルこぐ　麦青
花でよし葉桜でよし酒もある　博子
サバの目が私を睨むバイキング　寿代
愛称で小学校のクラス会　けいこ
腕の中車は走る運命乗せ　恭子
米寿でもスポーツカーに乗っている　重忠
恐ろしい惚けているのがわかるとき　久子
愛してるなんて言えない世代です　希楽良
もろもろを脱ぎ捨てて今ケアホーム　すみゑ
食べて寝て明日こそはと空元気　仁美
花びらがひらひらキッスしてくれた　完司

川柳あまがさき（兵庫）　加川　靖鬼報

笑顔ひとつ春風になるお年頃　初音
簡単に言うが出来ない日日新た　修平
今日もまた朝の目覚めで誕生す　咲貴
粘ってもお茶も出さない嫌な人　千代子
老いることはじめてなので不安です　洋子
入社式新入社員はればれと　寿美子
お化粧を粘って塗るが皺が見え　雪菜
髪型を変えて旅行の日本地図　よしひさ
春彼岸花を手向けて母を恋う　つな子
新しい靴でも買おう春の音　和子
ライバルが居るから今も走ってる　幸香
ねえあんた五十五年ももったわね　寛十郎
くじけない男が起こすハプニング　晶子
花見酒至福の時を過ごす風　蔦子
生命保険重要なこと小さな字　柳明
お金かかるんですね大人の選挙　宏造
「さよなら」と四文字だけの置手紙　野薫
妻の酌なにか狙いがあるらしい　五月
偶然にしては少々キナ臭い　里江
日本人の心一つにするさくら　靖鬼
春の宵三寒四温燗の酒　祐康
冤罪を訴え続け半世紀　純
あの話頼むお方にもう一杯　富夫
研修の名札に客が気をつかう　耕治
真っ白がグレーになった割烹着　朋月
タバコ税払い続ける弱い意志　茂
納豆を百回混ぜる律義者　正和
日々新たに心を洗う陽が昇る　比ろ志
良い笑顔してると寄ってくる笑顔　かずお
淡淡と生きます欲をみんな捨て　ヨシエ
甘言と思っていても憎めない　美籠
二番目の下心だけ言っておく　見清
マンションで故郷の小川思う春　哲男
花ふぶき両手に抱いて明日のこと　ひとみ

城北川柳会（大阪）　近藤　正報

仏さんみたいな顔で嘘をつく　倫子
母送る釘煮で春を知らされる　五月
丸洗い出来ぬ原発もう要らぬ　堅坊
金返せいま突然に言われても　正
足洗う前に最後のひと仕事　いさお
また今日も嘘つきました仏さま　求芽
僕の過去洗うと一杯垢が出る　弘風
針のない時計の音を聞く余生　集一
若さとはまさにリンゴの丸かじり　洋志
仏壇の鉦をたたいて母を呼ぶ　義昭
桜なら豪華絢爛背割堤　勝弘
有難い仏像人に盗まれる　たもつ
東北の仏がなげく再稼働　一歩
穴の無い男に胡椒かけてやる　和夫
あけすけな長屋と消えた人情味　直樹
草に寝て五臓六腑を洗わんか　志華子
iPSの偉業に目を洗われる　ルイ子
記者会見あけすけに出す自己弁護　千恵子
酒好きの仏にのます花見酒　典子
今見ればモンローそれ程脱いでない　榮子
欲捨てた母は段々仏顔　あさ子
うぐいすの声長閑なり花の宴　満作
孫来れば障子の穴がまた増える　高志
深い穴昨日を全部埋めておく　克己
生かされる命感謝の米洗う　朝子
花筏縫って川面を登る鯉　賢子
裏切りの目にためらいのあとがある　哲矢
来た道を歳の数だけ落とし穴　縣祚
好きやねんあけすけに言うあほやねん　修
花吹雪へ小躍りしてる車椅子　公子
春風に頬あらわれて日向ぼこ　美智子
あけすけに言って笑いを独り占め　麗
猫だとは思っていないうちの三毛　ばっは
人生の穴をお蔭と生きてみる　杁香
さわやかな春を食べてる鯉のぼり　野鶴

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 ねやがわ	15日(日) 14時締切 閉鎖・信じる・タレント・自由吟	寝屋川市立総合センター　4階 〒572-0063 寝屋川市春日町9－9 高田博泉 内　川柳ねやがわ
川柳 藤井寺	15日(日) 14時締切 気楽・小遣・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
豊中 もくせい 川柳会	16日(月) 13時40分締切 機会・逆らう・どちら・自由吟	豊中市中央公民館　3F 阪急曽根駅・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2－8－4　江見見清
川柳 さんだ	17日(火) 13時30分締切 半分・コンビニ・運ぶ ぞろぞろ・自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5－2－4　堀　正和
岸和田 川柳会	21日(土) 14時締切 思案・弾む・ほいほい・シック	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2－13－19 中岡香代
川柳塔 みちのく	21日(土) 17時締切 歌・うぬぼれ・うららか	弘前市桶屋町4－7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-8275 弘前市城西1－3－10　稲見則彦
はびきの 市民 川柳会	22日(日) 14時締切 姿・好む・ゆうゆう・癖	陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8－31－11　塩満　敏
川柳 ふうもん 吟社	22日(日) 13時30分開場 モーション・補う・もうイヤだ	開発ビル 2F　ホール 鳥取市片原1－107 〒689-0202 鳥取市美萩野2－171－3　中村金祥
南大阪 川柳会	23日(月) 18時開場 つまらない・秀でる・奉仕 雑詠	大阪市立住まい情報センター　5F　研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
川柳クラブ わたの花	27日(金) 10時締切 怪物・軽い・痛い・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1－4－8　西川義明
川柳塔 すみよし	28日(土) 14時15分締切 過剰・カード・兆し	住吉区民センター 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2－4－9 古今堂蕉子
和歌山 三幸 川柳会	28日(土) 12時30分開場 たまご・友情・習う	和歌山商工会議所　4階　第2会議室 和歌山市役所西隣 〒640-8570 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」
京都 塔の会	30日(月) 14時締切 ガッツ・作・限る	京都ハートピア　地下鉄丸太町駅⑤出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328－202　都倉求芽
松露 川柳会	30日(月) 19時30分締切 隣・雨傘・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口194－2 山本正光

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

6月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な　ら	5日(木) 14時締切 振る・服・覚悟	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901　安土理恵
城北 川柳会	7日(土) 14時締切 挨拶・逃げる・ちぐはぐ 自由吟	旭区老人福祉センター　3F 地下鉄谷町線千林大宮駅下車③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18　神夏磯典子
富柳会	7日(土) 14時締切 栄・あたふた・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10　TEL 0721-25-0603 川柳とんだばやし富柳会　池　森子
倉吉 川柳会	7日(土) 14時締切 よちよち・世間・味わう	倉吉市　明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072－17 谷口次男
川柳塔 まつえ 吟社	7日(土) 13時45分締切 髪・古代・待つ・ぼちぼち	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366　錦織禮子
八尾市民 川柳会	8日(日) 14時締切 異変・虹・匂う・雑詠	八尾神社内　西郷会館　3F 近鉄八尾駅西口・徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2－1－7　土田欣之
川柳塔 わかやま 吟社	8日(日) 14時10分締切 兼　題＝倉庫・ショック・うろうろ 課題吟＝雨具	和歌山ビッグ愛　〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼　題　〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟　〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 桒原道夫
西宮北口 川柳会	9日(月) 14時締切 技・乗る・べっとり・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急「西宮北口」駅南出口歩3分「プレラにしのみや」 〒662-0084 西宮市樋之池10－18－104　福島弘子
川柳 あまがさき	10日(火) 14時締切 唸る・命・めちゃ・自由吟	尼崎女性センター・トレピエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2－45－8　山田耕治
ほたる 川柳 同好会	10日(火) 13時30分締切 印・長い・わざわざ	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール　蛍池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曽根2－4－1　水野黒兎
あかつき 川柳会	13日(金) 14時締切 虐げる・籠・札束・時事吟	大阪保育運動センター（新谷町第1ビル 2階） 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口南へ3分（道路向い側） 〒581-0014 八尾市中田2－312　前田紀雄
川柳塔 さかい	13日(金) 13時開場 輝く・危ない 折り句＝つねな	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31　村上玄也
川柳大阪	14日(土) 14時締切 叫ぶ・弱・荷物	地下鉄・長堀鶴見緑地線　京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川柳塔 打吹	14日(土) 14時締切 階段・眠る・濡れる	倉吉市上灘町9　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637－3　牧野芳光 方 川柳塔打吹　事務局

主幹・理事長の選任について

川柳塔社

今年は主幹・理事長の改選年に当ります。

立候補者は下記の「主幹・理事長の選任に関する規則」に基づき期間内に事務所（06-6779-3490）へ申し出て下さい。

総務部

主幹・理事長の選任に関する規則

1　主幹・理事長を選任するための投票は、すべての代表役員・執行役員と相談役および参与によって行う。ただし、会計監査は投票に参加せず、選挙を管理して投票結果を常任理事会に報告する。なお、主幹・理事長の選任に関する事務は総務部で担当する。

2　主幹・理事長を選任するための投票は２年ごとを原則とする。ただし立候補者が一人の場合には選挙は行わず無投票にて選任する。

3　主幹・理事長が退任(定年を含む)する場合において後任の立候補者がない場合には、主幹、理事長、副主幹、副理事長が協議の上、次期候補者を推薦する。

4　複数の立候補者がある場合には選挙により決定することとし、最高得票者を当選者とする。

5　主幹・理事長の立候補資格は、同人歴10年以上の者とし、同人15名以上の推薦を得た者、または現任主幹、理事長、副主幹、副理事長協議の上推薦を得た者とする。

6　立候補の受付は、**7月1日**から**10日まで**に川柳塔社事務所総務部宛て必着とし、投票は７月中に所定の用紙によって行う。

7　この規則は、平成23年７月７日から実施する。
この規則の改廃は、常任理事会の決定によらなければならない。

第29回 国民文化祭・あきた2014 文芸祭「川柳の祭典」作品募集要項（概要）

～ 大潟で 響け川柳 未来の風と ～

1. 応募受付期間 平成26年4月1日(火)～6月30日(月)（当日消印有効）

2. 応募規定

(1)作品 一人各題二句詠（未発表作品に限る）

(2)応募料 一人につき1,000円（但し、海外投稿者、身体障害者手帳の写しを添付された方、及び小・中・高校生は無料とします。）

(3)応募方法 所定の応募用紙及び応募票に必要事項を記入し、郵便振替払込金受領証又はその写しを添えて応募してください。

(4)応募先 第29回国民文化祭 大潟村実行委員会事務局
〒010－0443
秋田県南秋田郡大潟村中央1－21
（大潟村教育委員会内）

3. 宿題・選者

《事前投句》小学生・中学生の部
「米」仁多見 千絵（宮城）
「渡り鳥」新家 完司（鳥取）
「自由に作る」高 鶴礼子（埼玉）

《事前投句》高校生・一般の部
「持つ」安藤 紀楽（東京）
「酒」森中 惠美子（大阪）
「滑る」荻原 美和子（神奈川）
「米」川上 大輪（和歌山）

《当日投句》
「ちぐはぐ」長谷川 酔月（秋田）
「マナー」鷲見 敏彦（岐阜）
「美人」篠田 東星（栃木）

第二次選者 大野 風柳（新潟） 平田 朝子（熊本）
雫石 隆子（宮城） 平山 繁夫（兵庫）
小島 蘭幸（広島）

4. 賞（予定） 文部科学大臣賞・国民文化祭実行委員会会長賞・秋田県知事賞・第29回国民文化祭秋田県実行委員会会長賞・秋田県教育委員会教育長賞・大潟村長賞・第29回国民文化祭大潟村実行委員会会長賞・大潟村教育委員会教育長賞・（一社）全日本川柳協会賞・秋田県川柳懇話会会長賞

5. 発表会場 川柳大会（当日投句受付、入選発表、選評、表彰式）
平成26年10月19日(日) 10時30分～16時00分
「ホテルサンルーラル大潟」
入選作品は、「作品集」として刊行し、応募された方（小・中・高校生は入選者）に無料で配布。

6. 問い合わせ先と募集要項の依頼先
〒010－0443
秋田県南秋田郡大潟村中央1－21
（大潟村教育委員会内）
第29回国民文化祭大潟村実行委員会事務局宛
TEL（0185）45－2611
FAX（0185）45－2661

7. 主催者 文化庁、秋田県、秋田県教育委員会、大潟村
大潟村教育委員会、（一社）全日本川柳協会
秋田県川柳懇話会、大潟村川柳倶楽部、
第29回国民文化祭秋田県実行委員会
第29回国民文化祭大潟村実行委員会

柳界展望

★第2回広島県川柳協会誌上大会には518名の応募者があり本社同人特選。

北野　哲男

呱々の声挙の中の小宇宙

★第18回川柳展望全国大会は4月27日、ホテルアウィーナ大阪で開催。参加者173名。同人秀句。

江見　見清

腕の蚊を叩きながらもいい足湯

石橋　芳山

山陰も津軽も貧しさは同じ

片山　忠

食へ食へとうるさいだけのおもてなし

谷口　義

長生きをするので家族葬になり

★第4回高田寄生木賞には229名の応募があった。

大賞　大久保眞澄

ふる里は戦争放棄した日本

高島　啓子

特選

学校を覆う大きな病垂れ

☆小島蘭幸主幹は『尾道文化』No.32号に評論「麻生路郎」を執筆。

▽**出　版**△

◇奥村五月氏（同人・大阪市）は『思い出の記』を上梓。B5判108頁。

▽**ご芳志お礼**△

○中塚礎石氏より金一封を拝受致しました。

▽**訂　正**△

▼5月号＝P31上段23行目、衣替え春秋・秋冬ないポスト→春**夏**・秋冬。

▽**新誌友紹介**△

佐賀市　**馬渡　静子**

長岡市　**森　めぐ**

紹介者　桝本　宏子

山田　葉子

京都府　**勝部　弘子**

紹介者　桝本　宏子

山田　葉子

大阪市　**田中ゆみ子**

紹介者　古今堂蕉子

山鹿市　**松岡　純子**

紹介者　三谷　直男

長岡京市　**松山　悦子**

紹介者　桝本　宏子

山田　葉子

大阪市　**平井美智子**

紹介者　新家　完司

唐津市　**家永真理子**

紹介者　仁部　四郎

吹田市　**早泉　早人**

紹介者　新家　完司

大阪市　**石井　翠**

紹介者　河内　天笑

小野市　**藤原　泰宏**

紹介者　北野　哲男

小野市　**田中　辰夫**

紹介者　北野　哲男

神戸市　**徳留　節**

紹介者　新家　完司

常任理事会＝5月7日(木)

①合同句集について②来年度以降の川柳塔まつりの開催について③第20回川柳塔まつり関連④平成26年度同人総会式次第案

新同人紹介

福島弘子

―てる・哲子・光久・みつ子推薦

酒井健二

―哲男・正和・美籠推薦

水府50回忌
番傘川柳本社八月句会

日　時　**8月6日（水）**18時

締　切　18時30分

会　場　ホテル大阪ベイタワー　TEL 06-6577-1111
大阪市港区弁天町1-2-1
地下鉄中央線弁天町駅・JR環状線弁天町駅すぐ

お　話　「文学的川柳と川柳的文学」
木津川　計氏

宿　題　席題あり　当日は発表
「コメント」　西澤　知子　選
「電　池」　笹倉　良一　選
「信　用」　内藤　光枝　選
「平　和」　西出　楓楽　選
「　腕　」　片岡　湖風　選
各題2句　**会　費**　1,000円

⑤会場費について⑥定例確認事項⑦各部報告事項

次回＝6月6日(金)AM10時～

2014　第８回　松江市川柳大会

日　時　**7月20日**(日)　10時30分 開場
会　場　島根県民会館　３階　大会議室
事前投句（**締切　6月30日**・当日消印有効
当日参加者のみ投句）
「カ モ メ」　石橋　芳山
宿　題　各２句詠（**出句締切　13時**）
「脱　　ぐ」　樋口由紀子　選
「　骨　　」　新家　完司　選
「動　　く」　木天　麦青　選
「キ リ ン」　内田　久枝　選
共　選　「しなやか」　熱田熊四郎　選
松本知恵子　選
欠席投句　1000円（切手不可）
締　切　**7月10日（当日消印有効）厳守**
投句先　〒690-0056 松江市雑賀町366
錦織　禮子　宛
（事前投句・欠席投句とも）
投句方法　便箋大の紙に各題２句・郵便番号
住所・氏名（ふりがな）記入
共選は無記名清記のため２句で結構です
主　催　松江川柳会

川柳「塾」200号突破記念誌上大会

課　題　「　紋　」（家紋・風紋・指紋などの）
一組２句（何組でも可）
選　者
県外選者　兼行　幸枝　　木本　朱夏
熊田　勝利　　小梶　忠雄
水野　黒兎
県内選者　岡田　千茶　　小澤誌津子
柴田由紀子　　東　おさむ
山本　美枝
投句料　一組　１０００円（切手も可）
用　紙　自由　便箋用紙程度の大きさ
各　賞　優秀賞は総合15位まで
参加者全員に
東おさむ編『川柳塾特選句集』呈
締　切　**7月２０日（消印有効）**
発　表　９月号
投句先　〒700-0986 岡山市北区新屋敷町3-15-2
船越　洋行　宛　TEL.086-241-3358
主　催　川 柳「 塾 」

川柳信濃川『納涼川柳誌上大会』

課　題　「　気　」（字結び可）
新作2句　定型のリズムでお願い致します
選　者　碧井　翠渓　　大石　一石
加藤ゆみ子　　木原　広志
佐瀬　貴子　　東馬場美和子
福本　清美　　嶺岸　柳舟
三宅　保州　　古谷龍太郎
横山　昌利　　相田　柳歩
締　切　**7月３１日（消印有効）**
投句料　１０００円（野口英世さんまたは郵便小為替・発表誌）
賞　1位　魚沼産コシヒカリ　10キロ
2～3位　新潟産コシヒカリ 10キロ
1句の得点6点以上　新潟産コシヒカリ 5キロ
ラッキー賞　選句番号 1・百・千百番
新潟産コシヒカリ5キロ
投句先　〒940-2042 長岡市宮本町3-2433
相田　柳峰　宛
TEL 0258-46-5999

柳誌ねぶた七七七号 記念誌上川柳大会

課　題　「　喜　」２句
選　者（７氏共選・順不同）
浪越　靖政　　雫石　隆子
西条　眞紀　　高瀬　霜石
木本　朱夏　　高田宿生木
久保田半蔵門
参加料　一口（２句詠）につき千円
（切手不可・発表誌呈）
投句方法　便箋等の用紙に２句詠。郵便番号・住所・氏名・電話番号明記
複数口の応募も可
賞　最優秀賞に句入り楯と副賞・優秀賞・選者特選句・七にちなんだ特別賞など
締　切　**7月３１日(木)（当日消印有効）**
発　表　「月刊川柳ねぶた」10月号
投句先　〒036-0383 青森県黒石市緑町4丁目133
岩崎雪洲方「ねぶた七七七号記念誌上川柳大会」係
TEL・FAX0172-53-1066
主　催　青森県川柳社

編集後記

★墓の前刻去るままに去らしむる　薫風

★大阪に生まれ大阪で没した作家・梶井基次郎の墓前にはいつもレモンが供えられているという。名著『檸檬』になぞらえて、早世を悼む愛読者が置いたものであろう。

★四月二四日は薫風先生の命日だった。先生の眠る全慶院は近鉄上本町駅から歩くこと二〇分。みどりの風が心地よい昼下がりながら、坂の多い町は汗ばむ。境内には紅白の花ミズキが満開であった。私も墓前にレモンをお供えし、しばし香煙の中で九〇周年大会の成功をお祈りした。

★大阪は緑が少ない。あべのハルカスの展望台でしみじみ痛感した。天王寺公園や大阪城の緑がわずかに点在するのみ。市長はたしか梅田に緑を増やす構想を発表されていたが、私の目の黒いうちに間に合うのだろうか・・・。

★ムーミンでお馴染のフィンランドの作家トーベ・ヤンソンが一九七一年の五月、三重県鳥羽を訪れた際の落書きが初公開された。ホテルのランチョンマットにムーミン初め、ムーミン谷の住人が描かれた楽しいもの。ムーミンが日本酒を飲む図柄が珍しいという。落書きは全国を巡回する「MOOMIN！ ムーミン展」で公開される。あべのハルカス美術館では12月11日から25日まで開催の予定。

★落書きといえば、4月号の「紫の椅子を羨む」の筆者・東野大八先生も絵がお達者だった。道頓堀で河豚をご馳走になったとき、和紙のランチョンマットにさらさらと河豚の絵を描かれた。私になぞらえて丸顔だったので、大笑いしたことを懐かしく思い出している。

★木津川計先生の「後ろめたさの一分の理」は、川柳「葦群」から転載させて頂いた。梅崎流青さんのご厚情に深く感謝申し上げます。

★九〇周年記念合同句集には七六〇名のご参加を頂きました。ご協力ありがとうございました。

（朱夏）

◇4月27日(日)、川柳展望全国大会へ出席した。柳社によって句会の運営方法が異なるのは当然で、それがまた特色にもなるのだが、展望社の場合は川柳塔まつりに比べ違いが多すぎて正直面食らった。

◇まず出題数の多さ。11題は川柳塔まつりの6題と比べるとほぼ倍数。自由吟は8句作って4人の選者へそれぞれ2句づつ出句するという独特のスタイル。

◇次に入選句数が選者に一任されている点。40句の選者もあれば60句の場合もあるといった具合。従って、その題の披講がいつ終るかは最後の秀句が読まれるまで判らない。三才五客に馴れ親しんできた人は少し物足りなさを感じたかも知れない。

◇番傘やふあうすとの大会などもそれぞれに特色があって面白い。一長一短はあるのだろうが、それらも参考にしながら、秋の川柳塔まつりをより素晴らしいものにしたい。

（いさお）

ひとこと

ネット投稿反対

四月号の「ひとこと」嶋本喬氏に反論したい。若者のためのネットでの投稿、私は反対です。

二十代の前半から川柳を始めましたが、当時私の住む田舎では若手といっても五十代の人達でした。

地方新聞の柳壇でデビューして、地区の人に声をかけて頂き、句会に参加したのが縁となり、時々は中断しては復活しながら、今日を迎えています。

高校卒業以来父と二人三脚で事業を興した私には、サラリーマン川柳には、意味が分からぬことが多々あります。

川柳とは皆さんご承知の通り、「穿ち」「ユーモア」「風刺」と、基本的な考え方があります。

従って私には塔誌の今の方針で充分です。若者に阿ることはない、自分が好きで勉強しようと思う人が集うのが、文芸であると私は思います。

（松本　昌）

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

種目「　　」発表（8月号）

地名　　市都道府県

姓雅号

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

同人・誌友　マルで囲んでください。

投句先　〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸　檬　抄　投　句　用　紙

「世渡り」（6月15日締切）

8月号発表

大内　朝子 選 ――共選―― 竹治ちかし 選

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

B　A

地名

市都
県道
府

姓
雅号

切らないで下さい

B　A

地名

市都
県道
府

姓
雅号

左右に同じ句を書いて下さい

個人用 残暑見舞広告 原稿台紙

きりとりせん

料金は払い込み用紙をご利用下さい。

1／9頁　1／6頁　1／3頁　2／3頁　1／2頁　1頁

（ご希望の大きさを○で囲んでください。）

原稿を貼布される方は、
この位置に貼り付けて下さい

締切　6月20日

姓・雅号	住　所	電　話
	〒	（　　）　　－

川柳など掲載希望事項

送付先

〒543－0052　大阪市天王寺区大道1丁目14番17号　花野ビル201

川柳塔社

本社6月句会

とき　6月6日㈮ 13時開場・13時40分締切
―開場時間、締切時間を変更しています。ご注意下さい。

ところ　アウィーナ大阪　4階　金剛
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441

おはなし「鬼百句」　川端一歩
席題「　　」　柿花和夫 選
兼題「拍　手」　牧浦完次 選
「備える」　藤井則彦 選
「　終　」　江見見清 選
「なんで」　米田泰昌 選
「強　引」　小島蘭幸 選
（各題2句以内）

会費　1000円　投句料　500円（切手可）

路郎忌7月句会

7日(月)　午後1時から

兼題「人並み」「見渡す」「ばらばら」「涼しい」「未　練」

作品募集

8月号発表（6月15日締切）

川柳塔（8句）　小島蘭幸 選
水煙抄（8句）　川上大輪 選
愛染帖（3句）　新家完司 選
檸檬抄「世渡り」（2句）　竹治ちかし・大内朝子 共選
一路集（3句）「脳」　岩佐ダン吉 選
「ミーティング」　渡辺富子 選
「おまけ」　原田すみ子 選
初歩教室「しつこい」（3句）　山口光久 担当

9月号

檸檬抄「やさしい」
一路集「こだわる」「インテリ」「逆　転」
初歩教室「狡　い」

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。

(2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。

(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

(4) 各欄への投句数および**投句締切期日の厳守**をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

第33年度　夜市川柳募集

第1回「無　駄」　稲村遊子 選
ハガキに3句　**6月20日**締切

投句先　〒593-8305　堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方　**川柳塔さかい**

定価　八百円（送料86円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）

二〇一四年（平成二十六年）六月一日発行
発行人　小島和幸
編集人　木本朱夏
印刷所　美研アート
発行所　**川柳塔社**
〒543-0052　大阪市天王寺区大道一―一四―一七　花野ビル201号室
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替　〇〇九八〇―四―二九八四七九番

川柳塔のホームページアドレス　http://www.senryutou.com/

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成二十六年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一〇四五号　川柳塔　六月号
定価　八百円（送料　八十六円）

杵つき製法の「すりごま」
オニザキの
つきごま

長い間親しまれてきたオニザキの「すりごま」は、名称を変更し、パッケージを一新いたしました。
オニザキのすりごまは、元々すり鉢ですったゴマではなく、杵と臼を使った杵つき製法で出来た「すりごま」です。
今までと変わらぬ、風味豊かな味わいをご堪能ください。

株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL フリーダイヤル 0120-30-5050

心を尽くし　思いを尽くし　知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団　湯川胃腸病院

消化器科　放射線科　脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設

大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2　TEL 06-6771-4861
http://www.yukawa.or.jp

雑誌 05703－6